京都府遺跡調査報告書

第 13 冊

栗ケ丘古墳群

1989

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻 頭 図 版

(1) 栗ケ丘古墳群全景（北西から）

(2) 2号横穴玄室（北から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，昭和56年度の設立以来，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。その間，綾部市を含む中丹地域における発掘調査の件数も増加し，新たな考古資料の発見があい次いでいます。

本書には，昭和60年度から同62年度にかけて発掘調査を行った綾部市小呂町所在の栗ケ丘古墳群の調査成果を収録しました。この古墳群は，6世紀の前半から後半まで継続的に営まれた，総数12基の円墳からなる後期の群集墳であります。今回の調査では，12基のうち11基までを発掘し，横穴式石室ではなく，すべてが木棺を直接土中に埋葬した古墳であることを確認しました。さらに，古墳のまわりの丘陵斜面で，横穴3基と土壙墓10基が発見され，特異な群集墳のあり方を提示しました。一つの群集墳の姿をほぼ明らかにしたものとして，当地域の古代史を考える上で，重要な資料になるものと考えられます。

本調査にあたっては，発掘調査を依頼された京都府企業局をはじめ，京都府教育委員会，綾部市教育委員会などの関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・厳寒の中で多くの方がたが熱心に各作業に従事していただきました。ここに記して，感謝したいと存じます。

平成元年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1. 本書は，京都府綾部市小呂町に所在する栗ケ丘古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，京都府企業局の依頼を受けて，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。調査に係る経費は，京都府企業局開発事業課が負担した。
3. 現地の発掘調査は，昭和60年度から同62年度までの３か年に分けて行い，整理・報告書作成は，昭和63年度と平成元年度の２年間行った。
4. 発掘調査は，調査第２課辻本和美・水谷寿克・伊野近富・引原茂治が担当して行った。
5. 本書の執筆は，引原茂治が行った。
6. 写真は，遺構を伊野近富・引原茂治が，遺物を高橋猪之介・田中　彰が撮影した。
7. 本書の編集・校正は，劉　和子の協力を得て，引原茂治・平良泰久・土橋　誠が担当した。

目　　次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　位置と環境…… 3
　第３節　調査経過…… 5
第２章　古墳の調査…… 7
　第１節　１号墳…… 7
　第２節　２号墳…… 8
　第３節　３号墳……10
　第４節　４号墳……13
　第５節　５号墳……15
　第６節　６号墳……17
　第７節　７号墳……18
　第８節　８号墳……22
　第９節　９号墳……23
　第10節　11号墳……26
　第11節　12号墳……29
第３章　横穴・土壙墓の調査……31
　第１節　１号横穴……31
　第２節　２号横穴……32
　第３節　３号横穴……33
　第４節　土壙墓……34
第４章　考察……38
　第１節　出土土器について……38
　第２節　遺構について……40
　第３節　栗ケ丘古墳群の構造……48
　第４節　栗ケ丘古墳群の周辺……49

挿 図 目 次

第 1 図　周辺遺跡分布図…… 4
第 2 図　1号墳墳丘断面図…… 7
第 3 図　2号墳墳丘断面図…… 9
第 4 図　3号墳墳丘断面図……11
第 5 図　4号墳墳丘断面図……13
第 6 図　5号墳墳丘断面図……15
第 7 図　6号墳墳丘断面図……17
第 8 図　7号墳墳丘断面図……19
第 9 図　7号墳周溝内遺物出土状況図……20
第 10 図　8号墳墳丘断面図……22
第 11 図　9号墳墳丘断面図……24
第 12 図　11号墳墳丘断面図……26
第 13 図　12号墳墳丘断面図……30
第 14 図　須恵器杯身立ち上がり指数分布図……39
第 15 図　土器分類図 1 ……41
第 16 図　土器分類図 2 ……43
第 17 図　京都府内横穴分布図……47

表 目 次

第 1 表　京都府内横穴地名表……46
第 2 表　須恵器法量表……52
第 3 表　土師器法量表……57

図 版 目 次

図版第1　遺跡　古墳群分布図

図版第2　遺跡　(1) 1号墳墳丘実測図　(2) 1号墳掘削後墳丘実測図
(3) 1号墳主体部実測図　(4) 4号墳墳丘実測図
(5) 4号墳掘削後墳丘実測図

図版第3　遺跡　(1) 2・3号墳墳丘実測図　(2) 2・3号墳掘削後墳丘実測図

図版第4　遺跡　(1) 2号墳第2主体部実測図　(2) 2号墳第1主体部実測図
(3) 3号墳第1・第2主体部実測図　(4) 3号墳第3主体部実測図

図版第5　遺跡　(1) 5・6号墳墳丘実測図　(2) 5・6号墳掘削後墳丘実測図

図版第6　遺跡　(1) 5号墳主体部実測図　(2) 5号墳土壙5-1実測図
(3) 6号墳主体部実測図

図版第7　遺跡　7・8・9・11号墳墳丘実測図

図版第8　遺跡　(1) 7号墳掘削後墳丘実測図　(2) 7号墳第1主体部実測図
(3) 7号墳第2主体部実測図

図版第9　遺跡　8・9号墳掘削後墳丘実測図

図版第10　遺跡　(1) 8号墳主体部実測図　(2) 9号墳第1主体部実測図
(3) 9号墳第2主体部実測図　(4) 9号墳第4主体部実測図

図版第11　遺跡　(1)11号墳掘削後墳丘実測図　(2)11号墳第1・第2主体部実測図
(3)11号墳第3主体部実測図　(4)11号墳第4主体部実測図

図版第12　遺跡　(1)12号墳墳丘実測図　(2)12号墳掘削後墳丘実測図
(3)12号墳主体部実測図

図版第13　遺跡　横穴・土壙墓分布図

図版第14　遺跡　1号横穴実測図

図版第15　遺跡　2号横穴実測図

図版第16　遺跡　3号横穴実測図

図版第17　遺跡　土壙墓実測図(1)

図版第18　遺跡　土壙墓実測図(2)

図版第19　遺物　1・2号墳出土土器実測図

図版第20　遺物　3号墳出土土器実測図

図版第21　遺物　3・4号墳出土土器実測図

図版第22　遺物　4・5・6号墳出土土器実測図
図版第23　遺物　7号墳出土土器実測図
図版第24　遺物　7・8・9号墳出土土器実測図
図版第25　遺物　9・11号墳出土土器実測図
図版第26　遺物　11号墳出土土器実測図
図版第27　遺物　12号墳出土土器実測図
図版第28　遺物　1・2号横穴出土土器実測図
図版第29　遺物　3号横穴・土壙墓1出土土器実測図
図版第30　遺物　土壙墓1出土土器実測図
図版第31　遺物　土壙墓1～6出土土器実測図
図版第32　遺物　土壙墓7出土土器・玉・石製品実測図
図版第33　遺物　鉄鏃実測図
図版第34　遺物　鉄製品実測図
図版第35　遺跡　古墳群全景
図版第36　遺跡　(1)1号墳全景　(2)1号墳主体部検出状況
図版第37　遺跡　(1)2・3号墳全景　(2)2号墳第1主体部
図版第38　遺跡　(1)2号墳下層古墳検出状況及び第2主体部
(2)2号墳下層古墳周溝断面
図版第39　遺跡　(1)3号墳調査前全景　(2)3号墳第1主体部
図版第40　遺跡　(1)3号墳第2主体部　(2)3号墳第3主体部
図版第41　遺跡　(1)4号墳全景　(2)4号墳土壙4-1
図版第42　遺跡　(1)5号墳調査前全景　(2)5・6号墳全景
図版第43　遺跡　(1)5号墳主体部　(2)5号墳土壙5-1
図版第44　遺跡　(1)6号墳調査前全景　(2)6号墳主体部
図版第45　遺跡　(1)7号墳調査前全景　(2)7号墳全景
図版第46　遺跡　(1)7号墳第1主体部　(2)7号墳第2主体部
図版第47　遺跡　(1)7号墳周溝内土器出土状況　(2)7号墳周溝断面
図版第48　遺跡　(1)8・9号墳調査前全景　(2)8・9号墳全景
図版第49　遺跡　(1)8号墳全景　(2)8号墳主体部鉄刀出土状況
図版第50　遺跡　(1)9号墳調査前全景　(2)9号墳第1主体部
図版第51　遺跡　(1)9号墳第2主体部　(2)9号墳土壙9-2
図版第52　遺跡　(1)11号墳調査前全景　(2)11号墳全景

図版第53	遺跡	(1)11号墳第1主体部	(2)11号墳第2主体部
図版第54	遺跡	(1)11号墳第4主体部	(2)11号墳第3主体部
		(3)12号墳調査前全景	
図版第55	遺跡	(1)12号墳全景	(2)12号墳主体部
図版第56	遺跡	(1)1・2号横穴南半部	(2)3号横穴・土壙墓群
図版第57	遺跡	(1)1号横穴	(2)1号横穴玄室
図版第58	遺跡	(1)2号横穴	(2)2号横穴玄室
図版第59	遺跡	(1)3号横穴	(2)3号横穴玄室
図版第60	遺跡	(1)土壙墓1	(2)土壙墓1土器出土状況
図版第61	遺跡	(1)土壙墓3	(2)土壙墓4
図版第62	遺跡	(1)土壙墓2	(2)土壙墓2土器出土状況
		(3)土壙墓5	
図版第63	遺跡	(1)土壙墓6	(2)土壙墓8
図版第64	遺跡	(1)土壙墓7	(2)土壙墓7土器出土状況
図版第65	遺跡	(1)土壙墓9	(2)土壙墓10
図版第66	遺物	1・2号墳出土土器	
図版第67	遺物	3号墳出土土器	
図版第68	遺物	4号墳出土土器	
図版第69	遺物	5・6号墳出土土器	
図版第70	遺物	7号墳出土土器	
図版第71	遺物	7・8号墳出土土器	
図版第72	遺物	9号墳出土土器	
図版第73	遺物	11号墳出土土器(1)	
図版第74	遺物	11号墳出土土器(2)	
図版第75	遺物	12号墳・1号横穴出土土器	
図版第76	遺物	2・3号横穴出土土器	
図版第77	遺物	3号横穴・土壙墓1出土土器	
図版第78	遺物	土壙墓1出土土器	
図版第79	遺物	土壙墓2・3・4・5出土土器	
図版第80	遺物	土壙墓6・7出土土器，7号墳出土紡錘車	
図版第81	遺物	(1)玉類	(2)鉄鏃
図版第82	遺物	鉄製品	

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

今回報告する栗ケ丘古墳群は，京都府綾部市小呂町田坂に所在する。綾部市街地から北方へ直線距離にして約3.5kmのところである。綾部市街地の北側には，西流する由良川が横たわり，そのさらに北には，弥生時代末から古墳時代にかけての大規模な墳墓群などがある久田山などの低い丘陵が連なっている。これらの丘陵の北側に，旧村名によって「吉美盆地」と呼ばれる小盆地がある。栗ケ丘古墳群は，この小盆地の北側の通称「城山」から南に向かってのびる河岸段丘上に位置する。

栗ケ丘古墳群の調査は，綾部工業団地造成事業に伴うものである。造成事業を実施する京都府企業局開発事業課は，その実施前に，京都府教育委員会文化財保護課に対して造成予定地内の埋蔵文化財の分布調査を依頼した。これをうけて，文化財保護課は，昭和58年度に分布調査を行った。(注1) この調査成果をもとに両課の協議が行われ，当調査研究センターに調査が依頼されることになった。当調査研究センターは，京都府企業局開発事業課の依頼をうけて，昭和60年度から栗ケ丘古墳群の調査に着手した。(注2) 調査に係わる経費は，京都府企業局開発事業課が全額負担した。

なお，この造成事業に関しては，栗ケ丘東古墳・北谷城跡・西八田城跡の調査(注3)も実施した。これらの調査の結果，栗ケ丘東古墳は古墳ではないことが，北谷城跡の調査では，城跡の範囲が開発予定地に及んでいないことが判明した。西八田城跡では，堀切と溝を検出したものの，その性格や時期を決める手掛りとなる出土遺物がなく，西八田城跡が城跡であるのか否かについても不明であった。

栗ケ丘古墳群の調査にあたっては，まず現地調査を昭和60年度から62年度にかけて実施し，昭和63年度に遺物整理と出土鉄製品の理化学的処理，平成元年度に整理報告作業を行った。以上の調査においては，周到な準備を行うとともに，下記のとおり，調査に伴う組織を決定して，調査を実施した。

調査主体者　福山敏男（理事長　昭和60～平成元年度）
調査責任者　荒木昭太郎（事務局長　昭和60～平成元年度）
調査担当責任者　堤圭三郎（調査課長　昭和60年度・61年6月まで）
　　中谷雅治（調査課長　昭和61年度，次長　昭和62～平成元年度）

	杉原和雄（調査第２課長　昭和62～平成元年度）
事　務　局	白塚　弘（総務課長　昭和60年度）
	中西和之（総務課長　昭和61年度）
	田中秀明（総務課長　昭和62・63年度）
	山本　勇（次長　平成元年度）
調査担当者	水谷寿克（主任調査員　昭和60・61年度，調査第２係長　昭和63・平成元年度）
	辻本和美（調査第１係長　昭和62年度）
	伊野近富（調査員　昭和60年度）
	引原茂治（調査員　昭和61年度，主任調査員　昭和62～平成元年度）

調査にあたっては，各大学の学生諸君や地元の方々に多数参加していただいた。また，依頼者である京都府企業局開発事業課や京都府教育委員会，京都府綾部地方振興局，京都府中丹教育局，綾部市教育委員会，綾部市企画総務部振興対策室，吉美地区連合自治会，地元小呂・星原各自治会，綾部史談会など，多くの関係諸機関にご協力いただいた。特に，綾部市教育委員会技師中村孝行氏(当時，現綾部市立吉美小学校教諭)からは，格別のご協力・ご教示をいただいた。以上の多くの方々に感謝の意を表します。

調査参加者

岩崎裕隆・繁田　豊・谷口康夫・赤井敏行・佐竹尊樹・塩見幸三・中坪央暁・立川明浩・中井英策・黒田康夫・白波瀬正幸・村木　伸・泉善太郎・出口貴志野・桑谷久美子・四方三智子・高野美和・村尾春代・丹新千晶・吉井雅代・山本弥生・関本典子・由良秀樹・佐々木幸徳・藤田順基・塩見　学・中村信章・西田博紀・山本由美・藤山眞理・平魯基永・山口陽一郎・大槻勝康・村上祐樹・山口正明・大槻智彦・川見晋也・堀　美幸・藤原恵子・渡辺節子・上田律子・大槻純子・塩見京子・山本賢治・田中英行・斉藤啓子・仲井美香子・藤山留美・吉崎直美・伊勢田恵美子・今井助雄・柏原春雄・大槻伊太郎・大槻熊太郎・今井和三郎・安野正夫・白木　茂・四方直一・坂本　弘・森岡義雄・高橋清一・大槻與三郎・丸山　昇・大槻和子・白木琴枝・繁尾善治・石戸良和・今井ヒサエ・柏原きみ枝・今井とめ・四方勝蔵・白木良夫（順不同・敬称略）

第2節　位置と環境

吉美盆地は，由良川の支流である八田川の下流域にあたる。盆地の南辺を八田川が西流している。この八田川の支流とも言うべき小河川の小呂川が盆地の西辺を南流しており，盆地の南西隅で八田川と合流する。この小呂川によって形成された河岸段丘上に栗ケ丘古墳群は存在する。この河岸段丘は，さらに浸食をうけて，出入りの多い複雑な地形を呈する。盆地の北西側に位置するこの段丘上には，栗ケ丘古墳群のほかに，田坂野古墳群・石井根古墳群・坊主山古墳群などがある。

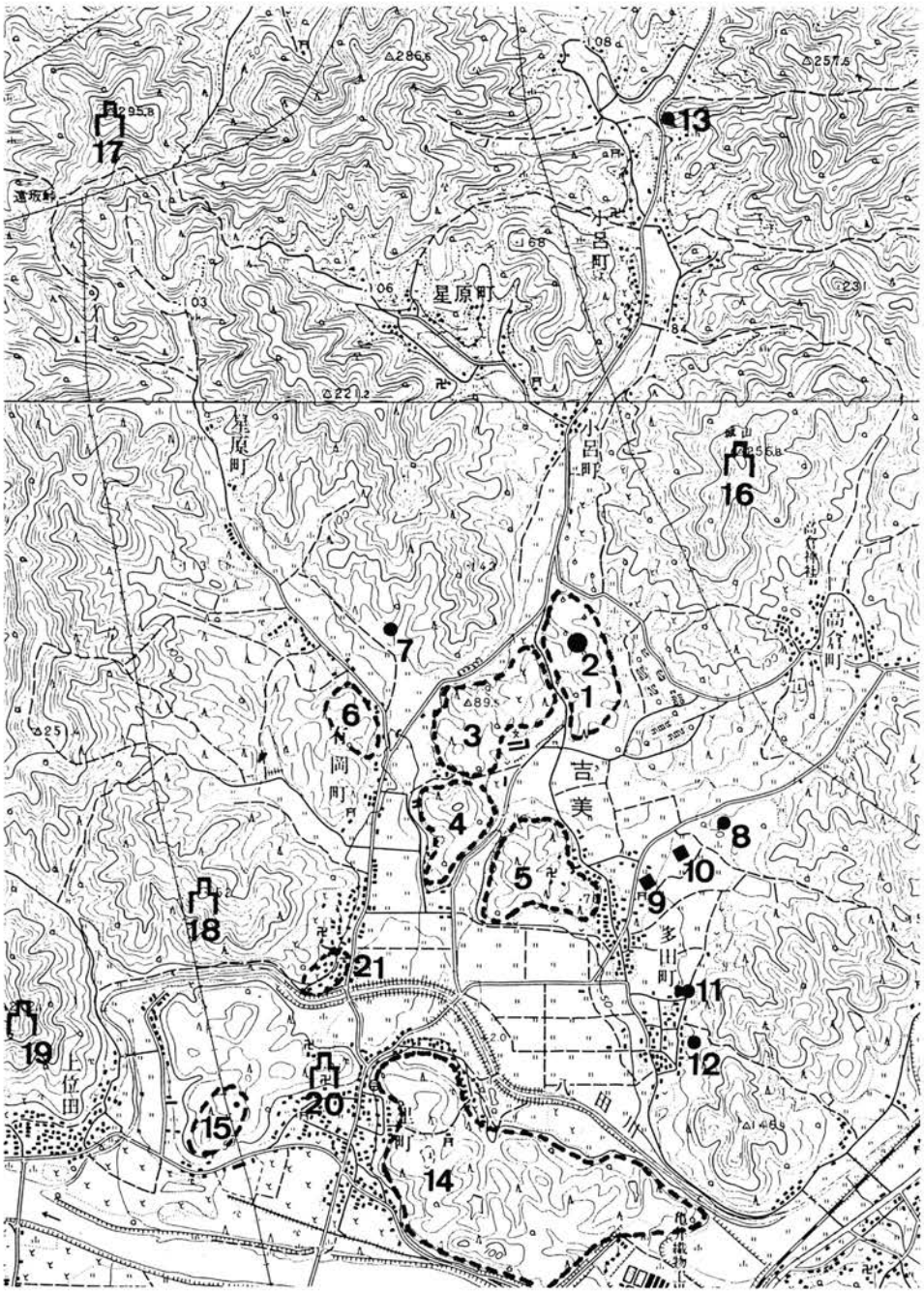
この盆地内で最も注目すべき遺跡は，菖蒲塚古墳・聖塚古墳である。これら両古墳は，いずれも方墳であり，緩やかな傾斜地に位置する。昭和58年度に綾部市教育委員会によって周濠部が発掘調査されており(注4)，ことに聖塚古墳は，一辺54mあまりの大規模な方墳として知られている。両古墳とも，葺石・段築・埴輪を有し周濠を巡らす典型的な古墳時代中期の古墳でありながら，方形という丹波地方の伝統的な平面形をもつ点が注目される。これら両古墳は，北丹波一帯の最高首長墓(注5)とみられている。

この盆地内には，上記の古墳群のほかにも多くの古墳が分布している。前方後円墳の城跡古墳，横穴式石室をもつキツネ塚古墳などである。また，盆地南側には，中丹地域でも有数の古墳群として知られる久田山古墳群がある。この久田山古墳群については，綾部市街地と由良川の間に位置する集落遺跡である青野遺跡に関連するものという見方もある。

栗ケ丘古墳群から北方約1.6kmのところに小谷横穴がある。全壊状態で現存していないが，そこから出土した土器が綾部市教育委員会に保管されている。丹波地域で『京都府遺跡地図』に登載されている横穴は，瑞穂町三ノ宮の三ノ宮校裏山横穴と小谷横穴の2か所だけである。

栗ケ丘古墳群の西側に隣接して，田坂野古墳群がある。14基の円墳が散在する。昭和40年にそのうち5基が調査されている(注6)。いずれも木棺直葬墳であり，築造時期は6世紀から7世紀にかけてとされる。栗ケ丘古墳群とは，新しい切り通しの道路をへだてるのみであり，本来は一体のものであるかもしれない。同様に，田坂野古墳群の南側に隣接する石井根古墳群も，一体のものとみることもできよう。ただ，坊主山古墳群は，方墳や規模の大きい円墳があり，若干様相を異にする。

吉美盆地周辺の古墳は，菖蒲塚・聖塚古墳と久田山古墳群の大多数の古墳以外は，ほとんどが古墳時代後期のものとみられる。また，上記キツネ塚古墳と久田山古墳群の一部を除いて，ほとんどが木棺直葬墳である。なお，吉美盆地内では，いまのところ，これらの古墳に関連する集落跡は確認されていない。今後に期待したい。



第１図　周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 栗ケ丘古墳群　2. 横穴・土壙墓群　3. 田坂野古墳群　4. 石井根古墳群　5. 坊主山古墳群
6. 二ノ宮古墳群　7. 奥地古墳　8. 上多田古墳　9. 聖塚古墳　10. 菖蒲塚古墳　11. 城跡古墳
12. キツネ塚古墳　13. 小谷横穴　14. 久田山古墳群・久田山遺跡　15. 里古墳　16. 高倉城跡
17. 高波山城跡　18. 有岡城跡　19. 位田城跡　20. 仏南寺城跡　21. 散布地

第3節　調　査　経　過

栗ケ丘古墳群の現地調査は，昭和60年度から62年度まで，3か年にわたって実施した。昭和60・61年度は，古墳の調査を行った。この古墳群は，12基の古墳からなるが，そのうち10号墳と名付けられた古墳は緑地として保存される予定であり，それを除いた11基の古墳を調査した。60年度には3・5号墳の2基，61年度には1・2・4・6・7・8・9・11・12号墳の9基，および3号墳の継続調査を行った。62年度には，横穴3基・土壙墓10基の調査を行った。

1.　昭和60年度

昭和60年度の調査は，11月25日から開始した。草刈りの後，1～6号墳の縮尺1/100の墳丘測量図の作成を行った。それと並行して，掘削作業を始めた。3・5号墳は本調査を実施し，1・2・6号墳については表土を除去して埋葬主体部の有無を調べる試掘調査を行った。3号墳からは2基の主体部を検出した。これらの主体部の下層にさらに1基の主体部があることも確認した。5号墳からは1基の主体部を検出した。また，墳丘外から土壙1基を検出した。昭和61年3月19日に関係者説明会を実施し，3月31日に60年度の調査を終了した。

2.　昭和61年度

昭和61年度の調査は，7月2日から開始した。これに先立ち，業者委託により，測量用の基準点を設置した。草刈り・樹木伐採の後，昨年度試掘され表土が除去されている1・2号墳，続いて6号墳の掘削を開始した。また，昨年度に確認した3号墳の下層主体部についても全容を検出し，掘削した。1・6号墳は主体部が1基であるが，6号墳の主体部からは玉類が出土した。2号墳についても，この時点で確認した主体部は1基であった。このような掘削作業と並行して，7・8・9・11号墳およびその周辺の地形測量を行った。

続いて，9号墳・8号墳・7号墳の順に掘削に着手した。7・9号墳からは，それぞれ主体部4基を検出した。8号墳からは主体部1基を検出した。また，7号墳の周溝底部から供献用とみられる一群の須恵器が出土した。

10月11日には現地説明会を開催した。地元の歴史に関心をもつ方々や学校関係者など，約70名が参加された。

現地説明会終了後，4号墳の掘削，12号墳の墳丘測量・掘削を行った。4号墳については，盗掘をうけており，主体部は残存していなかった。12号墳からは，主体部1基を検出した。また，11号墳は緑地域と開発予定域の境界付近に位置しており，そのどちらに属するのか微妙であったが，結局開発予定地に含まれることがわかり，調査を行った。11号墳

からは主体部４基を検出した。これら古墳の調査と並行して，７～９号墳が位置する広い丘陵上の平坦地の遺構確認調査を行ったが，顕著な遺構・遺物は存在しなかった。

12月24日にヘリコプターによる航空撮影を行い，その後，各古墳の墳丘断ち割り作業を行った。この段階で，２号墳の墳丘重複を確認し，下層墳丘に伴う主体部および周溝を検出した。

この間，現地説明会終了後から，５号墳と９号墳の間に，造成事業に伴う工事用道路が敷設された。そのために削り取られた丘陵の断面に，逆台形状の黒色土の落ち込みが露呈した。落ち込みの底部には，土師器甕とみられる土器片が含まれていた。その地点は，５号墳の西側にあたる。なんらかの遺構である可能性が高いので，古墳群の調査が一段落した時点で，急遽周辺の試掘および黒色土の掘削を行ったが，年度末のため，その性格をつきとめるにはいたらなかった。このほか，５号墳北側斜面からも地面が陥没した部分を確認した。

昭和62年３月12日に関係者説明会を開催し，３月20日に器材撤収などを行い，昭和61年度の調査を終了した。

3.　昭和62年度

昭和62年度の調査は，昨年度確認した黒色土の落ち込みや地面の陥没部分の性格を究明するため，協議を重ねた末，７月13日から開始した。まず，５号墳西側から北側にかけての丘陵斜面の表土を重機によって除去した。その後，黒色土の落ち込み部分から掘削を開始した。その結果，底部から須恵器・土師器が出土し，排水溝状の溝も確認できたので，横穴と判断した。地面の陥没部分からもその底部から土器や排水溝を検出し，横穴であることがわかった。そのため，最初に検出したものを１号横穴，つぎに検出したものを２号横穴と名付けた。その後，２号横穴と対面する３号墳南側斜面も掘削し，３号横穴と土壙墓１・２を検出した。

９月５日に現地説明会を開催した。一般市民の方々や教育関係者など約70名が参加された。これ以後，２号横穴から土壙墓１にかけての丘陵斜面を重機によって表土除去し，土壙墓１・２の東側から土壙墓３～10を検出した。

最後に，調査地内の掘削後の地形測量を行い，器材等の撤収をして，10月29日に現地調査を終了した。この間，10月20日に綾部市立中筋小学校の先生や児童諸君が，22日に綾部市立綾部小学校の先生や児童諸君が，現地見学された。

第2章　古 墳 の 調 査

栗ケ丘古墳群は，12基の古墳からなる。このうち11基の古墳について調査した。これらの古墳は，すべて円墳であり，埋葬主体部は木棺直葬である。また，これらの古墳は，基本的に，旧表土上から周溝を掘り込み，その排土等を内側に盛りあげて墳丘を構築する。

なお，各古墳を説明するにあたり，以下のとおりとしたい。掘削後の周溝の幅については，周溝の外側肩部と同高の墳丘斜面部までの距離を周溝幅とする。墳丘径については，周溝の外側肩部と同高の墳丘斜面部と，相対する同様の部分までの距離を墳丘径とする。出土土器の法量等については，第１・２表を参照されたい。

第１節　１　号　墳

細い丘陵の稜部から南西側斜面にかけて墳丘が築かれている。この古墳群のなかでは，最も北側に位置する古墳である。

1.　墳丘

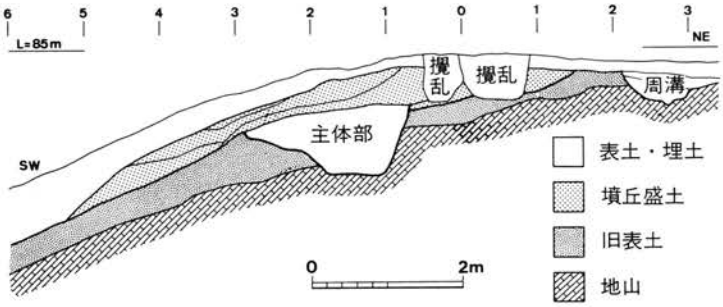
調査前の状況では，直径約9mで，高さは稜線側で約0.4m・斜面側で約2mである。形状はやや楕円気味である。稜線側を中心に斜面側に向かって周溝状の窪みがめぐる。

墳丘は，旧表土とみられる黒色土上に盛土して形成されている。主に斜面側に盛土される。掘削後の墳丘径は7.4mである。稜線側を中心として，幅0.5～1m・深さ30～50cmの周溝が，墳丘をほぼ半周する。

主体部は，旧表土上に若干の盛土を行ってから設けられ，棺埋納後，さらに盛土をしているものとみられる。現状では盛土上部は流失しているが，当初からあまり厚く盛土されていなかったものとみられる。

2.　埋葬主体部

埋葬主体部は１基であり，長さ約3.5m・幅約1.5mの長方形墓壙である。検出面からの深さは，約0.9mである。墓壙の長



第２図　１号墳墳丘断面図

軸方向は，N—52°30′—Wである。墓壙は，墳頂部南西側に設けられており，墓壙南西辺は，墳丘斜面にかかっている。墓壙南西側は，緩やかな傾斜をもって掘り込まれており，棺側で急傾斜となる。墓壙底部には，主体部主軸に直交する3条の溝状の掘り込みがある。墓壙西隅から須恵器提瓶H1・土師器杯S1が出土した。墓壙底部から約0.8m上方であり，棺埋納後に墓壙上におかれたものとみられる。

木棺の痕跡は，墓壙北東側で検出した。長軸方向は，墓壙とほぼ同様である。棺底は平坦であり，箱形木棺とみられる。棺は，長さ約2.3m・幅約0.6mと推定される。棺内からは，遺物は出土していない。

3.　**出土遺物**(図版第19・66)

埋葬主体部出土遺物　須恵器提瓶S1は，肩部にカギ状釣手をもち，口縁端部は玉縁状になる。体部前面は同心円状のカキ目調整，背面はヘラケズり後ナデ調整する。土師器杯H1は，体部外面下半がヘラケズリ，内面に横方向がハケ目調整である。

表土・周溝埋土出土遺物　須恵器提瓶S2は，大形のもので，環状の釣手をもつ。外面はタタキ後カキ目調整，内面には同心円状のタタキが残る。頸部には1条の沈線がめぐり，口縁端部は丸く終わる。

第2節　2　号　墳

2号墳は，1号墳の南東側約40mに位置する。丘陵の稜線付近から南西側斜面にかけて墳丘が築かれる。なおこの古墳は，2基の墳丘が重なっていることが，墳丘断ち割りの段階で判明した。

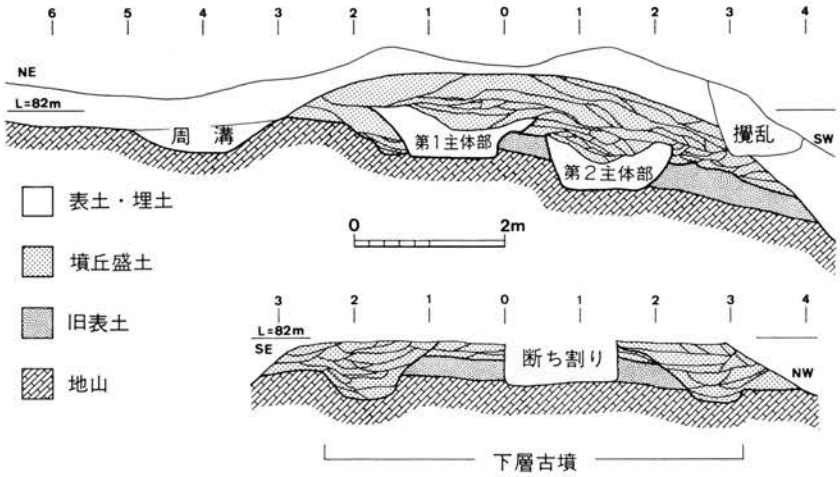
1.　**墳丘**

調査前の状況では，直径約9m，高さは稜線側で約0.8m・斜面側で約2mである。形状はいびつな円形である。稜線側に周溝状の窪みがみとめられる。なお，頂部には後世の攪乱による窪みがある。

上記のとおり，この古墳は2基の墳丘が重複している。仮に，現状の墳丘を上層古墳，その下部から検出した墳丘を下層古墳とする。

下層古墳は，旧表土上から周溝を掘り込み，その排土等を内側に盛り上げて墳丘を構築している。墳丘の直径は，約4mである。周溝は，幅1～1.5m・深さ20～40cmで，墳丘をほぼ半周している。この下層古墳に伴う主体部を，第2主体部とする。

上層古墳は，墳丘の範囲を稜線側に拡張し，下層古墳を覆い込んでいる。構築方法は下層古墳と同様で，地山に周溝を掘り込み，その排土等を内側に盛り上げて墳丘を形成している。掘削後の墳丘径は7.3mである。周溝は，幅1～2m・深さ30～50cmであり，稜線を



第3図　2号墳墳丘断面図

中心として墳丘をほぼ半周する。

この上層古墳は，下層古墳の墳丘の高さまで盛土を行って主体部を設け，棺埋納後にさらに盛土をしている。盛土は，墳丘中央から外側にむかって行われている。この上層古墳に伴う主体部を第1主体部とする。

2. 埋葬主体部

第1主体部　長さ約2.8m・幅約2.1mの長方形墓壙である。検出面からの深さは，約0.7mである。墓壙の長軸方向は，N—50°—Wであり，ほぼ北西から南東方向である。墓壙は，上層古墳墳頂部のほぼ中央に設けられる。

木棺の痕跡は，墓壙中央やや斜面側寄りで検出した。長軸方向は，墓壙と同様である。棺底は平坦であり，箱形木棺とみられる。棺の規模は，長さ約1.8m・幅約0.7mと推定される。棺内南東側から，須恵器杯蓋2点・杯身1点が重なった状態で，斜めに傾いて転落したような状態で出土した。墓壙底部から約20cm上方であり，棺上の副葬品とみられる。棺内北西側底部から鉄鏃3点が出土した。切先は北西方向である。このような状況から，遺体の頭位は南東側とみられる。

第2主体部　長さ約2.1m・最大幅約1.4mの台形気味の長方形墓壙である。深さは，約0.7mである。墓壙の長軸方向は，N—26°—Wであり，第1主体部よりやや北側に向く。墓壙は，下層古墳墳頂部のほぼ中央に設けられる。木棺の痕跡は確認できなかった。

墓壙南東側底部付近から，須恵器杯蓋1点・杯身1点が，左右に並んで出土した。杯身は伏せられた状態である。また，墓壙北西側からは，土師器壺1点が，底部付近から出土した。この主体部からは，遺体の頭位を示す遺物は出土していないが，須恵器杯蓋・杯身

を枕と仮定すれば，南東側と推定される。

3.　**出土遺物**(図版第19・33・66・81)

第1主体部出土遺物　須恵器杯蓋S4・S5は，内面口縁端部に沈線状の形骸化した段をめぐらす。外面の天井部と口縁部の境には，形骸化した稜をもつ。杯身S7は，斜め上方へ低く立ち上がる口縁部をもつ。

鉄鏃T1は，柳葉形の平根式の有茎鏃で，全長17.1cm・腸抉り部の残存幅は3.1cmである。鉄鏃T12は，三角形の平根式有茎鏃で，刃部は二等辺三角形状である。全長10.8cm・最大幅2.3cmである。鉄鏃T13は，茎部端を欠失するが，鉄鏃T12とほぼ同形・同大とみられる。

第2主体部出土遺物　須恵器杯蓋S3は口縁端部に段をもつが，外面に稜はない。杯身S6は，第1主体部出土の杯身S7より若干高い立ち上がりをもつ。土師器壺H2は，体部外面と頸部外面にハケ目が残る。口縁部は屈曲して立ち上がっており，あたかも二重口縁の退化したような形状である。

周溝出土遺物　周溝や表土中から土器片等が出土している。須恵器短頸壺S8は，周溝内からほぼ完形で出土した。肩部の張った扁平気味の体部をもち，肩部と胴部の境に沈線をめぐらす。

第3節　3　号　墳

3号墳は，2号墳の南東側に隣接して位置する。丘陵稜部付近から南西側斜面にかけて墳丘が築かれる。この古墳は，3基の埋葬主体部をもつ。最も新しいものを第1主体部とし，順次第2・第3主体部とする。

1.　**墳丘**

調査前の状況では，直径約13m・高さ約1.2mである。形状は，ほぼ円形である。稜部側に，周溝状の地形の窪みがある。墳頂部には，後世の攪乱による窪みがある。

墳丘は，旧表土上から周溝を掘り込み，また，丘陵斜面を削り出して整形している。第3主体部は，旧表土上から掘り込まれ，棺埋納後に盛土を行っている。第1・第2主体部については，盛土上から掘り込まれているが，現状では墳頂部が削平されているため，その上の盛土の状況については不明である。

掘削後の状況では，墳丘径は約11.6mである。稜部側を中心として墳丘をほぼ3/4周する，幅2～3m・深さ30～50cmの周溝がめぐる。斜面側には，幅約1mの平坦部がある。

2.　**埋葬主体部**

第1主体部　長さ約4.5m・幅約1.5m・深さ約80cmの長方形墓壙である。墓壙の長軸

方向は，N—43°30′—Wであり，ほぼ北西から南東方向である。位置は墳頂部ほぼ中央である。棺の痕跡は，長さ約3.9m・幅約0.7mである。棺底は平坦であり，箱形木棺とみられる。

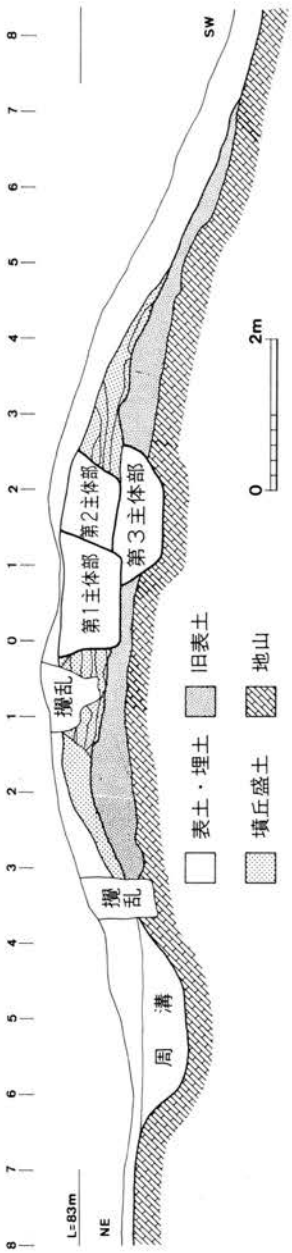
墓壙北西側底部から，鉄製鋤先1点・鉄鏃3点が出土した。また，この部分には赤色顔料の痕跡がみとめられた。

第2主体部　第1主体部に北東辺を切り込まれている。長さ約5m・幅約2m・深さ約60cmの長方形墓壙である。長軸方向は，第1主体部とほぼ同様である。棺の痕跡は検出していない。墓壙底は平坦であり，箱形木棺とみられる。

墓壙北西側から鉄斧1点・鉄鏃2点・鉄鎌1点が，中央部から鉄鏃数点が出土した。これらの鉄製品は，底部から約10cm上にある。墓壙南東端部からは須恵器杯身5点が出土している。棺の木口板の外側に置かれたものか。また，この墓壙上から須恵器壺や土師器高杯などが出土しており，棺埋納後に供献されたものとみられる。

第3主体部　第1・第2主体部の下層に位置する。長さ約3.1m・幅約1.8m・深さ約60cmの長方形墓壙である。墓壙の長軸方向は，N—62°—Wで，ほぼ東西方向に近い。棺は，長さ約2.1m・幅約0.7mである。棺底は平坦であり，箱形木棺とみられる。

棺内からは鉄製品のみが出土した。棺底部北西側西寄りから，鉄鏃3点・刀子1点が切先を北西側にむけて出土した。また，棺底部東辺付近から，鉄鏃2点，刀子1点が出土した。棺埋土上部から鉄刀1点・刀子1点が出土しており，これらは棺上に置かれたものとみられる。鉄刀の切先は北西方向である。



第4図　3号墳墳丘断面図

墓壙南東側棺木口付近の底部およびその上層から，須恵器が出土した。底部のものは杯蓋1点・杯身2点で，その上層のものは，蓋1点・杯身3点・甕1点である。これらは，棺木口外側の底部および棺蓋上に置かれたものとみられる。

3.　**出土遺物**(図版第20・21・33・34・67・81・82)

第1主体部出土遺物　鉄製品のみである。鉄鏃T2は，平根式の柳葉形有茎鏃で，茎部先端を欠失するが，残存長14.6cm・刃部最大幅2.8cm・腸抉り部幅3.4cmである。鋤先T50は，U字形のもので，幅16.4cm・長さ13.8cmである。

第2主体部出土遺物　須恵器杯身S15～S19は，墓壙南東端部から出土した。これらの杯身は，内傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。器形はやや扁平気味である。口縁端部は丸く終わる。調整はやや粗雑であり，底部に未調整部分を残すものもある。

墓壙北西側からは鉄製品が出土している。鉄斧T47は，長さ11cm・刃部幅4.6cmで，基部は袋状になる。鉄鎌T44は，長さ14.3cm・幅2.5cmの曲刃鎌で，基部は刃に直角に折り返す。刃部を手前にし，折り返し部を右に置くと，折り返しは上を向く。

墓壙上からは，須恵器・土師器などが出土した。須恵器提瓶S25は，前面・側面が同心円状のカキ目調整である。口縁部・釣手を欠失するが，環状の釣手をもつ。提瓶S26は，全面に同心円状のカキ目調整がみられる。環状の釣手をもち，口縁端部は玉縁状になる。壺S44・S45は，後者のほうがやや大振りで，口縁端部に若干の相違があるが，ほぼ同形である。体部外面がタタキ後カキ目調整，内面には同心円状のタタキがみられる。

第3主体部出土遺物　須恵器は，墓壙南東側から出土した。杯蓋S9は，口縁部が天井部から明瞭に屈曲して下る。口縁端部には段をもつ。杯身は，丸味をおびた底部をもつもの(S11・S12)と，扁平気味の器形のもの(S10・S13)がある。口縁部は内傾気味に立ち上がる。蓋S14は，内面が窪んだつまみをもつ。口縁部と天井部の境には沈線状の形骸化した稜をもち，口縁端部には段をもつ。瓶S23は，頸部に波状文をめぐらし，体部の最大胴径部にカキ目がみられる。底部はヘラケズリである。

鉄鏃T3は，平根式の柳葉形有茎鏃で，茎部・先端部などを欠失するが，残存長8.6cm・幅2.6cmである。鉄鏃T14は，平根式の三角形状有茎鏃で，長さ11.1cm・残存最大幅3cmである。刀子T33は，先端部を欠失するが，残存長13.6cm・刃部残存長8.1cm・茎長5.5cm・最大幅1.9cmである。刀子T34は，先端部を欠失しており，残存長8.6cm・刃部残存長4.4cm・茎部長4.2cm・最大幅1.4cmである。鉄刀T51は，切先端部・茎端部を欠失する。残存長29.6cm・刃部残存長24.2cm・茎部残存長5.4cm・刃部幅1.6cmである。茎部には目釘穴が1個ある。刃部には木質が付着する。

墳丘・周溝出土遺物　須恵器杯身S20は，東側周溝から出土した。厚手で，口径は小さい。口縁部は内傾して立ち上がる。墳頂部表土下から以下の須恵器が出土した。無蓋高杯S21は，低い脚部をもち，長方形状の透かしが三方にある。脚部および杯底部にカキ目を施す。杯部の底部と口縁部の境は稜をなす。瓶S24は，やや太い頸部をもつ。頸部上方に

波状文・体部最大胴径部に刺突列点文を施す。墳丘北西側斜面表土下からは，壺S27が出土した。頸部および体部上半にカキ目を施す。

第4節　4　号　墳

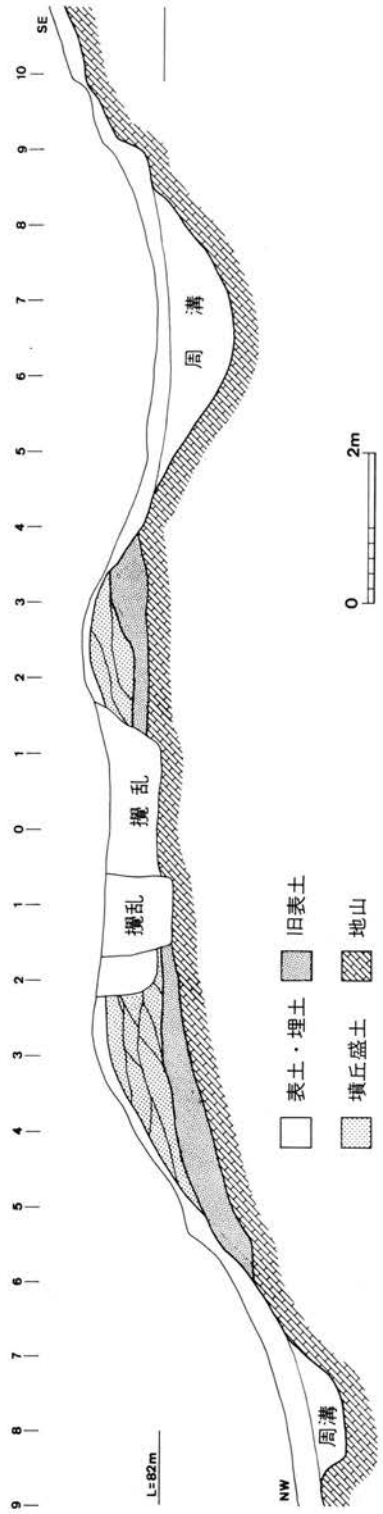
4号墳は，1～3号墳がある丘陵から谷をへだてた東側の尾根状丘陵に位置する。この丘陵は，南東から北西方向にのびており，その北西端部に4号墳は位置する。なお，4号墳は盗掘をうけており，埋葬主体部は残存していなかった。

1.　墳丘

調査前の状況では，直径約12.5m，高さは尾根先端部の北西側で約2.5m・南東側で約1mである。形状はほぼ円形であるが，頂部に盗掘による北方向の窪みがあり，そこからかき出された土が墳丘北側に堆積しているため，測量の等高線は，その部分が乱れている。また，尾根続きの南東側には，墳丘構築時に尾根を断ち切った跡とみられる幅の広い窪みがみとめられた。

掘削後の状況からみると，この古墳は，尾根続きの南東側では，旧表土および地山を1.6～2mの深さまで掘り込んで尾根を断ち切っている。また墳丘全体にわたって，旧表土および地山を深く削り出して，墳丘をきわだたせている。尾根を断ち切った南東側だけでなくほぼ全周にわたって，幅約1.5m・深さ約30cm程度の周溝をめぐらす。北側のみテラス状になる。掘削後の墳丘径は，約11.6mである。

盛土は，地形的に低い北西側に向かってなされている。高さをそろえながら数回にわけて盛土を行っている。



第5図　4　号　墳　墳　丘　断　面　図

上記のとおり，この古墳は盗掘されており，埋葬主体部は残存していない。盗掘坑北東側底部で墓壙の東隅部かとみられる部分を確認したが，確証はない。なお，盗掘坑埋土から須恵器蓋杯片や鉄製品の破片などが出土した。また，墳丘断ち割りの結果や盗掘坑の状態からみて，埋葬主体部は1基であり，その長軸方向はほぼ南北であったものとみられる。

墳頂部からは，土器等が埋納されている小土壙を2基検出した。そのほかに，土器がかたまって，あるいは単独で出土したか所があり，掘形こそ検出できなかったが，これらも小土壙等に埋納されたものかもしれない。

土壙4-1　墳頂部南東側で検出した。直径約45cm・検出時の深さ約20cmの円形小土壙である。土壙内から須恵器有蓋短脚高杯3組が蓋をかぶせたまま転倒した状態で出土した。

土壙4-2　墳頂部西側で検出した。直径約35cm・検出時の深さ約5cmの円形小土壙である。土壙内から須恵器提瓶が立った状態で出土した。また，土壙掘形を検出する以前に，提瓶の周囲から鉄製刀子1点と鎌の破片1点が出土した。これらもこの土壙に伴うものとみられる。

2.　**出土遺物**(図版第21・22・68)

盗掘坑埋土出土遺物　須恵器杯蓋S32・杯身S35・甕S48の3点である。埋葬主体部に伴う遺物の可能性もある。杯蓋S32は，形骸化した稜をもち，内面口縁端部にわずかな段がみられる。杯身S35は，上方に高く立ち上がる口縁部をもち，内面口縁端部には形骸化した段とみられる沈線がめぐる。

土壙4-1出土遺物　須恵器有蓋短脚高杯S39～44は，蓋・高杯ともに口径はかなり小さい。蓋には，内面が窪んだつまみが付き，形骸化した稜がある。高杯の杯部の立ち上がりは高く上方へのびる。脚部には四角形の透かしが三方にある。

土壙4-2出土遺物　須恵器提瓶S46は，体部ほぼ全面に同心円状のカキ目がみられ，頸部にもカキ目を施す。環状の釣手をもつ。刀子T35・鎌片T45も土壙4-2に伴うものとみられる。刀子T35は，全長20.6cmの比較的大きいものである。刃部長14.3cm・茎部長6.3cm・最大幅2cmである。

墳丘・土壙出土遺物　須恵器杯蓋S30・S34・杯身S36は，土壙4-2の西側から出土した。杯蓋には，形骸化した稜があり，口縁端部は斜面状の段になる。杯身は上方に高く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部には段をもたない。これらの杯蓋・杯身は比較的小振りである。須恵器提瓶S47は，土壙4-2の北側約2mの位置から出土した。カギ状の釣手をもつ。土師器杯H4は，土壙4-1の南西側約2.7mの位置から出土した。器表が荒れているため，調整は不明である。

須恵器杯蓋S31・S33・杯身S37・S38・無蓋高杯S45は，土壙4-1のほぼ南側約1.2m

の位置から出土した。杯蓋は形骸化した稜をもち，口縁端部は斜面状の段になる。杯身は，高く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部には段をもたない。無蓋高杯は，杯底部と脚部にカキ目を施す。脚部には，縦長台形状の透かしを三方にもつ。

土師器杯H3・甕H5は，周溝埋土から出土した。杯H3は，内面下半をハケ目調整する。甕H5は，体部外面が縦方向のハケ目調整である。内面は，体部から頸部付近までヘラケズリ，それ以上は横方向のハケ目調整である。

第5節　5　号　墳

5号墳は，1～3号墳がある丘陵と4号墳がある丘陵の間の谷の奥部に張り出した小丘陵上の北西端部に位置する。この小丘陵の張り出しのため，谷はY字状になる。なお，この古墳の西側から，墓とみられる土壙(土壙5-1)を検出した。

1.　墳丘

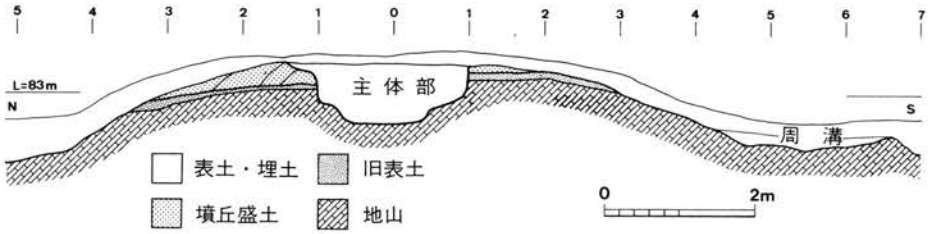
調査前の状況では，直径約10m・高さ約1mである。形状は，円形である。南東側には周溝状の窪みが認められる。

掘削後の状況からみると，直径約8.8mで，南東側を中心として墳丘をほぼ半周する周溝をめぐらす。周溝は，幅0.8～1.2m・深さ約30cmである。西側から北側にかけては，狭いテラス状となる。墳丘は，旧表土上に周溝掘削の排土等を盛り上げて構築される。

埋葬主体部は，若干の盛土を行ってから設けている。棺埋納後，さらに盛土をしているものとみられるが，現状では，盛土上部が流出しており，どの程度まで盛土されていたのか不明である。

2.　埋葬主体部

埋葬主体部は1基であり，長さ約3.2m・幅約1.8mの長方形墓壙である。深さは約0.8mである。墓壙の長軸方向は，N—62°—Eであり，ほぼ東西方向に近い。墓壙は墳丘中央部に設けられる。



第6図　5号墳墳丘断面図

棺の痕跡は墓壙ほぼ中央で検出した。長軸方向は墓壙と同様である。棺は長さ約2.9m・幅約0.7mとみられる。なお，墓壙東端部で棺の側板の突出とみられる痕跡を確認しており，「H」字形の組み合わせ式箱式木棺であったと考えられる。なお，東側に2か所・西側に1か所，赤色顔料の痕跡が認められる。

棺底部西側から，鉄刀1点が出土した。切先は北を向く。また，東側から鉄鏃1点が出土した。また，墓壙埋土から，墓上ないしは棺上の副葬品とみられる須恵器・鉄製品などが出土した。周溝南側部分でも須恵器無蓋高杯などが出土しており，古墳に供献されたものとも考えられる。

3.　土壙5-1

5号墳西側のテラス状部分に位置する。長さ2.65m・幅0.85mの長方形土壙である。5号墳墳丘側での深さは約20cmである。墓壙の長軸方向はN—5°—Wであり，ほぼ南北方向である。

土壙底部北側から，須恵器杯身4点・壺1点・横瓶1点が出土した。また，南側からは鉄鏃が出土したが，腐食がすすんでおり，点数は不明である。

この土壙では，棺の痕跡は検出していないが，遺物の出土状態からみて，土壙墓の可能性も考えられる。

4.　出土遺物(図版第22・33・34・69・82)

埋葬主体部出土遺物　須恵器は，埋葬主体部埋土から出土した。杯身S49は，内傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の立ち上がりは，比較的高い。口径も大きく，見込みも深い。杯身S50は，やや厚手である。口縁部は内傾気味に立ち上がる。杯S55は，口径の小さいもので，内湾気味に立ち上がり，口縁端部は丸く終わる。あるいは短頸壺の蓋かもしれない。

鉄製品は，埋葬主体部埋土中および底部から出土している。鉄鏃T10は，埋土から出土した。柳葉形の有茎鏃で腸抉りをもつ。切先・腸抉り先端部および茎部を欠失する。残存長5cm・最大幅2cmである。刀子T36も埋土中から出土した。茎部半ばを欠失する。残存長9.6cm・刃部長7.8cm・刃部最大幅1.6cmである。鉄刀T53は，底部から出土した。全長31.8cm・刃部長25.4cm・茎部長6.4cm・刃部幅2.3cmで，平造りである。茎部には目釘穴が1個あり，刃部と茎部の境には鞘口金具とみられるものが残る。

土壙5-1出土遺物　須恵器杯身S51・S53は，緩やかに内傾気味に立ち上がる口縁部をもち，見込みもやや深めである。杯身S52・S54は，明瞭に屈曲して内傾気味に立ち上がる口縁部をもち，器形は扁平気味である。S54は，口径がやや小さい。壺S56は，頸部と肩部の境に凸帯をもち，底部はヘラケズリされてほぼ平坦である。口縁部は外反し，端部

を折り返す。口縁部内面には，松葉形のヘラ記号がある。全体的に，特異な器形である。横瓶Ｓ58は，寸詰まりの砲弾形の体部をもつ。体部は全面にわたってカキ目調整である。頸部に２条のヘラ描き沈線がある。口縁部は外反し，端部は丸く終わる。

周溝出土遺物　須恵器無蓋高杯Ｓ57は，長脚二段透かしである。杯部には，断面三角形状の細い凸帯が２条あり，その間に刺突列点文を施す。杯底部は，ヘラケズリされて平坦である。

第６節　６　号　墳

６号墳は，５号墳と同じ小丘陵上にあり，５号墳の東側に隣接して位置する。比較的小規模な古墳である。

1.　墳丘

調査前の状況では，直径約8.5m・北の丘陵斜面側での高さ約1.5m・南の丘陵側からの高さ約0.6mである。形状はほぼ円形である。

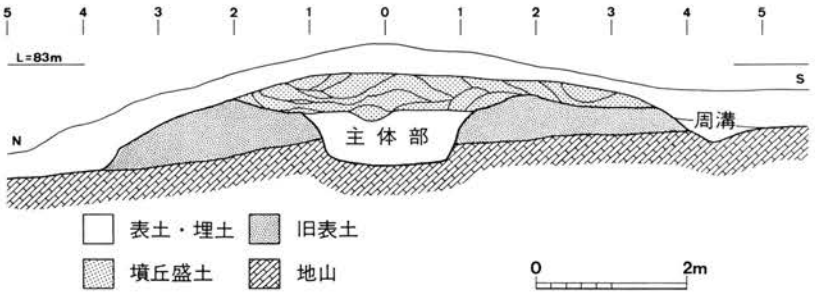
掘削後の墳丘径は約7.8mである。南西側を中心として墳丘をほぼ3/4周する周溝がめぐる。周溝は，幅約80cm・深さ約20cmである。

墳丘は旧表土から地山にかけて削り込み，その排土を盛って構築している。埋葬主体部は，旧表土上に部分的に盛土を行い，整地してから掘り込んでおり，棺埋納後に盛土を行ったものとみられる。盛土の量はあまり多くない。

2.　埋葬主体部

埋葬主体部は１基であり，長さ約3.5m・幅約1.6mの長方形墓壙である。深さは約70cmである。墓壙の長軸方向はＮ—107°—Ｅで，ほぼ東西方向である。墳丘中央やや北寄りに設けられる。墓壙の底部には，墓壙長軸に直交する３条の溝状の掘り込みがある。

棺の痕跡は，墓壙のほぼ中央部で検出した。長軸方向は，墓壙と同様である。棺底部は



第７図　６号墳墳丘断面図

平坦であり，棺は箱形木棺とみられる。長さ約2.6m・幅約0.9mである。

棺底部東側から碧玉製管玉5点が出土した。これらのうち数点は，東側の溝状掘り込みの中に落ち込んだ状態である。また，この付近からガラス製小玉数点を確認したが，質が劣化しており，取り上げは不可能であった。西側の溝状掘り込みの中からは，須恵器杯蓋1点が落ち込んだような状態で出土した。このほか，棺底部中央付近から鉄製品が出土したが，小片であり，器種は不明である。

3.　出土遺物(図版第22・32・69・81)

埋葬主体部出土遺物　須恵器杯蓋S59は，稜がなく，口縁端部も丸く終わる。天井部はやや広くヘラケズリされる。

碧玉製管玉I・1～I・5は，濃緑色であり，片面穿孔である。法量は以下のとおりである。

	全長	直径	孔径
I・1	23mm	6mm	1～2.5mm
I・2	22mm	6mm	1～3mm
I・3	21mm	7mm	1～2mm
I・4	19mm	6mm	1～3mm
I・5	17mm	7mm	1.5～3mm

墳丘出土遺物　墳丘表土から，須恵器台付長頸壺S60が出土している。肩の張った体部をもち，口縁端部に段を有する。脚部は低く，透かしはない。

第7節　7　号　墳

7号墳は，4号墳のある丘陵の南西側にひろがるやや広い丘陵上の平坦地にある。この平坦地には，8・9・11号墳もある。7号墳は，この平坦地の北側縁辺部，4号墳がある丘陵との境に位置する。この古墳群のなかでも比較的規模の大きい古墳である。

1.　墳丘

調査前の状況では，直径約15m・高さ約1.4mである。墳頂部の等高線はかなり乱れており，開墾等によって削平されている。形状は円形である。墳丘南側を中心として，周溝状の窪みがめぐる。

掘削後の墳丘径は，約12.8mである。墳丘は，旧表土とみられる黒色土上に周溝掘削の排土等を盛り上げて構築している。盛土は，墳丘中心部から外側に向かって行っている。また，本来の墳丘上部はかなり削平されているものとみられるが，高さをそろえながら数回にわたって土を積み上げている。

埋葬主体部は，ある程度盛土を行ってから掘り込まれており，本来はその上にさらに盛土をしていたものと推定される。この古墳には，４基の埋葬主体部が設けられる。

墳丘の周囲には，幅約2～3.5m・深さ約70cmの周溝がめぐる。周溝の断面形は，逆台形状である。周溝は墳丘を全周する。

周溝南側底部から，須恵器杯蓋４点・杯身５点・瑞２点・壺１点が出土した。壺と瑞１点は，やや離れて転倒した状態である。そのほかの杯蓋・杯身・瑞１点は，かたまって置かれており，口縁部をほぼ上に向けている。このような出土状態からみて，これらの須恵器は，古墳に供献されたものとみられる。

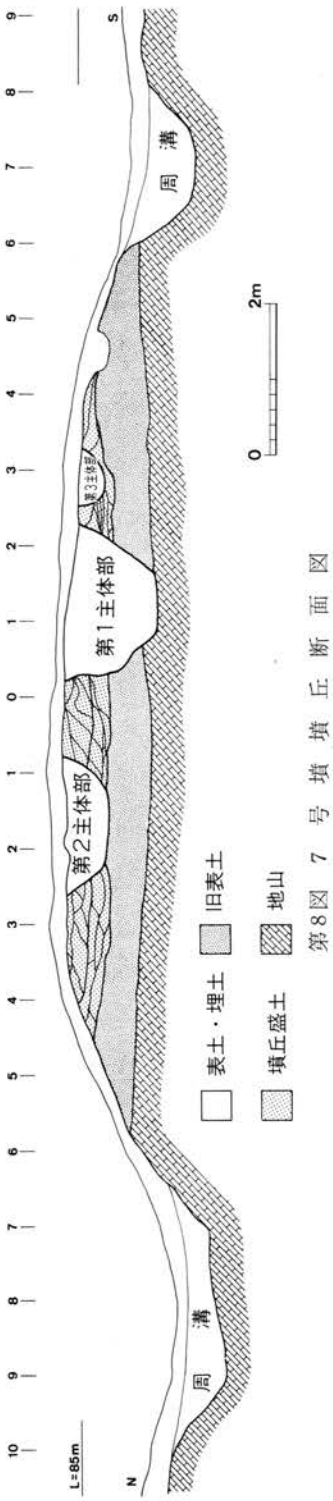
また，北東側周溝埋土中から，整理箱約半分の量の土錘が出土した。これらの土錘は，すべて破損している。埋土中層部からの出土であり，古墳に伴うものとは断定できない。なぜこのような場所から出土するのか，また，その時期については，不明である。

2. 埋葬主体部

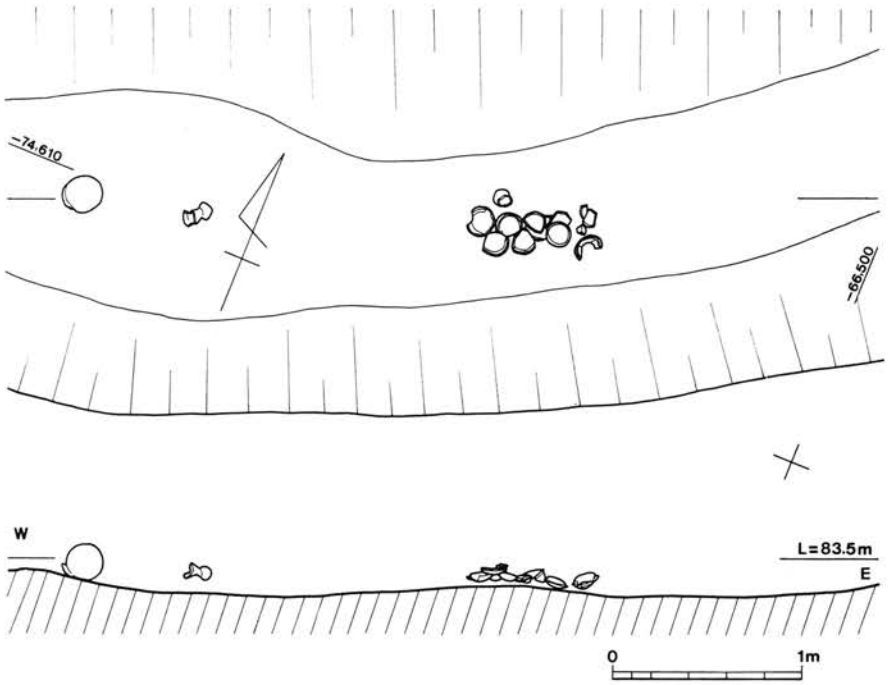
第１主体部　墳丘のほぼ中央部に位置する。位置的にも，また，深さからも，７号墳の主体部のなかでは最も先行するものとみられる。

この主体部は，長さ約5.2m・幅約1.8mの長方形墓壙である。深さは，約1.2mである。長軸方向は，N—66°—Eであり，ほぼ東西方向である。棺は，「H」字形の組み合わせ式木棺であり，長さ約4m・幅約0.66mである。長軸方向は墓壙と同様である。

棺底部南辺東側から鉄刀１点が出土した。切先を西に向ける。また，須恵器提瓶１点が西側の棺底部付近から出土した。棺の東側木口板の外とみられる位置から，須恵器杯身３点・土師器杯１点が出土した。このほか，墓壙北西側の埋土中から土師器壺１点が出土し



第８図　７号墳墳丘断面図



第９図　７号墳周溝内遺物出土状況図

た。主体部上からは須恵器横瓶１点・土師器高杯１点・紡錘車１点が出土した。横瓶と高杯は破損した状態である。

第２主体部　第１主体部の北側に位置する。 長さ約3.8m・幅約1.6m・深さ約60cmの長方形墓壙である。長軸方向は，N－63°30′－Eで，ほぼ東西方向である。棺は，長さ約2.6m・幅約0.74mの箱形木棺とみられる。

この主体部の棺内からは，副葬品は出土していない。墓壙南側の埋土中から刀子１点が出土したのみである。

第３主体部　第１主体部の南側に位置する。長さ約2.8m・幅約1.2mのやや規模の小さい長方形土壙である。検出面からの深さは約30cmと浅いものである。長軸方向は，上記の主体部とほぼ同様である。棺の痕跡は検出していないが，土壙墓の可能性がある。出土遺物はない。

第４主体部　第１主体部の南西側・第３主体部の西側に位置する。 長さ約1.5m・幅約0.9mの小規模な長方形土壙である。検出面からの深さは約30cmと浅い。長軸方向は他の主体部とほぼ同様である。棺の痕跡は検出していないが，土壙墓の可能性がある。出土遺物はない。

3. **出土遺物**(図版第23・24・32・34・70・71・80・82)

第1主体部出土遺物　須恵器杯身S71は，口縁端部にわずかに段をもつ。器高はやや低い。杯身S72は，上方に立ち上がる口縁部をもち，口縁端部は丸く終わる。器高はやや低く，口縁部の立ち上がりも低めである。杯身S73は，口径がやや小さくなり，口縁部の立ち上がりは直立気味である。提瓶S79は，全面に同心円上のカキ目が施され，カギ上の釣手をもつ。口縁端部は，内側へ折り返し気味になる。横瓶S81は，体部外面が格子状タタキ後カキ目調整，内面は同心円状タタキが残る。口縁端部は，玉縁状になる。

土師器杯H6・H7は，内外面ハケ目調整である。H6は棺東側木口板の外とみられるところから，H7はその上部から出土したものである。高杯H8は，脚柱部にヘラケズリがみられる。壺H9は，口縁部が外傾する長頸壺で，肩部にハケ目が残る。紡錘車I・29は，上径2.7cm・底径4.4cm・高さ2.5cm・孔径6mmである。上面と底面に，稚拙な鋸歯文が線刻される。鉄刀T55は，全長106cm・刃部長86.5cm・茎部長19.5cm・最大幅3.9cmである。平造りで，茎部に目釘穴が1個ある。刀子T37は，墓壙埋土から出土したもので，茎部半ばを欠失する。残存長9.6cm・刃部長7.7cm・刃部最大幅1.6cmである。

第2主体部出土遺物　刀子T38は，茎部および刃部の一部を欠失する。残存長7.9cm・最大幅1.1cmである。

周溝出土遺物　南側底部から出土した供献用とみられるものと，埋土に混入していたものがある。前者として，須恵器杯蓋は，形骸化した稜をもつもの(S63・S65)と，稜のないもの(S62・S64)がある。口径はほぼ同じで，口縁端部に段をもつ。杯身は，口径がやや小さく口縁部の立ち上がりが比較的高いもの(S67・S68)と，口径は大きいが器高の低めのもの(S66・S69)と，口径が比較的小さく器高も低めのもの(S70)がある。このうち，S69は，口縁端部にわずかな段をもつ。瓶S75は，体部の穴の位置にカキ目を施す。瓶S76は，やや太めの頸部をもつ。外面頸部上方と体部穴の位置に波状文を施す。壺S80は，体部外面がタタキ後カキ目調整，内面には同心円状のタタキ目が残る。

埋土に混入していたものとして，須恵器蓋S61は，短頸壺の蓋とみられ，口縁端部にわずかな段をもつ。杯身S74は，口径も大きく立ち上がりも比較的高いが器高は低めである。土師器壺H10は，外反気味に立ち上がる頸部をもつ長頸壺である。

表土出土遺物　須恵器提瓶S77は，墳頂部表土中から出土したもので，背面にカキ目がある。釣手は欠失しているが，カギ状のものとみられる。甕S78は，墳丘斜面の表土中から出土したもので，外面が格子状タタキ後粗くカキ目調整，内面は同心円状のタタキである。これらの土器は，いずれかの主体部に供献されたものである可能性もある。

第8節　8　号　墳

8号墳は，7号墳のある丘陵上平坦地の南側縁辺部に位置する。比較的規模の小さい古墳である。

1.　墳丘

調査前の状況では，直径約10m・北側での高さ約0.8m・斜面部の南側での高さは約1.8mである。形状は円形である。墳頂部の等高線に乱れがあり，開墾等でかなり人手が加えられていることが予想された。

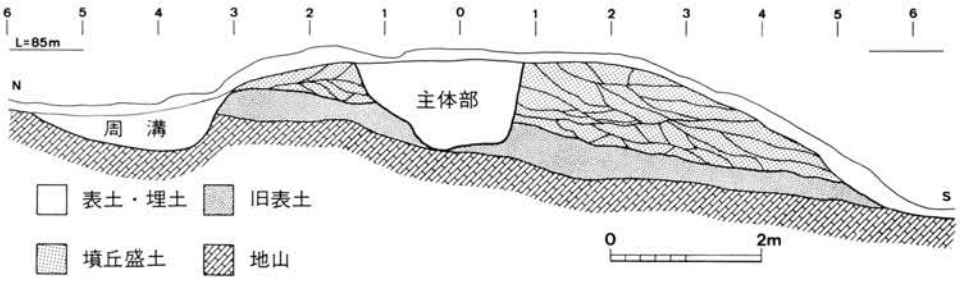
掘削後の状況では，直径約9.3mで，墳丘北側を中心として幅0.5～2.3m・深さ50～80cmの周溝が墳丘をほぼ半周する。8号墳は，9号墳にかなり接近して造られているが，9号墳側にも細い周溝をめぐらして墓域を区分している。

墳丘は，旧表土の黒色土上に盛土して築かれている。旧表土面は南側へ傾斜しており，南側に盛土を行って高さをそろえている。ほぼ高さをそろえてから埋葬主体部を設け，棺埋納後，さらに盛土をする。棺埋納後の盛土は，中央から外側に向かって行われている。小規模な古墳ではあるが，盛土は厚い。

2.　埋葬主体部

埋葬主体部は1基であり，墳丘ほぼ中央やや北寄りに設けられる。長さ約3.2m・幅約2mの長方形墓壙であり，深さは約1mである。長軸方向はN—71°—Eであり，ほぼ東西方向である。棺は長さ約2.1m・幅約0.5mとみられる。棺底部は平坦であり，箱形木棺とみられる。棺は，墓壙ほぼ中央に置かれ，長軸方向は墓壙と同様である。

棺底から約30cm上方の棺埋土中，棺の南辺寄りから鍔付の鉄刀1点が出土した。出土状況からみて，棺上に置かれていたものとみられる。切先は西を向いており，遺体の頭位は東側とみられる。また，棺埋土中からは，東側から土師器甕片が出土した。棺底部からの出土遺物はない。



第10図　8号墳墳丘断面図

このほか，墓壙の東および北西側の埋土中から，須恵器杯蓋が出土した。鉄鏃２点・刀子１点も墓壙埋土中から出土した。

3.　**出土遺物**(図版第24・33・34・71・81)

埋葬主体部出土遺物　須恵器杯蓋Ｓ82は，口径が小さく，器高も低い。稜はなく，口縁端部は斜面状の段になる。土師器甕H11は，体部外面が縦方向のハケ目調整，内面は横方向のヘラ削りである。口縁部は外反し，端部は丸く終わる。

鉄刀Ｔ54は，全長61.4cm・刃部長53.4cm・刃部幅3cm・茎部長8cm・茎部幅1.6cmで，平造りである。茎端部に目釘穴が１個ある。この鉄刀には，鍔と鞘口金具が付属する。鍔は長径6.4cm・短径5.2cm・厚さ3mmの倒卵形のもので，透しはない。刀子Ｔ39は，全長11cm・刃部長6.4cm・刃部最大幅1.9cm・茎部長4.6cmで，茎部に木質が残る。鉄鏃Ｔ6は，平根式柳葉形の有茎鏃で，茎先端部を欠失する。残存長は13.6cm・刃部幅2.5cmである。刃部に布目が付着する。鉄鏃Ｔ9は，柳葉形の有茎鏃で，全長9.7cm・刃部幅2cmである。刃部に布目が付着する。

周溝埋土出土遺物　須恵器杯身Ｓ83は，内傾して低く立ち上がる口縁部をもつ。器形は扁平気味であり，器高も低い。

第９節　９　号　墳

９号墳は，８号墳の東側に隣接して位置する。この古墳群の中では，最も規模の大きい古墳である。

1.　**墳丘**

調査前の状況は，直径約16m・高さ約2mである。墳頂部の等高線はかなり乱れており，開墾等によって改変されていることがうかがえる。形状は円形である。墳丘北側を中心として，周溝状のわずかな窪みがめぐる。

掘削後の墳丘径は，約14.2mである。墳丘は，旧表土とみられる黒色土上に周溝掘削の排土等を盛り上げて構築している。盛土は，墳丘中心部から外側に向かって行っている。また，高さをそろえながら数回にわたって土を積み上げていることがうかがえる。

埋葬主体部は，ある程度盛土を行ってから掘り込まれており，本来は，その上さらに盛土をしていたものと推定される。この古墳には，４基の埋葬主体部が設けられる。

墳丘の周囲には，幅約1.4～2.6m・深さ約20～30cmの浅い周溝がめぐっている。 周溝は，現状ではあまりはっきりしたものでなく，浅く窪む程度であるが，墳丘を全周する。周溝の西側底部から，土師器杯が完形で口縁部を上にむけて据えられた状態で出土した。

このような出土状態からみて，古墳に供献されたものともみられる。

2. 埋葬主体部

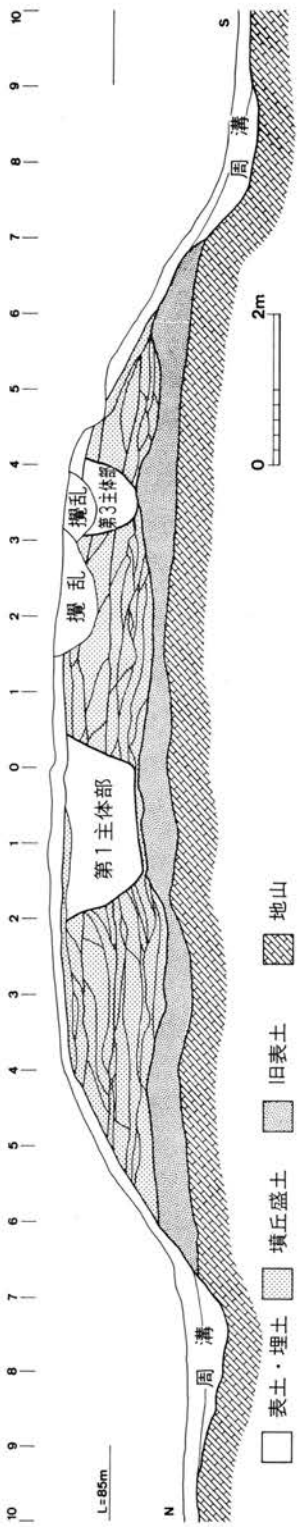
第1主体部　墳丘の北半部に位置する。この主体部は，長さ約5.2m・幅約2mの長方形墓壙である。深さは，約1mである。長軸方向は，N—74°—Eであり，ほぼ東西方向である。棺は，長さ約3.6m・幅約0.9mである。墓壙の南寄りに置かれる。長軸方向は墓壙と同様である。墓壙底部は平坦であり，箱形木棺とみられる。

棺西端部から須恵器杯蓋・杯身各1点が出土した。これらの須恵器は，棺底部から約20cm上方からの出土であり，棺上に置かれていたものともみられる。棺底西半部北寄りからは，長軸に沿って置かれた状態で，鉄鏃3点が出土した。切先は西向きであり，遺体の頭位は東とみられる。棺埋土中からも鉄鏃1点が出土した。この主体部上からは須恵器提瓶1点・土師器甕1点が出土した。棺埋納後に置かれたものか。

第2主体部　墳丘南半部東寄りに位置する。長さ約3.8m・幅約1.4m・深さ約84cmの楕円形気味の長方形墓壙である。長軸方向は，N—60°—Eで，第1主体部よりやや北に振るが，ほぼ東西方向である。棺は，長さ約2.5m・幅約0.6mの箱形木棺とみられる。検出面は，第1主体部より約50cm下方であり，この主体部が第1主体部に先行するものとみられる。

この主体部の棺底部には，棺に塗られていたとみられる赤色顔料が「H」字状に残る。このことから，棺は組み合わせ式箱形木棺とみられる。なお，この赤色顔料は，棺内の副葬品とみられる玉や鉄製品の上に付着しており，棺の側板や木口板は多少内側に倒れ込んで腐朽したものとみられる。

棺底部東側から，土製丸玉251点以上が出土した。



第11図　9号墳墳丘断面図

また，棺底部中央および西側から鉄鏃・刀子などが出土した。切先は西を向く。このような副葬品の出土状態からみて，遺体の頭位は東側であったものとみられる。このほか，棺東側木口板の外とみられる位置から，須恵器杯蓋・杯身各1点が出土した。杯身は傾いた状態で出土しており，これらの須恵器は，棺上に置かれていたものが落ち込んだものとみられる。なお，この主体部上から，長脚一段透かしの須恵器高杯が出土した。棺埋納後に供献されたものか。

第3主体部　第2主体部の南西側に位置する。長さ約1.3m・幅約0.6mの小規模な長方形土壙である。長軸方向は，第1主体部とほぼ同様である。出土遺物はない。棺の痕跡も検出していないが，土壙墓の可能性もある。

第4主体部　第2主体部の南側に長軸方向をほぼそろえて隣接する。長さ約1.8m・幅約1.1mの長方形土壙である。土壙南西側から，須恵器提瓶1点が，やや傾いているが立った状態で出土した。棺の痕跡は検出していないが，土壙墓の可能性がある。

3.　出土遺物(図版第24・25・32・33・34・72・81・82)

第1主体部出土遺物　須恵器杯蓋S87は，口縁端部に斜面状の段をもつ。天井部と口縁部の境には形骸化した稜をもつ。杯身S90は，内傾気味に立ち上がる口縁部をもち，口縁端部は丸く終わる。口縁部の立ち上がりはやや低めである。提瓶S84は，ほぼ全面に同心円状のカキ目を施す。頸部もカキ目調整である。環状の釣手をもち，口縁端部は，玉縁状になる。土師器甕H13は，口縁部が直立気味のもので，体部外面は縦方向のハケ目調整，内面は頸部付近までヘラケズリ調整である。

鉄鏃T19～T22は，三角形狭鋒の長茎鏃である。腸抉りをもつ。T19は，全長11.2cm・刃部長2.3cm・刃部最大幅1.2cmであり，他のものもほぼ同大とみられる。

第2主体部出土遺物　須恵器杯蓋S86は，口縁端部に段をもち，天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもつ。杯身S88は，高く立ち上がる口縁部をもち，口縁端部に沈線状の段がある。底部は丸味をもち，器高も高めである。杯身S89も直立気味に高く立ち上がる口縁部をもつ。高杯S93は，長脚一段透かしで，杯部の底部周縁に波状文を施す。

土製丸玉I・19～I・28は，径約8mmで，穴径は1～2mmである。素焼きであり，外面は漆黒色を呈する。この主体部からは，このような玉が251点以上出土している。

鉄鏃T15・T16は，三角形狭鋒の長茎鏃である。T15には，矢柄部分が残る。全長11.6cm・刃部長2.5cm・刃部幅1cmである。T16は，茎部先端を欠失するが，残存長9.3cm・刃部長1.4cm・刃部幅1.1cmである。鉄鏃T17・T18は，柳葉形の長茎鏃が錆で変形したものとみられる。腸抉りをもつ。T17は，全長13.8cm・刃部長3.7cm・刃部幅1.2cmである。T18は，茎部を欠失するが，残存長10.8cm・刃部長4.7cm・刃部幅1.3cmである。刀

子T40は，全長9.7cm・最大幅1cmである。環状の金具が付属する。

第4主体部出土遺物　須恵器提瓶S94は，前面に同心円状のカキ目を施す。肩部にカギ状の釣手をもつ。口縁端部は外反する。

周溝出土遺物　土師器杯H12は，外面ヘラケズリ，内面ナデ調整である。口縁端部は，つよくナデ調整されており，段状になる。

表土出土遺物　須恵器杯身S91・S92は，主体部出土のものに比べて立ち上がりが低く，内傾気味である。提瓶S95は，前面および側面に同心円状のカキ目を施す。背面はヘラケズリである。釣手はない。口縁端部は面をもつ。壺S85は，体部外面がタタキの後カキ目調整，内面には同心円状のタタキが残る。頸部は直立し，口縁部は受け口状になる。

第10節　11　号　墳

11号墳は，丘陵上平坦地の西側縁辺部の緩傾斜地に位置する。この丘陵からは，10号墳がある小尾根が南側へのびているが，11号墳はその小尾根の基部に位置する。

1.　墳丘

調査前の状況では，直径約11m，丘陵側の東側では高さはほとんどなく，斜面部の西側での高さは約1.8mである。形状は楕円形気味である。開墾等で削平されていることが予想された。

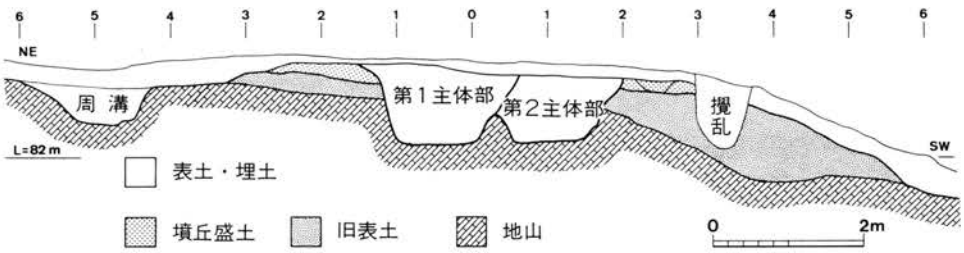
掘削後の状況では，直径約10mで，墳丘北側を中心として幅約1.7m・深さ約60cmの周溝が墳丘をほぼ半周する。

墳丘は，旧表土上から周溝を掘り込み，その排土等を盛り上げて構築しているものとみられるが，現状では，盛土はほとんど残っていない。丘陵斜面側の西側にわずかに残る。

埋葬主体部は4基ある。主体部外からも土器がまとまって出土するか所があり，墳丘構築後に小土壙中等に埋納されたものともみられる。

2.　埋葬主体部

第1主体部　墳丘中央やや東寄りに位置する。西側で一部第2主体部を切り込んでいる。



第12図　11号墳墳丘断面図

長さ約4.9m・幅約1.6m・深さ約1mの長方形墓壙である。長軸方向はN—2°30′—Eで，ほぼ南北方向である。墓壙底部は平坦であり，棺は箱形木棺とみられる。長さ約4m・幅約80cmである。

棺底南端部から須恵器杯蓋・杯身各5点が出土した。一部重なっているものもあるが，これらの須恵器は，口縁部を上にむけて並べられた状態である。これらの須恵器の上部から，須恵器杯蓋・杯身・土師器甕各1点が出土した。これらの土器は，棺上に置かれていたものが転落したとみられる。また，棺底南側東寄りから鉄斧1点が，棺底北半部西寄りから鉄刀1点と鉄鏃3点が出土した。鉄刀の切先は南をむいており，遺体の頭位は北側とみられる。このほか，棺埋土中から，鉄鏃・刀子・鎌が出土した。

第2主体部　墳丘ほぼ中央やや北寄りに設けられる。東辺を第1主体部に切り込まれており，第1主体部に先行するものである。長さ約5.5m・最大幅約1.6mの楕円気味の長方形墓壙であり，深さは約80cmである。長軸方向はN—9°—Eであり，ほぼ南北方向である。棺の痕跡は検出できていないが，主体部の規模や墓壙底部が平坦であることから，本来は箱形木棺が埋納されていたものとみられる。

墓壙底部北端から，須恵器杯蓋・杯身各3点，高杯・提瓶・甕各1点が出土した。南端からは，須恵器杯蓋・杯身・土師器甕各1点が出土した。また，墓壙中央やや北寄りからは，鉄鏃5点・鉄斧1点が出土した。鉄鏃の切先は南を向いており，遺体の頭位は北側とみられる。このほか，墓壙埋土から鉄鏃が出土した。

第3主体部　第2主体部の西側に位置する。長さ約2.5m・幅約80cm・深さ約40cmの不整な長方形土壙である。長軸方向はN—17°30′—Eで，ほぼ南北方向である。土壙内からは，鉄鏃2点が出土した。鉄鏃の切先は南を向く。また，埋土中からも鉄鏃2点が出土した。棺の痕跡等は検出していないが，土壙墓の可能性がある。

第4主体部　第3主体部の西側に隣接して位置する。長さ約2.8m・幅約1.6m・深さ約60cmの楕円気味の長方形土壙である。土壙の西半部は，墳丘斜面にかかる。長軸方向はN—18°30′—Eで，ほぼ南北方向である。土壙底部北側から，須恵器杯身・土師器杯各1点が重なって出土した。また，土師器片1点も出土した。このほか，墓壙東辺の上部から土師器壺1点が出土した。この主体部に伴うものであるかもしれない。棺の痕跡は検出していないが，土壙墓とみられる。

3.　出土遺物(図版第25・26・33・34・73・74・82)

第1主体部出土遺物　須恵器杯蓋S107～S111は，天井部が丸味をおび，器高も高めである。天井部と口縁部の境には形骸化した稜を，口縁端部には段をもつ。完全に還元焼成されておらず，軟質である。S111は，天井部に3条のヘラ描き沈線をもつ。杯身S117～

S121は，直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。底部は丸味をおび，見込みも深い。底部に3条のヘラ描き沈線をもつ。完全に還元焼成されておらず，軟質である。これらの杯身は，上記杯蓋と，出土位置が同じであり，焼成や特徴も類似することから，一対のものとみられる。杯身S116は，上記杯蓋・杯身の上方から出土したもので，形態的には，上記杯身と同様である。

鉄鏃T27・T28・T30は，柳葉形の長茎鏃で，腸抉りをもつ。T27は，全長13cm・刃部長3.2cm・刃部幅1.1cmである。T28は，残存長9.5cm・刃部長3cm・刃部幅1.1cmである。T30は，残存長4.5cm・刃部長2.8cm・刃部幅1cmである。鉄刀T52は，刃部がかなり朽損している。残存長28cm・茎部長6.2cm・刃部幅1.8cmである。鉄斧T49は，袋状の基部をもつもので，全長10.4cm・刃部幅4.6cmである。

棺埋土中から鉄製品が出土した。鉄鏃T7は，有茎平根式の柳葉形のもので，腸抉りをもつ。残存長9.5cm・腸抉り先端の刃部長8.9cm・刃部幅2.5cmである。刀子T41は，残存長11.8cm・茎部長5.5cm・刃部最大幅1.7cmである。鎌T46は，基部の部分のみ残存する。基部は折り返しであり，折り返しは刃に直角である。幅は2.5cmである。

第2主体部出土遺物　須恵器杯蓋S103・杯身S112は，墓壙南端部から出土したものである。S103は，天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもつ。口縁端部は段になる。S112は，内傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。器高はやや低めである。このほか，南端部からは，土師器甕H15が出土している。体部外面がハケ目調整，内面は肩部付近までがヘラケズリ・それ以上がハケ目調整である。口縁端部は外反して丸く終わる。

須恵器杯蓋S104・S105，杯身S113～S115は，墓壙北端部から出土した。杯蓋は天井部が丸味をおび，器高も高い。天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもち，口縁端部は段になる。杯身は直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。底部は丸味をおび，見込みは深い。これらの杯蓋・杯身は，焼成不良で，白色を呈し軟質である。このほか，北端部からは，須恵器高杯S123・甕S99・提瓶S124が出土している。S123は，長脚一段透かしで，脚部にカキ目・杯部に波状文を施す。S99は，太めの頸部をもつ。口縁部と頸部上半に波状文・頸部下半と肩部にカキ目・胸部中央に刺突列点文を施す。S124は，環状の釣手をもつ。体部前面は同心円状のカキ目調整・背面はヘラケズリである。

鉄鏃T8は，平根式柳葉形のものとみられる。残存長は，10.5cmである。鉄鏃T23～T26は，三角形の長茎鏃である。T23は，全長13.5cm・刃部長1.9cm・刃部幅1.1cmである。T24は，残存長10cm・刃部長3.1cm・刃部幅1.2cmである。T25は，残存長9.6cm・刃部長1.6cm・刃部幅1.1cmである。T26は，全長18.2cm・刃部長2.4cmである。

鉄斧T48は，基部が袋状になるもので，全長8.2cm・刃部幅3.4cmである。

埋土中からも鉄鏃が出土している。T5は，平根式の有茎鏃で腸抉りをもつ。残存長8.5cm・刃部長4.7cm・腸抉り幅3.2cmである。T29は，柳葉形の長茎鏃で腸抉りをもつ。残存長8.2cm・刃部長4cm・刃部幅1cmである。

第3主体部出土遺物　鉄鏃T6は，平根式柳葉形の有茎鏃で，腸抉りをもつ。全長12.7cm・刃部長5.2cm・刃部幅2.4cmである。鉄鏃T11は，柳葉形の細身の有茎鏃で，腸抉りをもつ。刃部のみ残存している。長さ7.3cm・幅1.6cmである。

墳丘盛土出土遺物　第2主体部の北西側および南西側から土器が出土している。北西側からは須恵器杯蓋S100・S101，蓋S102・S106，高杯S98が出土した。S100・S101は，形骸化した稜をもち，口縁端部は段になる。S101は，天井部に丸味をもつ。S102・S106は，中央が窪んだつまみをもつ。形骸化した稜をもち，口縁端部は段になる。S102は，天井部に丸味をもつ。S98は，有蓋短脚で，脚部に長方形の透かしを三方にもつ。口縁部は内傾気味に立ち上がり，端部は丸く終わる。

南西側からは須恵器高杯S122，短頸壺S96，土師器杯H18・H19が出土した。S122は，長脚一段透かしのものの杯部である。口縁部側面に波状文を施す。S96は，やや肩部が張った形状である。体部下半はヘラケズリである。H18は，外面に部分的にヘラケズリ・内面はハケ目調整である。H19は，浅めのもので，外面ナデ調整・内面ハケ目調整である。

土師器壺H14は，第4主体部の東側肩部上から出土したもので，第4主体部に伴うものともみられる。体部外面肩部以下はハケ目調整で，その他はナデ調整である。

第11節　12　号　墳

12号墳は，9号墳の南側約130mの尾根上に位置する。この古墳群の中では最も南に位置する古墳である。

1.　墳丘

調査前の状況では，直径約12.8m・高さ約1.3mである。形状は円形である。尾根筋にあたる墳丘の東および西側に，周溝状の地形の窪みがみとめられた。

掘削後の状況では，直径約11.5mである。墳丘北側を中心として幅1～1.5m・深さ30～40cmの周溝が墳丘を全周する。周溝南側埋土中から，須恵器杯身1点が出土した。

墳丘は，旧表土の暗茶灰色土上に盛土して築かれている。墳頂部は後世の削平をうけているものとみられるが，特に北半部は盛土層が薄くなっている。埋葬主体部は1基で，ある程度盛土を行ってから設けられているものとみられる。

2.　埋葬主体部

墳丘北半部に設けられる。長さ約5.6m・幅約1.9mの長方形墓壙であり，深さは約1m

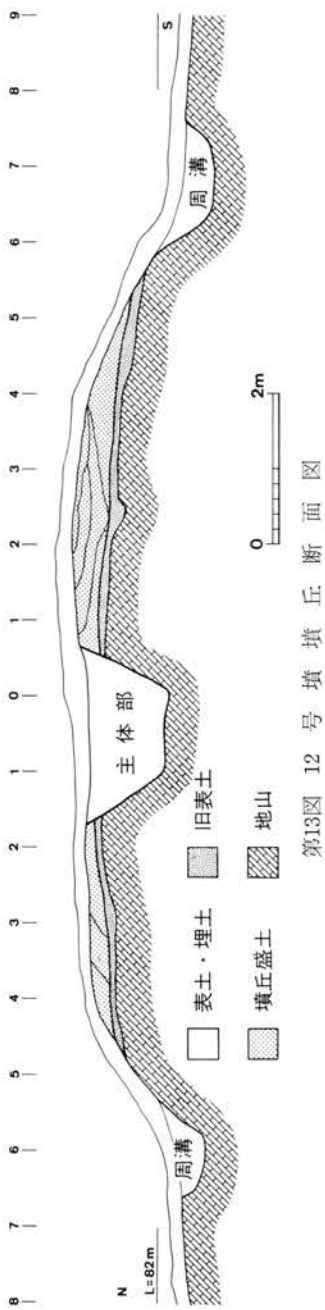
である。長軸方向はN—75°30′—Eであり，ほぼ東西方向である。棺は長さ約3.4m・幅約0.8mとみられる。墓壙底部は平坦であり，箱形木棺とみられる。棺は，墓壙ほぼ中央に置かれ，長軸方向は墓壙と同様である。

主体部ほぼ中央，棺底から約0.8～1m上方の墓壙埋土中から，大形の須恵器甕が大破した状態で出土した。これに混じって，須恵器杯蓋・蓋・高杯・鼎各1点が割れた状態で出土した。これらの須恵器は，棺埋納後に主体部上に供献され，割られたものとみられる。このほか，墓壙東側の埋土中から，須恵器杯身1点が出土した。棺底部からの出土遺物はない。

3. 出土遺物(図版第27・75)

埋葬主体部出土遺物　須恵器杯蓋S125は，口縁端部が段になり，天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもつ。杯身S128は，直立気味に高めに立ち上がる口縁部をもつ。底部は丸味をもち，見込みも深い。蓋S129は，上面が扁平なつまみをもつ。稜はないが，口縁端部は段になる。高杯S130は，長脚一段透かしで，脚部にカキ目を施す。鼎S131は，頸部上半に波状文・下半にカキ目を施す。甕S132は，大形のもので，頸部上方に波状文を施す。体部は，内外面ともタタキ目があり，内面下半はタタキの後カキ目を施す。この甕は，口縁部から肩部にかけて焼成時に窯割れしている。

その他の出土遺物　須恵器杯身S127は，周溝埋土から出土したもので，口縁部の立ち上がりはS128より低い。器高は高い。杯身S126は，墳頂南半部の表土から出土したもので，口縁部の立ち上がりは低く，器形も扁平気味である。



第13図　12号墳墳丘断面図

第3章　横穴・土壙墓の調査

先に述べたように，工事用道路敷設によって削り取られた丘陵断面に遺構とみられる土色の変化が認められたので，その周辺を調査した結果，横穴3基・土壙墓10基を検出した。

位置は，1～3号墳のある丘陵と4号墳がある丘陵の間の，北西方向に開口する谷の最奥部である。この谷の奥には，5・6号墳がある小丘陵が張り出し，東西方向と南北方向の支谷に分岐し，全体としてY字状の谷となる。主に調査したのは，東西方向の支谷の斜面である。南北方向の支谷には工事用道路が貫通しており，調査不能であった。

第1節　1　号　横　穴

5号墳西側の丘陵斜面に位置する。主軸方向は，N—100°30′—Eとほぼ東西方向であり，西側に開口する。天井部は落盤しており旧状をとどめていない。

1.　調査内容

床面の平面形からみて，長方形の玄室部から羨道部がのびるものとみられるが，その境は明瞭ではない。奥壁部から開口部にむかって約2.9m付近の若干のくびれ部がその境になるものとみられる。玄室の床面はほぼ平坦で，玄門部から羨道開口部にかけての床面は緩やかに傾斜して下降する。なお，天井部の落盤土の範囲からみて，羨道は，切り通しであったものとみられる。

この横穴は，開口部を工事用道路によって削平されているため，本来の全長は不明であるが，残存長は6.4mである。玄室長2.9m・最大幅1.3m，羨道部残存長3.5m・最大幅0.9mを測る。玄室から羨道開口部にむかって，主軸に沿ってやや蛇行気味に，素掘りの排水溝が設けられる。幅20～50cm・深さ10cm以下である。なお，床面から天井までの高さは，1.5m前後と推定される。

玄室の奥壁部付近南側壁寄りから須恵器杯蓋1点・杯身2点，土師器杯1点・高杯4点が出土した。玄室ほぼ中央部の排水溝北側から須恵器壺1点，その付近の排水溝北肩部から刀子が，玄室玄門寄りの排水溝南肩部から須恵器杯身1点が出土した。南側壁寄りの土器群には片付けられた形跡はなく，須恵器壺の出土状態からみても，遺体に供献された時点のままに，落盤で埋没したものとみられる。このような状況から，遺体は横穴の主軸に沿って玄室のほぼ中央の排水溝上に置かれたものとみられる。また，追葬はなされなかったものとみられる。棺の有無は不明である。

2. 出土遺物(図版第28・34・75)

須恵器杯蓋S133は，天井部が丸みをもち，口径は小さくなる。杯身S134は，内傾したやや高めの口縁部をもつ。器形は扁平である。杯身S135は，内傾して低く立ち上がる口縁部をもち，底部は丸みをもつ。杯身S136は，口径が小さいものである。壺137は，体部外面がカキ目調整され，底部は丸みをもつ。

土師器高杯H21～H24は，外面がハケ目調整のもの(H21・H22)とヘラケズリおよびナデ調整のもの(H23・H24)に分類できる。

第2節　2　号　横　穴

5号墳北側の丘陵斜面に位置する。主軸方向はN－8°－Eで，ほぼ南北方向であり，北側に開口する。天井部はほとんど落盤している。

1. 調査内容

2号横穴の玄室は，平面形がいわゆる小判形を呈する。その玄室部から羨道がのびており，全体の形状は，いわゆる「しゃもじ」形である。玄室床面はほぼ平坦で，羨道床面は緩やかに傾斜して下降する。天井部については，奥壁部の状況から，丸みをもつものもみられる。また，天井部の落盤土の範囲からみて，羨道は切り通しであったとみられる。

この横穴は，全長9m，玄室長3.5m・幅1.9m，羨道長5.5m・幅0.9mを測る。床面から天井までの高さは1.8m前後と推定される。玄室奥壁部から羨道の約2/3付近まで，主軸に沿って，素掘りの排水溝を設ける。幅30～40cm・深さ10cm以下である。この排水溝は，玄室内では蓋石を置く部分がある。また，玄門付近に，排水溝をはさんで，平坦面を上にした石を，2個置いている。排水溝の蓋石とともに棺台となっていたものか。

玄室内からは，西側の棺台状の石の付近から須恵器台付長頸壺と杯身各1点，奥壁側から3石目の蓋石上およびその西側から須恵器杯蓋・杯身各1点，その両側から須恵器杯身1点と杯蓋2点，玄室西側壁寄りから須恵器提瓶と土師器甕各1点が出土した。このほか，奥壁側から5・6石目の蓋石の間から刀子1点が，須恵器台付長頸壺の中から珪化木製棗玉・青色ガラス小玉・黄色ガラス小玉各1点が出土した。

このような玄室内の状況からみると，棺台状の石から排水溝の蓋石にかけて棺もしくは板状のものが主軸に沿って置かれ，そこに遺体が安置されていたものとみられる。また，3石目の蓋石の西側から出土した須恵器杯身は，伏せた状態であり，蓋石上から出土した杯蓋とともに，枕として用いられた可能性がある。そのほかの土器の出土状態は，遺体の周囲に供献された状況をとどめている。このようなことから，この横穴の埋葬は1回であり，追葬はなかったものとみられる。

2. 出土遺物(図版第28・32・76・81)

須恵器杯蓋S138・S139は，平坦な天井部をもち，側面観は台形状になる。杯蓋S140は，天井部に×のヘラ記号をもつ。杯身S141・S142・S143は，内傾して低く立ち上がる口縁部をもち，口径は小さくなる。

須恵器台付長頸壺S144は，肩部と胴部の境に刺突列点文を施す。頸部は斜め上方に立ち上がり，口縁端部は丸く終わる。脚部には，三方に長方形の透かしをもつ。提瓶S145は，体部全面に同心円状のカキ目を施し，側面にタタキの痕跡が残る。カギ状の釣手をもち，口縁端部は玉縁状になる。

土師器甕H25は，体部外面が縦方向のハケ目調整，内面は横方向のヘラケズリであり，内面頸部付近に横方向のハケ目が残る。

第3節　3　号　横　穴

3号墳がある丘陵の南側斜面，2号横穴と谷をはさんで向かいあうところに位置する。主軸方向はN—23°—Eであり，ほぼ南方向に開口する。天井部は落盤しており，旧状をとどめていない。

1. 調査内容

3号横穴は，上記2基の横穴とは若干異なっており，玄室・羨道のほかに前庭部を有する。玄室の平面形は，台形気味の長方形である。玄室床面は，ほぼ平坦であり，羨道・前庭部の床面は，緩やかに傾斜して下降する。

この横穴は，全長7.1m，玄室長2.7m・最大幅1.7m，羨道長1.9m・幅0.9m，前庭部長2.5m・最大幅1.5mを測る。玄室奥壁から北西側壁に沿って排水溝がめぐる。玄門付近にも主軸に直交する排水溝があり，玄室西隅で合流し，「F」字状を呈する。排水溝は，玄門から羨道へ出た部分で羨道床面の傾斜に沿って消滅する。玄室床面の排水溝に囲まれた部分に，石が4か所に置かれており，棺台とみられる。

玄室奥壁側の棺台状の石の周辺から須恵器が出土している。西側の石の付近からは，須恵器杯蓋・杯身各1点が，東側の石の周辺からは須恵器提瓶が出土し，その上から須恵器杯蓋・杯身が，かぶさった状態で逆転して出土した。このほか，玄室内からは，床面近くから刀子1点が出土した。羨道部中央やや玄室寄りから須恵器横瓶1点が，前庭部から須恵器台付長頸壺1点が出土した。

玄室内の状況からみて，玄室ほぼ中央にあたる棺台状の石の上に主軸に沿って棺が置かれていたものとみられる。提瓶の上から出土した蓋杯は，棺上に置かれたものが転落したものとみられる。このような状況や，出土した土器の量からみて，埋葬は1回であり，追

葬はなかったものとみられる。

2.　出土遺物(図版第29・76・77)

須恵器杯蓋S146・S149は，平坦な天井部をもち，側面観は台形状になる。杯身S148・S151は，内傾して低く立ち上がる口縁部をもち，口径は小さくなる。杯蓋S147・杯身S150は，埋土中出土のもので，ともに扁平な器形である。杯身の立ち上がりは低く，内傾する。須恵器台付長頸壺S152は，胴部に刺突列点文をもつ。頸部は外反気味に斜め上方に立ち上がり，口縁端部は丸く終わる。脚部に透かしをもたない。提瓶S153は，口縁部を欠失する。体部前面から側面にかけてはナデ調整，背面はヘラケズリである。肩部に環状の釣手をもつ。横瓶S154は，体部外面は格子状タタキ後カキ目調整，内面には同心円状のタタキ目が残る。口縁端部は，斜め上方へ低くつまみ出す。

第4節　土　　壙　　墓

3号墳のある丘陵の南側斜面，3号横穴の東側に10基の土壙が散在する。ほぼ長方形の平面形をもつ。これらの土壙は，その形態や遺物の出土状況から，墓とみられる。棺の痕跡は検出できておらず，その有無は不明である。

1.　土壙墓1

3号横穴の東側に位置する。長軸方向はN—8°—Eであり，ほぼ南北方向である。等高線に直交する。長さ約3.1m・最大幅約1.1mである。比較的急傾斜地に位置しており，床面を水平にするため，斜面上部にあたる北側を深く掘り込んでいるが，なお北から南にかけて若干傾斜している。

北端部から，土師器高杯6点が3点ずつ2列に並んで出土した。そのうちの2点の上には，須恵器杯蓋・杯身が乗った状態であった。南端部からは，須恵器・土師器など9点が出土した。これら北端・南端部の土器は，遺体の上下に副葬されたものとみられる。また，土壙中央部埋土から須恵器杯蓋・杯身・高杯脚部各1点が出土しており，これらは墓上に置かれたものが転落したものとみられる。このほか，埋土中から須恵器平瓶・土師器甕が細かく割れた状態で出土した。

須恵器杯身杯蓋S158・S159は，天井部のみにヘラケズリがみられる。杯身S160・S161は，内傾して低く立ち上がる口縁部をもつ。無蓋高杯S162・S163は，長脚二段透かしである。有蓋高杯S167(蓋)・S168は，長脚二段透かしで，蓋には天井部と口縁部の境に浅い沈線をめぐらす。高杯脚部S164は，透かしをもたない。瓶S165は，細い頸部と広い口縁部をもつ。提瓶S155・S156は，体部前面・側面がナデ調整，背面はヘラケズリである。横瓶S166は，体部外面が格子状タタキ，内面が同心円状タタキで，口縁部は外反

して丸く終わる。台付長頸壺S169は，低い脚部をもつ。平瓶S157は，肩部に小さい円形粘土を貼り付ける。

土師器高杯H26～H31は，外面がハケ目調整・内面はナデ調整である。甕H32は，外面はハケ目調整・内面は横方向のヘラケズリで，底部穿孔される。甕H33は，外面が縦方向のハケ目調整・内面はハケ目およびヘラケズリである。

2. 土壙墓2

土壙墓1の北側の比較的緩傾斜地に位置する。長軸方向は，N—97°—Eで，ほぼ東西方向である。等高線に並行する。長さ約1.3m・幅約0.8mで，小形の土壙である。土壙南辺は流出して残存していない。

埋土から，須恵器杯蓋・杯身が，かぶさった状態で出土した。墓上に置かれたものか。底部からは，副葬品は出土していない。

須恵器杯蓋S170は，やや台形に近い側面形をもつ。杯身S171は，低く立ち上がる口縁部をもつ。

3. 土壙墓3

土壙墓1の東側の比較的急傾斜地に位置する。長軸方向は，N—2°—Eで，ほぼ南北方向である。等高線に直交する。長さ約3.1m・最大幅約1.5mである。土壙墓1と同様，床面は北から南にかけて若干傾斜する。土壙ほぼ中央に，栗の植林による正方形の穴が掘り込まれている。

底部西辺やや北寄りから土師器高杯4点が出土した。また，埋土から須恵器杯蓋・杯身片が出土している。

土師器高杯(H34～37)は，外面はハケ目調整の後ナデ調整，内面はナデ調整である。須恵器杯蓋S172は，平坦な天井部をもち，側面観は台形に近い。杯身S173は，内傾して低く立ち上がる口縁部をもち，底部は平坦である。

4. 土壙墓4

土壙墓3の北側の比較的緩傾斜地に位置する。長軸方向は，N—91°30′—Eで，ほぼ東西方向である。等高線に並行する。長さ約2.4m・幅約1.0mである。土壙南辺は流失して残存していない。栗の植林による正方形の穴が南西側に掘り込まれている。

床面東端部から須恵器有蓋台付長頸壺1点・杯蓋2点・杯身2点が出土した。須恵器杯蓋S174・S175は，天井部と口縁部の境に沈線をめぐらし，形骸化した稜をつくる。口縁端部は段をなす。ともに，天井部に横一文字のヘラ描き沈線をもつ。杯身S176・S177は，内傾気味に立ち上がる高めの口縁部をもつ。ともに，底部に横一文字のヘラ描き沈線をもつ。有蓋台付長頸壺S178(蓋)・S179は，頸部から体部上半にかけてカキ目調整し，その

間に頸部には波状文・体部には刺突列点文を施す。脚部にもカキ目を施し，三方に三角形の透かしをもつ。蓋は，内面に返りをもつ。

5.　土壙墓5

土壙墓4の東側に位置する。長軸方向は，N—1°30′—Eで，ほぼ南北方向である。等高線に直交する。長さ約2.4m・幅約0.8mである。土壙墓1と同様，床面は北から南にかけて若干傾斜する。

南端部から須恵器提瓶1点・砥石1点が出土した。床面からは約12cm上部であり，墓上に置かれたものか。底部からは副葬品は出土していない。

須恵器提瓶S180は，体部は全面に同心円状のカキ目を施し，退化したカギ状の釣手をもつ。口縁端部は面をもつ。砥石I・30は，断面形が平行四辺形状を呈し，石材は，砂岩質である。

6.　土壙墓6

土壙墓5の東側の比較的緩傾斜地に位置する。長軸方向は，N—92°30′—Eで，ほぼ東西方向である。等高線に並行する。長さ約2.5m・幅約1.0mである。

土壙床面中央部北辺から須恵器短頸壺1点が横転して，南辺から土師器台付長頸壺1点が立った状態で出土した。

須恵器短頸壺S181は，やや肥厚した頸部をもち，外面頸部から肩部にかけて2条の縦方向のヘラ描き沈線を施す。土師器台付長頸壺H38は，外面および内面頸部までハケ目調整の後ナデ調整を施す。土師器としては特殊な器形である。

7.　土壙墓7

土壙墓6の東側の比較的急傾斜地に位置する。長軸方向は，N—15°30′—Eで，ほぼ南北方向である。等高線に直交する。長さ約2.9m・最大幅約1.1mである。土壙西辺中央に栗の植林による正方形の穴が掘り込まれている。

床面北端部から須恵器無蓋短脚高杯6点が3点ずつ2列に並んで出土した。その西側から須恵器提瓶1点が出土した。土壙中央部から土師器甕2点・須恵器無蓋高杯1点が出土した。出土状況からみて，墓上に置かれていたものが陥没したものか。南端部はピット状に掘り込まれており，その北側肩部から鉄鏃4本以上がかたまって出土した。

須恵器無蓋短脚高杯S182～S187は，焼成不良のため軟質である。脚部には透かしをもたない。無蓋高杯S188は，杯部外面に刺突列点文を施す。脚部は，2条の沈線で上下に区分され，上下ともに三方に長方形の透かしをもつ。提瓶S189は，体部ナデ調整であり，前面中央に2条のヘラ描き沈線がある。頸部は外反気味に斜め上方に立ち上がり，口縁端部は丸く終わる。肩部に退化した釣手をもつ。

土師器甕H39は，体部外面下半が横方向の，上半が縦方向のハケ目調整，内面が横方向のヘラケズリである。底部は，やや扁平気味である。

8. 土壙墓8

土壙墓7の東側の比較的緩傾斜地に位置する。長軸方向は，N—111°—Eで，ほぼ東西方向である。等高線に直交する。長さ約1.8m・幅約0.8mである。出土遺物はない。

9. 土壙墓9

土壙墓7の南側の急傾斜地に位置する。長軸方向は，N—5°30′—Eで，ほぼ南北方向である。等高線に直交する。土壙南側は，流失して残存していない。残存長は約1.8m・幅約1.0mである。床面は，土壙墓1と同様，北から南へかけて若干傾斜している。出土遺物はない。

10. 土壙墓10

土壙墓9の西側の急傾斜地に位置する。長軸方向は，N—13°30′—Eで，ほぼ南北方向である。等高線に直交する。長さ約2.6m・最大幅約1.1mである。床面は，北から南にかけて若干傾斜する。出土遺物はない。

第4章　考　　察

第1節　出土土器について

栗ケ丘古墳群の調査で出土した土器のうち，実測可能なものは231点である。このうち，須恵器は191点で約83%，土師器は40点で約17%である。器種的に最も多いのは須恵器蓋杯で，杯蓋48点・杯身57点，あわせて105点となり，須恵器中で約55%・全体でも約45%の高率を占める。このほか，須恵器では，高杯23点・提瓶20点・蓋13点・壺9点・甕7点・台付長頸壺6点・横瓶4点・甕3点・平瓶1点がある。これらのうちで，提瓶が須恵器中で約10%・全体でも8.6%と多いのが注目される。蓋杯や高杯とともに，器種構成の中心的な位置を占める。また，甕が少ないのも特徴的である。

土師器では，高杯が最も多く，15点である。次いで，杯が11点，以下，甕9点・壺4点・台付長頸壺1点である。杯や高杯が器種構成の中心となるのは，須恵器と同様である。

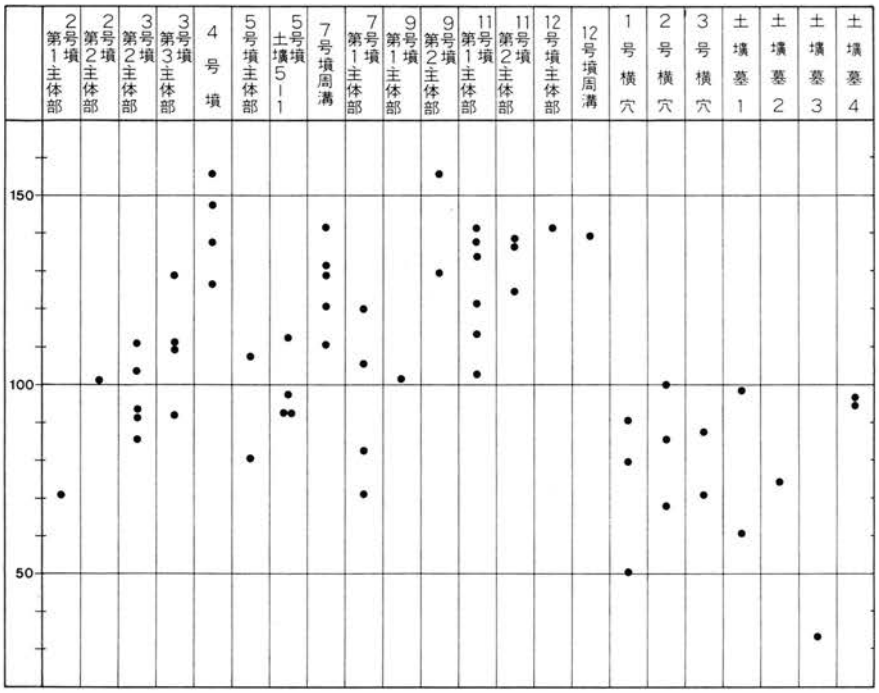
1.　須恵器蓋杯の分類

栗ケ丘古墳群の築造年代を考えるためには，出土量の最も多い須恵器蓋杯によるのが妥当である。ここでは，蓋杯の形態等から，以下の7種に分類した。なお，分類にあたっては，杯身の「立ち上がり指数」(仮称)を補助的に使用した。これは，杯身の口縁部が，新しいものほど内傾して低くなることに着目したものである。口縁部の頂点と受け部の先端部を2点とする直角三角形を想定し，高さ(口縁部頂点と受け部先端の垂直長)をaとし，底辺(口縁部頂点と受け部先端の水平長)をbとして，aをbで割った数値に100を掛けて算出した。つまり，「$\frac{a}{b}\times100$」である(第1表参照)。数値が大きいほど立ち上がりが比較的に高いことを示す。

A　4号墳・9号墳第2主体部出土のものである。杯蓋は，天井部が丸味をおび，口縁部との境に形骸化した稜をもつ。口縁端部には段をもつ。杯身は底部が丸味をおび，見込みも深い。口縁部は直立気味に立ち上がっており，高い。立ち上がり指数は130から150前後である。口縁端部内面にわずかな段をもつ。丸く終わるものもある。

B　11号墳・12号墳出土のものである。杯蓋は，天井部が丸味をおび，器高は高い。口縁部と天井部の境に形骸化した稜を，口縁端部内面に段をもつ。杯身は，底部が丸味をおび，見込みは深い。口縁部の立ち上がりは，Aより低くなり，口縁端部には段がなく，丸く終わる。立ち上がり指数は120から140前後である。

C　7号墳・9号墳第1主体部出土のものである。杯蓋は，天井部がやや平坦になり，



第14図　須恵器杯身立ち上がり指数分布図

器高を減ずる。口縁部との境には形骸化した稜を，口縁端部内面に段をもつ。杯身は，底部が丸味をおびるが，見込みが浅くなるものもある。口縁部の立ち上がりは，Bより若干低くなり，口縁端部は丸く終わる。立ち上がり指数は100から120程度である。

D　2号墳第2主体部・3号墳・5号墳・土壙5-1・土壙墓4出土のものである。全体的に整形が雑になる。杯蓋は天井部と口縁部の境に沈線状の形骸化した稜をもつものともたないものがある。口縁端部内面は段になり，先端部は外反気味である。杯身は，口縁部の立ち上がりが内傾して低くなる。口縁端部は丸く終わる。立ち上がり指数は100前後を中心とする。

E　2号墳第1主体部・6号墳出土のものである。杯蓋は稜をもつものともたないものがある。口縁端部内面に沈線状の段をもつものと，丸く終わるものがある。杯身は，口縁部の立ち上がりがさらに内傾し，高さも低くなる。器高はDとほぼ同様であるが，立ち上がりをかなり減ずる。

F　8号墳・1号横穴出土のものである。杯蓋・杯身ともに器高・口径が縮小する。杯蓋は稜がなくなる。口縁端部には斜面状の段をもつ。杯身の立ち上がり指数は80前後であるが，次のGと分別しがたいものもある。

G　2号横穴・3号横穴・土壙墓1・土壙墓2・土壙墓3出土のものである。杯蓋は天井部のヘラケズリの範囲が狭くなり，側面観が台形状になる。口縁端部内面の段は消滅し丸く終わる。

杯身は，Fと同様のものもあるが，口縁部の立ち上がりはさらに短くなる。立ち上がり指数は60～80前後を中心として多少ばらつきがある。

2. 須恵器蓋杯の年代とその他の土器

以上，須恵器蓋杯を7種に分けたが，その年代については，陶邑編年(注7)を参照することとする。なお，第14・15図に蓋杯の分類とそれに伴う土器を図示している。この図には，原則として，蓋杯がともに出土した遺構のもののみを掲載している。なお，これらの須恵器には，伝世等の要件も考慮すべきであり，製作時期が同一とは言い切れない。

陶邑編年によると，栗ケ丘古墳群出土の須恵器はⅡ期のものである。AについてはMT15型式に，B・CについてはTK10型式，E・FについてはTK43型式に並行するものとみられる。Dについては，TK10型式とTK43型式の中間的なものとみられるが，瓦などをみると，TK10型式の範疇に含めるべきであるかもしれない。Gについては，TK43型式の要素も認められるが，TK209型式に近いものとみられる。年代的には，Aが6世紀前半，B・C・Dが6世紀中葉を前後する頃，E・Fが6世紀後半，Gが6世紀末から7世紀初頭頃となろう。

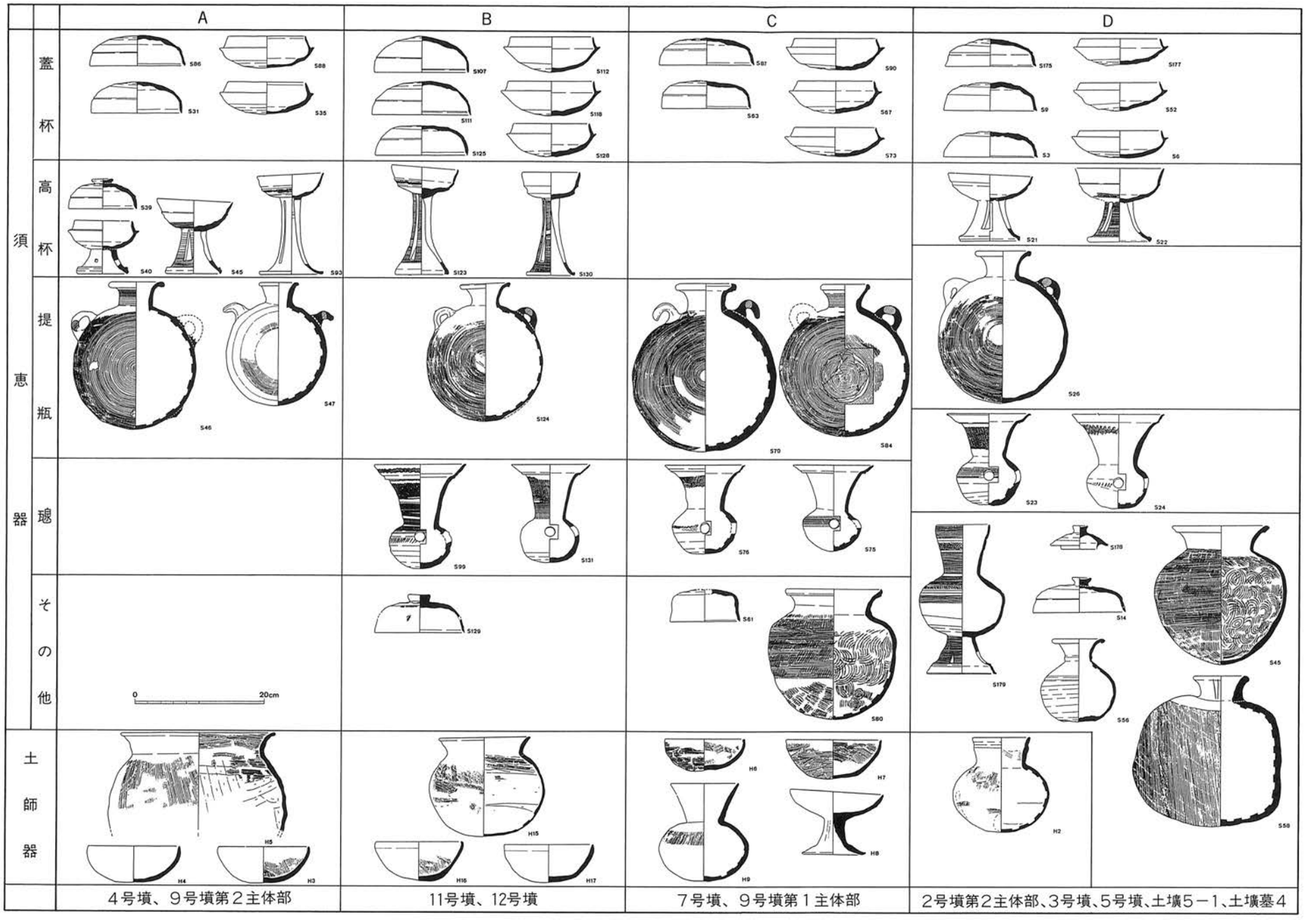
その他の土器についてみると，まず，須恵器高杯では，長脚一段透かしのものは，A・Bの段階までであり，それ以後の段階にはない。有蓋短脚高杯は，主体部からの出土ではないので分類表には入れていないが11号墳からも出土しており，A・Bの段階にある。

須恵器提瓶は，環状およびカギ状の釣手をもつものが，AからGの段階まである。釣手のないものは，9号墳からも出土しているが，表土からの出土であり，伴う蓋杯がないため，どの段階に所属するのか不明である。確実なものは，Gの段階の土壙墓1から出土したものである。また，後述するが，土壙墓1と同段階とみられる土壙墓7からは，粘土の小塊を貼り付けただけの，退化した釣手をもつものが出土している。

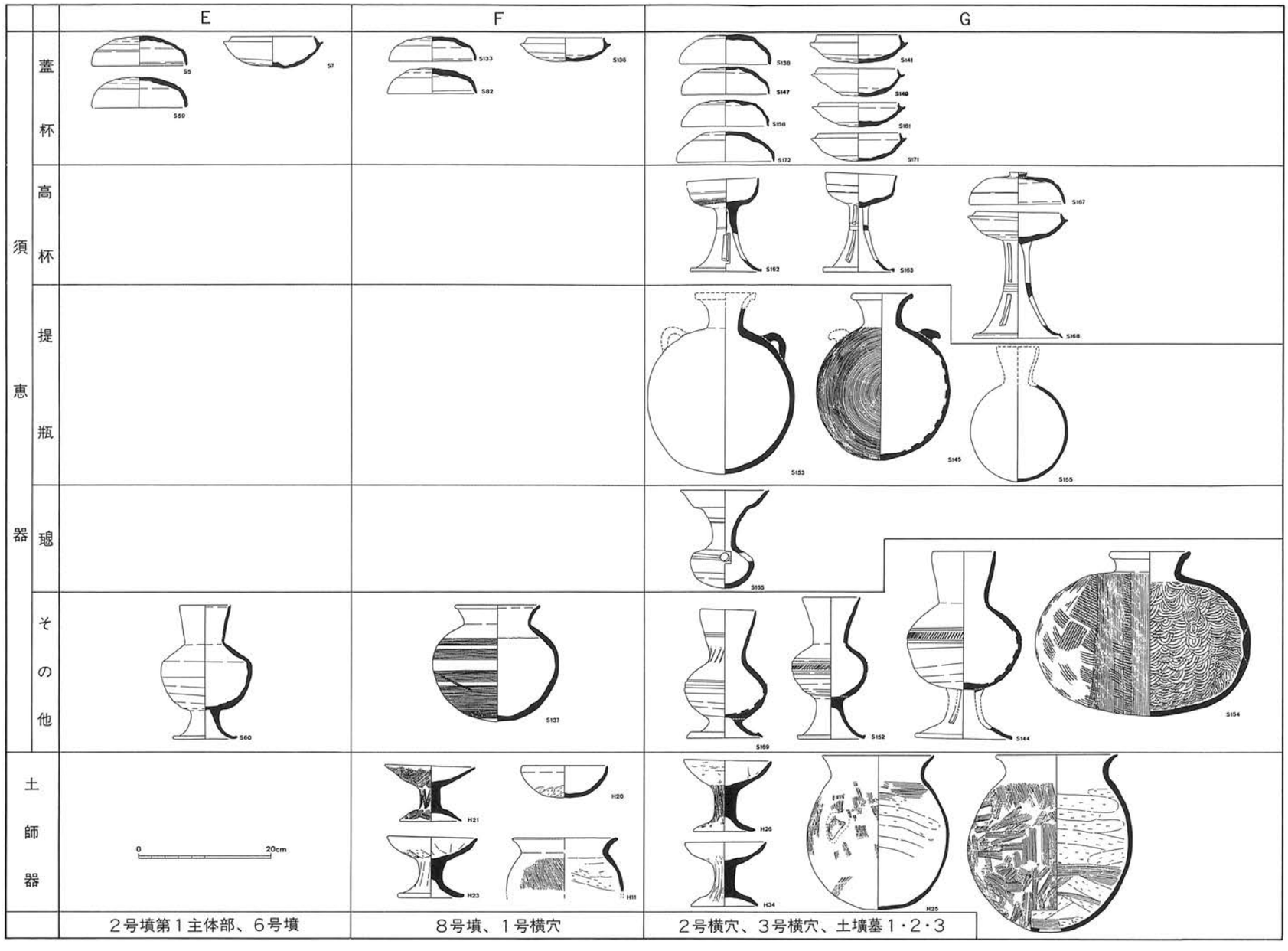
須恵器壺は，C・Dの段階では，体部内外面にタタキ目を残すが，Fの段階では，タタキ目をナデ消して外面にカキ目を施す。

第2節　遺構について

前節で，陶邑編年によって，出土土器の年代比定を行ったが，それに基づいて各古墳等について整理してみたい。


A
B
C
D
須恵器
蓋杯
高杯
提瓶
瑕
その他
土師器
0
20cm
4号墳、9号墳第2主体部
11号墳、12号墳
7号墳、9号墳第1主体部
2号墳第2主体部、3号墳、5号墳、土壙5－1、土壙墓4

第15図　土器分類図　1


E
F
G
須恵器
蓋杯
高杯
提瓶
瑕
その他
土師器
S5
S7
S59
S133
S136
S82
S138
S141
S147
S149
S158
S161
S172
S171
S162
S163
S167
S168
S153
S145
S155
S165
S60
S137
S169
S152
S144
S154
H20
H21
H23
H11
H26
H34
H25
0
20cm
2号墳第1主体部、6号墳
8号墳、1号横穴
2号横穴、3号横穴、土壙墓1・2・3

第16図 土器分類図 2

1. 古墳について

Aの段階では4号墳と9号墳が，Bの段階では11号墳と12号墳が，Cの段階では7号墳が築造される。これらの古墳は古墳群内の西半部に位置する。Dの段階では，2号墳・3号墳・5号墳が築造される。これらの古墳は古墳群内の東半部に位置し，この段階に墓域が東へ広がっている。Eの段階では，5号墳の東側に隣接して6号墳が造られる。Fの段階では，9号墳の西側に隣接して8号墳が造られる。Gの段階では，古墳の築造はなくなる。このほか，分類表に入れなかった1号墳は，その位置からみてDの段階以降の築造とみられる。なお，1号墳の墓壙底部には3条の溝状の掘り込みがあり，これは，6号墳にもみられる。1号墳の築造時期は6号墳に近いものともみられる。

この古墳群では，2基の古墳が隣接して築造されているものがある。2・3号墳，5・6号墳，8・9号墳である。築造時期は，5・6号墳では5号墳，8・9号墳では9号墳と，規模の大きい古墳が先に築造されている。2・3号墳では，築造時期は同じ段階であるが，他の2例からみて，規模の大きい3号墳がやや先行するものとみられる。

埋葬主体部は，東西方向に長軸をもつものが多い。遺体の頭位は東側と推定される。北西から南東方向に長軸をもつ1～3号墳も，遺体の頭位は南東側と推定され，東西方向の主体部・東側頭位が意識されているものとみられる。ただ，11号墳は埋葬主体部が南北方向であり，遺体の頭位は北方向と推定される。4号墳も，盗掘坑の状態から南北方向の主体部とみられる。この2基のみ，他の古墳と異なる長軸方向をもつ。

一古墳内の埋葬主体部数は，7・9・11号墳が4基，3号墳が3基，2号墳が2基で，その他の古墳は1基である。複数主体部をもつ古墳は，A～Dの段階に築造されている。

この段階に築造された古墳のうちで，4号墳と12号墳は単数主体部である。12号墳については，主体部の位置が北半部に偏しており，追葬を前提としていたものが何らかの理由で行われなかったものともみられるが，現状では主体部は1基である。この2基以外の単数主体部の古墳は，Dの段階以後の築造である。

2号墳については，墳丘が重複しており，それぞれの墳丘に1基の主体部という見方もできるが，ここでは，追葬時に多少盛土が追加されたりすることと同様にとらえて，同一墳丘内に2基の主体部とみておきたい。

2. 横穴について

横穴は，F・Gの段階に造られており，1号横穴が2・3号横穴にやや先行するものとみられる。古墳の築造終了とともに横穴が造られる。

これらの横穴は，天井部が残存しておらず，その形状は不明である。平面形や内部施設は，それぞれ個性的である。これらの横穴の特徴は，追葬の形跡が認められないことであ

第1表　京都府内横穴地名表

番号	名称	所在地			基数	時期
1	長柄横穴群	久美浜町	長柄		7	
2	王の宮横穴群	〃	須田	東側	11	
3	下西谷横穴	〃	下西谷		1	
4	白川横穴群	〃	奥三谷	白川	4	
5	谷横穴	〃	谷		1	
6	三反田横穴群	網野町	下岡	三反田	10数基	
7	住地横穴	弥栄町	外村	住地	1	古墳後期後半
8	飛谷横穴群	〃	堤	飛谷	2	
9	城の越横穴	〃	堤	城の越	1	古墳後期末
10	舟泉寺横穴群	峰山町	荒山	松谷	3	
11	丸山横穴	〃	古殿	丸山	1	
12	目谷横穴群	〃	新治	目谷	8	
13	船山横穴	〃	二箇	相之目	1	
14	下山横穴群	〃	五箇	船岡	10	
15	脇谷横穴群	〃	〃	脇谷	2	古墳後期末
16	筏ケ鼻横穴群	〃	鱒留	イカダガ鼻	5	
17	高尾坂横穴	〃	橋木	高尾坂	1	
18	八幡山横穴	〃	杉谷	寺替	1	
19	丸山横穴群	大宮町	上常吉	丸山	1	
20	大田鼻横穴群	〃	三坂	帯城	30	古墳後期末～奈良時代
21	有明横穴群	〃	三坂	有明	9	古墳後期末
22	大谷西横穴群	〃	谷内		5	
23	小泊横穴	伊根町	泊	小泊	1	
24	城山横穴	岩滝町	岩滝	城山	1	
25	庄内横穴	野田川町	岩屋	庄内	1	
26	古屋敷横穴群	〃	三河内	古屋敷	3	
27	有熊横穴群	加悦町	加悦奥	横辺	6	
28	こもり穴横穴	〃	温江	百合	1	
29	入谷横穴群	〃	明石	入谷	2	
30	小谷横穴	綾部市	小呂	小谷	伝数基	
31	栗ケ丘横穴群	〃	〃	田坂	3	古墳後期後半
32	三ノ宮校裏山横穴	瑞穂町	三ノ宮		1	
33	美濃山横穴群	八幡市	美濃山	大塚	6	古墳後期後半
34	荒坂横穴群	〃	〃	御毛通	8	
35	女谷横穴群	〃	内里	女谷	4	
36	狐谷横穴群	〃	美濃山	狐谷	11	古墳後期後半
37	松井横穴群	田辺町	松井	上西浦・向山	19	〃
38	堀切横穴群	〃	薪	堀切谷他	10	古墳後期・古墳後期後半
39	飯岡横穴群	〃	飯岡	久保田	2	古墳後期後半
40	北山横穴群	山城町	北河原	北谷	2	古墳後期

番号は第17図と対応

第17図　京都府内横穴分布図

る。横穴は追葬を前提とした墓制とされている。これらの横穴は，その造られた地盤が脆く，追葬以前に崩壊したとも考えられるが，3基ともにそうであったことは考えにくい。2号横穴は，中でもしっかりしたものである。

また，これらの横穴が造られた時期は，全国的にも横穴の築造が盛んになる時期であり，京都府内においても丹後地域や南山城地域に横穴が築造されはじめる。丹後・南山城地域

では，これ以後７世紀にかけて，一部では８世紀にも築造され，密集した横穴群を形成する。ここでは，６世紀後半から末頃にかけてまばらに３基の横穴が築造されるのみで，以後，継続して築造されることはない。このことも，この横穴群の特徴といえる。このことは，また，この横穴群が京都府内でも古いものに属することをも示す。栗ケ丘では，横穴の築造終了をもって，栗ケ丘の丘陵地での造墓も終了する。

3. 土壙墓について

検出した土壙墓は，土壙5-1も含めて11基である。横穴群の周囲に散在する。造られた時期は，D～Gの段階である。Dの段階の土壙墓４・土壙5-1は，長軸が斜面の等高線に平行しており，丘陵上部近くの比較的緩斜面に造られている。Gの段階の土壙墓１や土壙墓３は，等高線に直交する長軸をもち，急斜面に位置する。土壙墓からの出土遺物には，時期決定の手掛りとなるものが少なく，すべての土壙墓の時期を知るのは困難であるが，傾向として，前者と同様の状況のものが後者と同様の状況のものに先行するものとみられる。

第３節　栗ケ丘古墳群の構造

栗ケ丘古墳群では，11基の古墳と横穴３基・土壙墓10基を調査した。これらの墳墓は，６世紀の前半から６世紀末ないしは７世紀初頭頃にかけて営まれている。古墳は，すべて木棺直葬の円墳である。

前章で述べたとおり，11基の古墳の中には，複数主体部のものと単数主体部のものがある。複数主体部をもつ古墳の築造は，Dの段階・TK10型式期でも新しい段階までである。

栗ケ丘古墳群と同じく旧丹波国内に属する兵庫県氷上郡春日町の松ノ本古墳群(注8)では，８基の古墳と１基の無墳丘箱式石棺墓が発掘調査されている。古墳は，すべて木棺直葬墳である。築造時期は，TK47型式期からTK10型式期までであり，栗ケ丘古墳群よりもやや先行する。埋葬主体部は各古墳１基であり，これを「群集墳が一般的にもつ属性であるとされる多葬墓とは明らかに相違しており，地域的特性も含めて検討を要する」としながらも「古墳の造営主体が，『家父長制家族』ではなく，家族内における家父長のみが，継起的に古墳を造営したと考えられる」とされる。このように考えれば，栗ケ丘古墳群では，Dの段階までは家族墓的な複数主体部の古墳も築造されていたが，それ以降は家父長墓的な単数主体部の古墳のみが築造される，といえる。これは，Eの段階の６号墳やFの段階の８号墳が，墳丘規模が小さいにもかかわらず，碧玉製管玉や鍔付の鉄刀など，この古墳群内では卓越した副葬品をもつことからも推定できる。また，Dの段階に，古墳の周囲の丘陵斜面に土壙墓が造られ始めるのも示唆的である。

7～9号墳がある丘陵の上部は，広い平坦地になっており，なんらかの遺構があるものとみてほぼ全面的に掘削して調査したが，遺構はなかった。このように，古墳がある丘陵上には土壙墓は造られておらず，土壙墓の設営場所については古墳と明確に区別されていたものとみられる。このことは，Dの段階以降，家父長とそれ以外が明確に区別されるようになったことを示すものとみられる。

Fの段階には古墳の築造が終了し横穴が造られる。前章で述べたとおり，横穴には追葬の形跡はなく，単次葬である。これは，横穴という新墓制を取り入れたにもかかわらず，古墳築造時の一墳一主体部が意識されているものとみられ，古墳の造営主体と横穴の造営主体が同じであることを示すものと考えられる。

第4節　栗ケ丘古墳群の周辺

綾部市・福知山市を中心とする中丹地域には，多数の古墳が分布している。これらの古墳のうち，発掘調査されて比較的内容のわかるものについて，6世紀を中心としてみてみたい。

綾部市館町の高谷古墳群(注9)は，10基の円墳からなる古墳群である。このうち8基が調査されている。うち1・5・6・7号墳の4基が木棺直葬墳，2・3・4・10号墳の4基が横穴式石室墳である。木棺直葬墳はTK23型式期の築造である。いずれも一墳一主体部である。横穴式石室墳で最も古いのは，3号墳であり，TK10型式期の築造である。この頃に，中丹地域にも横穴式石室が導入されたものとみられる。以後，6世紀末頃まで横穴式石室墳が築造される。横穴式石室墳への追葬は，それ以後も続く。このように，高谷古墳群では，木棺直葬墳から横穴式石室墳へ移行する。

福知山市猪崎の池の奥古墳群(注10)では，3・4・6・7号墳の4基が発掘調査されている。3・6・7号墳は，木棺直葬の円墳であり，埋葬主体部は複数である。6世紀中葉頃の築造である。4号墳は，竪穴系横口式石室(注11)を主体部とするものである。玄門部に段をもち，羨道部が一段高くなるもので，このような石室は，中丹地域では例がなく，特殊なものである。TK10型式期の築造であり，追葬は7世紀初頭まで続く。池の奥古墳群は，木棺直葬墳を主体とする古墳群であるが，1基のみ特殊な石室をもつ古墳が含まれる。

中丹地域においては，おそらく6世紀中葉頃に横穴式石室が導入され，それ以後，6世紀後半から7世紀前半頃にかけて，おもに福知山盆地の西半部にあたる福知山市域で横穴式石室墳が築造される。牧古墳群(注12)・向野西古墳群(注13)・下山古墳群(注14)などである。東半部の綾部市域は，木棺直葬墳が多い地域である。高谷古墳群や，以久田野古墳群(注15)・久田山古墳群(注16)などの一部に横穴式石室墳がみられるが，大きい群を形成するには至らない。

栗ケ丘古墳群では，横穴式石室は導入されず，また，池の奥4号墳のような特殊な石室が用いられることもない。隣接する田坂野古墳群・石井根古墳群も含め，この地域でもまとまった木棺直葬墳群を形成している。

栗ケ丘古墳群の最大の特徴は，その最終段階において横穴を取り入れていることである。中丹地域では現在のところ類例をみない。横穴自体も，この地域ではまれなものである。これは，まとまった古墳群の調査があまり行われていないことにもよるであろう。また，古墳と一体になって群を構成する例は，京都府内でも田辺町堀切横穴群(注17)・大宮町大田鼻横穴群(注18)が知られているだけである。栗ケ丘古墳群は，土壙墓も含めて，古墳時代後期の墓地の一例を示す良好な資料といえる。

なお，この報告をまとめるにあたり，平良泰久・松井忠春・小山雅人・伊野近富・田代弘・小池　寛の各氏から有益なご教示をいただいた。文末ではあるが，記して感謝いたします。

注1　平良泰久「綾部市吉美・八田地区分布調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会)　1984

注2　伊野近富「栗ケ丘古墳群昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986
引原茂治「栗ケ丘古墳群昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987
引原茂治「栗ケ丘横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

注3　引原茂治「栗ケ丘古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987
引原茂治「北谷城跡・西八田城跡試掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注4　中村孝行『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告』第11集　綾部市教育委員会)　1984

注5　平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注6　堤圭三郎「田坂野群集墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1972)』京都府教育委員会)　1972

注7　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966

注8　井守徳男「松ノ本古墳群」(『兵庫県文化財調査報告書』第26冊　兵庫県教育委員会)　1985

注9　平良泰久ほか「高谷古墳群発掘調査概要」(『綾部市文化財調査報告書』1　綾部市教育委員会)　1973

注10　大槻眞純・崎山正人「池の奥古墳群」(『福知山市文化財調査報告書』第7集　福知山市教育委員会)　1985

注11　注10の文献の記載に従った。

注12　『丹波の古墳』Ⅰ　山城考古学研究会　1983

注13　近藤義行ほか『向野西古墳群発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会　1974
小泉信吾ほか「向野西古墳群発掘調査概要報告書」(『福知山市文化財調査報告書』第4集　福知山市教育委員会)　1981

注14　崎山正人「下山古墳群発掘調査概報」(『福知山市文化財報告書』第14集　福知山市教育委員会)　1989

注15　注12に同じ

注16　大槻眞純「久田山」(『綾部市文化財調査報告書』第5集　綾部市教育委員会)　1979

注17　高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』　京都府教育委員会)　1969

注18　岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会)　1987

参考文献

池上　悟『横穴墓』ニュー・サイエンス社　1984
白石太一郎編『古墳』吉川弘文館　1989
『丹波の古墳』Ⅰ　山城考古学研究会　1983

第2表　須恵器法量表

番号(S)	器種	出土地点	法量(cm) 口径	器高	底径	受部胴径	杯壺高	器高指数	a (cm)	b (cm)	立ち上り指数
1	提瓶	1号墳主体部	6.4	18.05		14.7					
2	〃	1号墳周溝	11.8	不明		28.9					
3	杯蓋	2号墳第2主体部	14.65	3.9				26.62			
4	〃	2号墳第1主体部	14.5	2.9				20.00			
5	〃	〃	14.0	4.4				31.43			
6	杯身	2号墳第2主体部	12.3	4.2		15.2		34.15	1.12	1.11	100.9
7	〃	2号墳第1主体部	12.5	4.5		15.5		36.00	0.92	1.30	70.8
8	壺	2号墳周溝	8.0	10.3							
9	杯蓋	3号墳第3主体部	14.4	4.2				29.17			
10	杯身	〃	12.4	3.8		14.35		30.65	1.05	0.95	110.5
11	〃	〃	12.2	4.1		14.4		33.61	1.12	1.02	109.8
12	〃	〃	13.0	5.0		15.5		38.46	1.15	1.25	92.0
13	〃	〃	12.75	4.5		14.5		35.29	1.20	0.93	129.0
14	蓋	〃	14.45	5.4			4.05	28.03			
15	杯身	3号墳第2主体部	12.6	4.5		15.1		35.71	1.50	1.35	111.1
16	〃	〃	12.6	4.6		15.05		36.51	1.12	1.31	85.5
17	〃	〃	11.8	4.3		14.55		36.44	1.35	1.44	93.8
18	〃	〃	11.8	4.4		14.5		37.29	1.28	1.40	91.4
19	〃	〃	11.9	4.5		14.4		37.82	1.35	1.30	103.8
20	〃	3号墳周溝	12.3	4.4		14.4		35.77	1.30	1.20	108.3
21	高杯	3号墳墳頂	12.9	10.2	9.0		4.1	31.78			
22	〃	〃	13.6	11.3	9.3		5.3	38.97			
23	聰	3号墳第3主体部	12.6	14.0							
24	〃	3号墳墳頂	14.25	14.9							
25	提瓶	3号墳第2主体部	不明	不明		21.2					
26	〃	〃	8.1	23.25		20.1					
27	壺	〃	9.4	11.5							
28	〃	〃	13.4	18.6							
29	〃	〃	14.5	21.25							
30	杯蓋	4号墳	13.4	4.6				34.33			
31	〃	〃	14.1	4.8				34.04			
32	〃	〃	14.3	4.1				28.67			
33	〃	〃	14.7	4.65				31.63			
34	杯蓋	〃	13.1	4.6				35.11			
35	杯身	〃	11.9	4.9		14.5		41.18	1.83	1.33	137.6
36	〃	〃	11.5	5.2		14.2		45.22	1.65	1.30	126.9
37	〃	〃	13.5	5.8		16.25		42.96	1.90	1.22	155.7
38	〃	〃	11.9	5.3		14.9		44.54	1.95	1.32	147.7
39	蓋	4号墳土壙4-1	10.4	4.55			3.9	37.50			
40	高杯	〃	8.8	8.1	7.5	11.1	4.4	50.00	1.57	1.12	140.2

番号(S)	器種	出土地点	法量(cm) 口径	器高	底径	受部胴径	杯壺高	器高指数	a (cm)	b (cm)	立ち上り指数
41	蓋	4号墳土壙4-1	10.1	4.15			3.5	34.65			
42	高杯	〃	9.0	8.05	7.6	11.1	4.3	47.78	1.50	0.98	153.1
43	蓋	〃	10.3	4.5			3.9	37.86			
44	高杯	〃	9.0	7.8	7.6	10.95	4.3	47.78	1.55	0.95	163.2
45	〃	4号墳	11.7	11.2		8.4	4.7	40.17			
46	提瓶	〃	7.8	22.4		19.0					
47	〃	〃	5.6	18.75		15.6					
48	壺	4号墳墳頂	17.3	不明							
49	杯身	5号墳主体部	12.5	〃		15.0			1.37	1.28	107.0
50	〃	〃	12.2	4.5		14.65		36.89	1.15	1.35	85.2
51	〃	5号墳土壙5-1	12.6	4.8		15.1		38.10	1.20	1.30	92.3
52	〃	〃	12.4	4.3		14.8		34.68	1.25	1.28	97.7
53	〃	〃	12.8	4.8		15.3		37.50	1.20	1.30	92.3
54	〃	〃	12.3	4.1		14.1		33.33	1.07	0.95	112.6
55	杯	5号墳主体部	8.8	3.87				43.98			
56	壺	5号墳土壙5-1	7.3	12.7							
57	高杯	5号墳周溝	13.7	不明	12.4		4.1	29.93			
58	横瓶	5号墳土壙5-1	7.85	23.0		23.1					
59	杯蓋	6号墳主体部	14.0	4.6				32.86			
60	台付壺	6号墳墳丘	7.6	19.8	8.5		15.6				
61	杯蓋	7号墳周溝埋土	10.6	不明				—			
62	〃	7号墳周溝	13.85	4.2				30.82			
63	〃	〃	13.65	4.25				31.13			
64	〃	〃	13.8	5.1				36.96			
65	〃	〃	13.7	4.7				34.31			
66	杯身	〃	13.0	4.5		15.3		34.62	1.26	1.14	110.5
67	〃	〃	11.85	5.0		14.4		42.19	1.67	1.18	141.5
68	〃	〃	11.6	5.15		14.2		44.40	1.68	1.28	131.3
69	〃	〃	12.5	4.1		14.9		32.80	1.52	1.18	128.8
70	〃	〃	12.1	4.4		14.3		36.36	1.39	1.15	120.9
71	〃	7号墳第1主体部	12.5	4.2		15.2		33.60	1.41	1.34	105.2
72	〃	〃	12.8	4.1		15.7		32.03	1.01	1.42	71.1
73	〃	〃	12.7	4.4		15.6		34.65	1.68	1.40	120
74	〃	〃	12.1	4.5		14.6		37.19	1.01	1.22	82.8
75	甕	7号墳周溝	12.6	18.2							
76	〃	〃	12.45	13.55							
77	提瓶	7号墳墳頂	7.4	22.9		21.0					
78	甕	7号墳表土	24.0	不明		22.2					
79	提瓶	7号墳第1主体部	7.9	25.6							
80	壺	7号墳周溝	24.85	20.0							

番号(S)	器種	出土地点	法量(cm) 口径	器高	底径	受部径	杯壺高	器高指数	a (cm)	b (cm)	立ち上り指数
81	横瓶	7号墳墳頂	11.35	31.0		34.7					
82	杯蓋	8号墳主体部	13.3	3.8				28.57			
83	杯身	8号墳周溝埋土	13.2	4.0		15.6		30.30	0.68	1.1	61.8
84	提瓶	9号墳墳頂	7.0	23.2		20.1					
85	壺	9号墳表土	13.6	不明							
86	杯蓋	9号墳第2主体部	14.4	4.6				31.94			
87	〃	9号墳第1主体部	14.7	4.2				28.57			
88	杯身	9号墳第2主体部	11.9	4.9		14.8		41.18	1.8	1.39	129.5
89	〃	〃	13.0	4.1		15.4		31.54	1.83	1.18	155.1
90	〃	9号墳第1主体部	12.9	4.8		15.4		37.21	1.32	1.30	101.5
91	〃	9号墳表土	12.8	4.6		15.0		35.94	1.18	1.15	102.6
92	〃	〃	12.5	不明		14.6		—	1.18	1.06	111.3
93	高杯	9号墳墳頂	10.3	15.2	9.6		3.6	34.95			
94	提瓶	9号墳土壙9-2	8.4	21.25		18.6					
95	〃	9号墳表土	7.0	17.4		15.0					
96	壺	11号墳	7.7	9.0							
97	〃	11号墳第1主体部	8.5	12.2							
98	高杯	11号墳	12.4	9.9	10.9	15.4	4.9	39.52	1.15	1.26	91.3
99	甕	11号墳第2主体部	14.4	15.9							
100	杯蓋	11号墳	15.5	4.2				29.81			
101	〃	〃	13.4	5.0				37.31			
102	〃	〃	14.3	5.6			4.8	33.57			
103	〃	11号墳第2主体部	14.2	4.6				32.39			
104	〃	〃	14.4	5.4				37.50			
105	〃	〃	14.1	5.4				38.30			
106	蓋	11号墳	15.0	5.25			4.2	28.00			
107	杯蓋	11号墳第1主体部	14.4	5.2				36.11			
108	〃	〃	14.5	5.6				38.62			
109	〃	〃	14.9	5.2				34.90			
110	〃	〃	14.6	5.3				36.30			
111	〃	〃	15.3	5.1				33.33			
112	杯身	11号墳第2主体部	12.6	5.4		14.9		42.86	1.50	1.08	138.9
113	〃	〃	12.6	4.6		15.4		36.51	1.68	1.35	124.4
114	〃	〃	12.5	5.2		14.9		41.60	1.50	1.10	136.4
115	〃	〃	12.3	4.7		14.9		38.21	1.11	1.34	82.8
116	〃	11号墳第1主体部	12.8	4.9		15.2		38.28	1.36	1.12	121.4
117	〃	〃	13.2	5.25		15.7		39.77	1.60	1.16	137.9
118	〃	〃	13.2	5.3		15.6		40.15	1.50	1.12	133.9
119	〃	〃	13.2	5.3		15.4		40.15	1.60	1.13	141.6
120	〃	〃	13.0	5.5		15.4		42.31	1.40	1.30	107.7

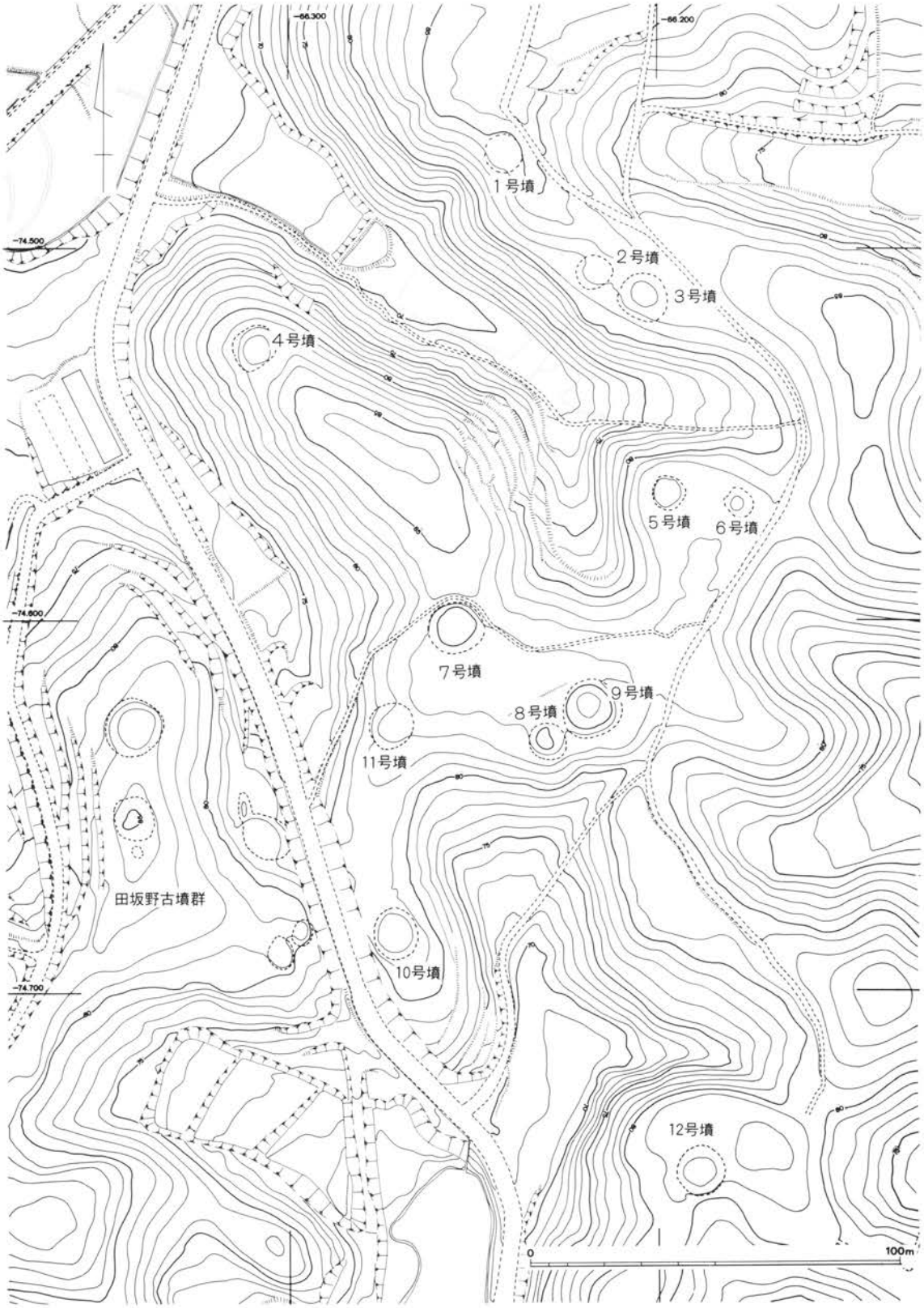
番号(S)	器種	出土地点	法量(cm) 口径	器高	底径	受部胴径	杯壺高	器高指数	a (cm)	b (cm)	立ち上り指数
121	杯身	11号墳第1主体部	12.9	5.4		15.3		41.86	1.44	1.17	123.1
122	高杯	11号墳	10.7	不明	不明		3.7	34.58			
123	〃	11号墳第2主体部	10.0	16.4	8.2		4.0	40.00			
124	提瓶	〃	7.2	21.0		18.0					
125	杯蓋	12号墳主体部	14.1	4.5				31.91			
126	杯身	12号墳表土	11.7	3.6		13.9		30.77	0.93	1.02	91.2
127	〃	12号墳周溝	11.65	5.2		14.4		44.64	1.56	1.12	139.3
128	〃	12号墳主体部	11.6	5.0		14.0		43.10	1.58	1.12	141.1
129	蓋	〃	13.9	不明		不明		—			
130	高杯	〃	8.8	15.8	7.4		4.0	45.45			
131	瓿	〃	12.1	15.0							
132	甕	〃	29.4	不明							
133	杯蓋	1号横穴玄室	12.9	3.7				28.68			
134	杯身	〃	12.3	3.9		15.85		31.71	1.15	1.45	79.3
135	〃	〃	12.1	4.0		14.55		33.06	0.55	1.10	50.0
136	〃	〃	11.4	3.6		13.6		31.58	0.95	1.05	90.5
137	壺	〃	12.6	17.2							
138	杯蓋	2号横穴玄室	13.35	4.3				32.21			
139	〃	〃	14.0	4.0				28.57			
140	〃	〃	14.0	3.55				25.36			
141	杯身	〃	12.6	4.2		15.4		33.33	1.10	1.29	85.3
142	〃	〃	12.1	4.4		14.4		36.36	1.20	1.20	100.0
143	〃	〃	12.6	4.0		15.2		31.75	0.85	1.25	68.0
144	台付壺	〃	9.4	27.7	14.5		20.5				
145	提瓶	〃	8.8	24.7		20.3					
146	杯蓋	3号横穴玄室	13.5	4.35				32.22			
147	〃	〃	13.2	4.1				31.06			
148	〃	3号横穴埋土	12.5	不明				—			
149	杯身	3号横穴玄室	12.1	4.2		14.3		34.71	0.93	1.06	87.7
150	〃	〃	12.0	4.1		14.2		34.17	0.93	1.15	80.9
151	〃	3号横穴埋土	12.4	不明		14.7		—	0.66	1.05	62.9
152	台付壺	3号横穴前庭部	8.4	21.0	9.8		15.7				
153	提瓶	3号横穴玄室	不明	不明		22.15					
154	横瓶	3号横穴羨道	11.8	24.5		32.3					
155	提瓶	土壙墓1	不明	不明		14.35					
156	〃	〃	〃	〃		19.9					
157	平瓶	土壙墓1埋土	5.8	15.8		18.1					
158	杯蓋	土壙墓1	13.5	4.0				29.63			
159	〃	〃	14.3	3.9				27.27			
160	杯身	〃	12.7	3.8		14.2		29.92	1.02	1.03	99.0

番号(S)	器種	出土地点	法量(cm) 口径	器高	底径	受部径	杯壺高	器高指数	a (cm)	b (cm)	立ち上り指数
161	杯身	土壙墓1	11.9	3.6		14.0		30.25	0.61	1.01	60.4
162	高杯	〃	10.2	13.65	10.6		4.2	41.18			
163	〃	〃	10.6	14.6	10.6		5.05	47.64			
164	〃	〃	不明	不明	11.65		不明	—			
165	甕	〃	13.4	14.6							
166	横瓶	〃	11.7	26.8		33.9					
167	蓋	〃	14.3	4.8			3.95	27.62			
168	高杯	〃	12.6	18.7	13.6	15.15	4.5	35.71	1.00	1.16	86.2
169	台付壺	〃	8.1	19.0	11.0		15.9				
170	杯蓋	土壙墓2	13.5	4.0				29.63			
171	杯身	〃	12.4	4.1		14.4		33.06	0.80	1.07	74.8
172	杯蓋	土壙墓3埋土	14.4	4.5				31.25			
173	杯身	〃	10.4	3.9		13.9		37.50	0.50	1.50	33.3
174	杯蓋	土壙墓4	14.4	3.6				25.00			
175	〃	〃	14.1	4.2				29.79			
176	杯身	〃	12.45	4.3		14.3		34.54	1.22	1.29	94.6
177	〃	〃	12.4	4.0		14.35		32.26	1.25	1.30	96.2
178	蓋	〃	5.4	3.6							
179	台付壺	〃	8.1	22.8	10.7		7.25				
180	提瓶	土壙墓5	8.0	18.4		16.4					
181	壺	土壙墓6	7.6	11.85							
182	高杯	土壙墓7	12.5	7.4	9.6		4.15	33.20			
183	〃	〃	12.1	7.1	9.2		3.5	28.93			
184	〃	〃	12.9	6.8	9.15		4.0	31.01			
185	〃	〃	12.1	7.3	9.2		3.9	32.23			
186	〃	〃	12.45	6.2	9.4		3.6	28.92			
187	〃	〃	13.5	7.0	8.5		4.0	29.63			
188	〃	〃	12.3	14.4	11.0		4.25	34.55			
189	提瓶	〃	6.1	19.2		14.3					

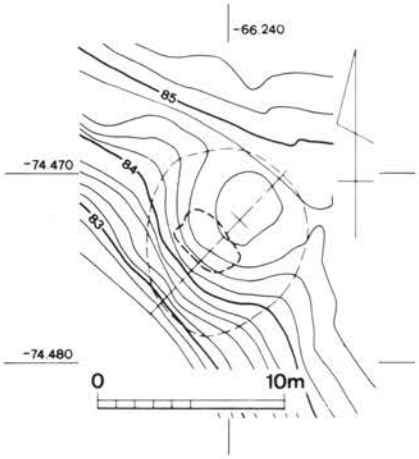
第3表　土師器法量表

番号(H)	器種	出土地点	法量(cm) 口径	器高	底径	杯壺高	器高指数
1	杯	1号墳主体部	12.3	4.8			39.02
2	壺	2号墳第2主体部	9.0	14.6			
3	杯	4号墳周溝	14.0	5.5			39.29
4	〃	4号墳	14.0	5.5			39.29
5	甕	4号墳周溝	23.7	不明			
6	杯	7号墳第1主体部	12.3	4.9			39.84
7	〃	〃	14.6	5.9			40.41
8	高杯	〃	14.4	9.65	9.0	4.1	28.47
9	壺	〃	10.2	14.95			
10	〃	7号墳周溝埋土	9.0	12.8			
11	甕	8号墳主体部	15.0	不明			
12	杯	9号墳周溝	12.6	4.6			36.51
13	甕	9号墳墳頂	13.6	不明			
14	壺	11号墳	10.7	19.45			
15	甕	11号墳第2主体部	13.8	15.0			
16	杯	11号墳第1主体部	12.8	6.0			46.88
17	〃	〃	13.6	5.8			42.65
18	〃	11号墳	13.0	6.1			46.92
19	〃	〃	13.0	4.2			32.31
20	〃	1号横穴玄室	12.8	4.7			36.72
21	高杯	〃	13.6	8.2	9.8	3.2	23.53
22	〃	〃	13.2	8.5	9.4	3.3	25.00
23	〃	〃	13.3	9.0	9.6	3.5	26.34
24	〃	〃	12.2	9.1	9.5	3.2	26.23
25	甕	2号横穴玄室	17.0	22.9			
26	高杯	土壙墓1	13.3	10.5	9.35	4.5	33.83
27	〃	〃	12.6	10.8	10.3	4.1	32.54
28	〃	〃	12.65	11.3	10.1	4.0	31.62
29	〃	〃	13.4	11.3	9.8	4.1	30.60
30	〃	〃	12.0	9.75	8.8	3.8	31.67
31	〃	〃	13.15	10.5	9.5	4.5	34.22
32	甕	〃	18.0	26.7			
33	〃	〃	18.5	不明			
34	高杯	土壙墓3	12.2	9.5	10.1	3.4	27.87
35	〃	〃	11.15	8.3	10.0	2.6	23.32
36	〃	〃	13.4	8.15	10.6	3.6	26.87
37	〃	〃	12.6	8.95	10.2	3.45	27.38
38	台付壺	土壙墓6	8.7	20.55	10.3	14.5	
39	甕	土壙墓7	15.6	20.8			

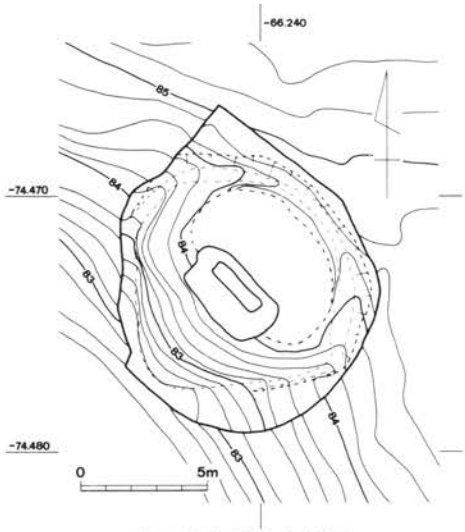
図　　版


-66.300
-66.200
-74.500
-74.600
-74.700
1号墳
2号墳
3号墳
4号墳
5号墳
6号墳
7号墳
8号墳
9号墳
10号墳
11号墳
12号墳
田坂野古墳群
0
100m

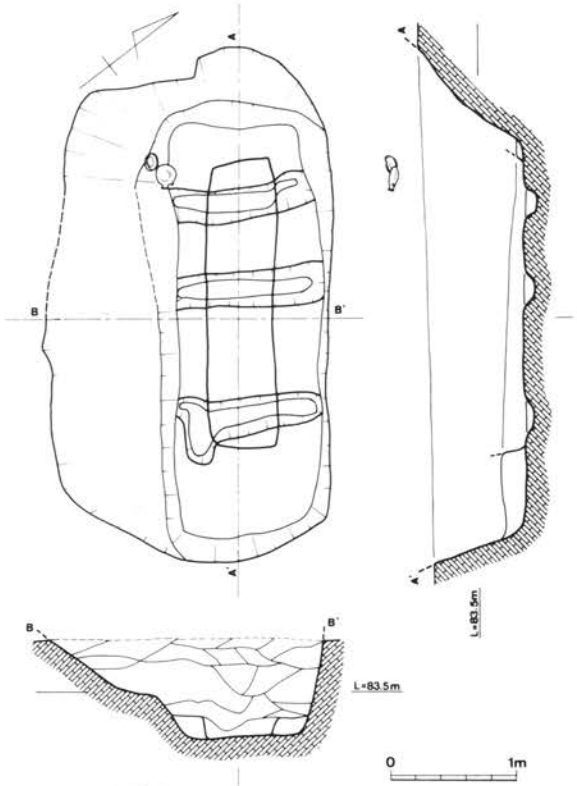
古墳群分布図



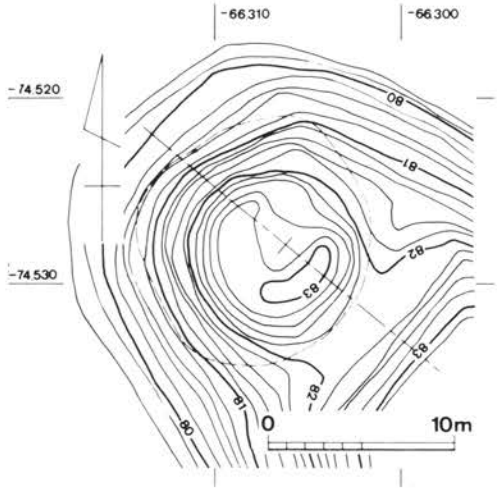
(1)　1号墳墳丘実測図



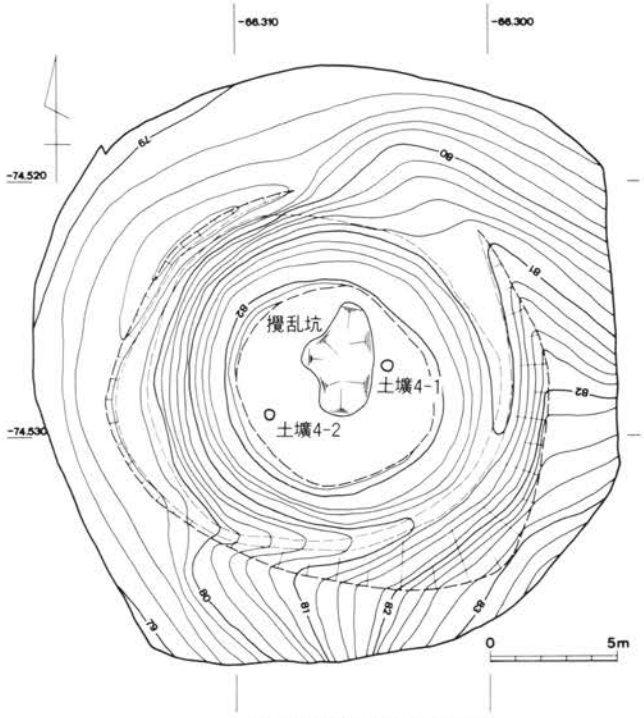
(2)　1号墳掘削後墳丘実測図



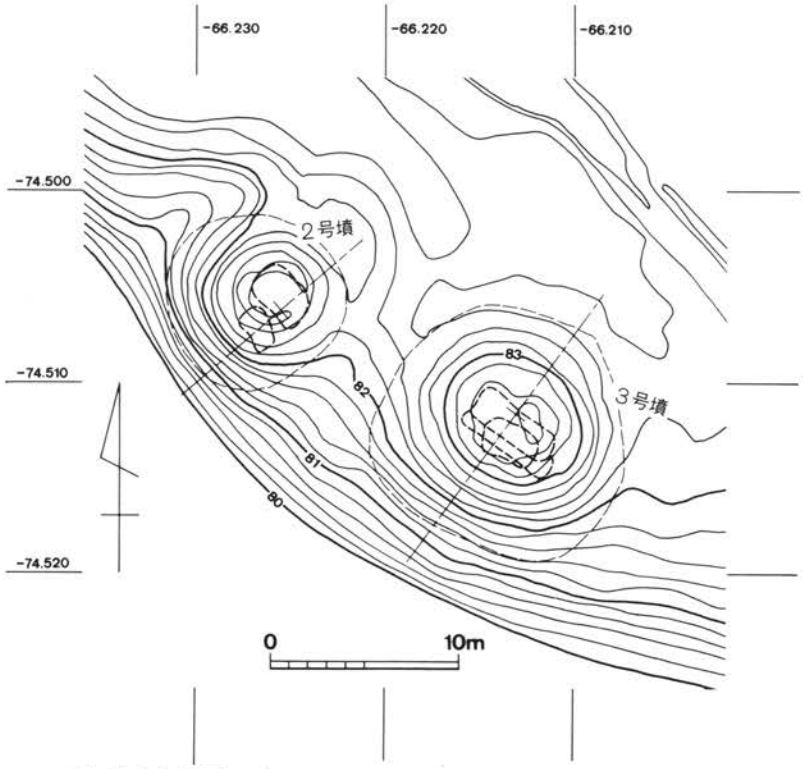
(3)　1号墳主体部実測図



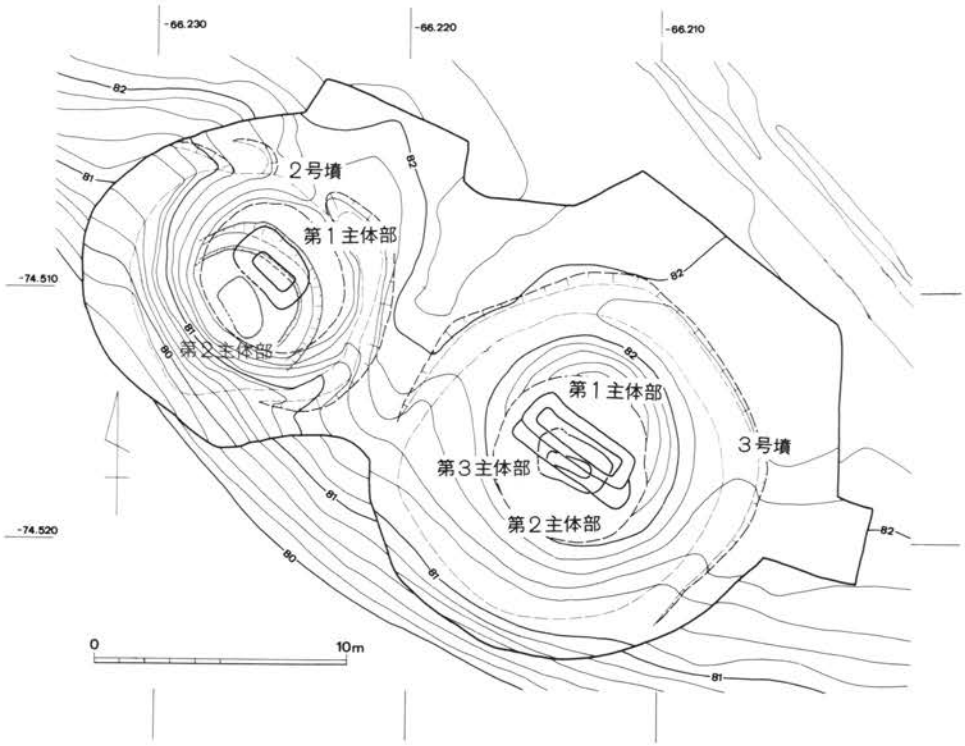
(4)　4号墳墳丘実測図



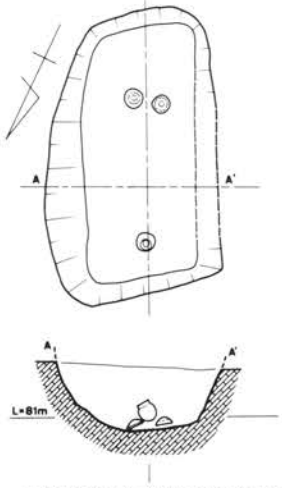
(5)　4号墳掘削後墳丘実測図



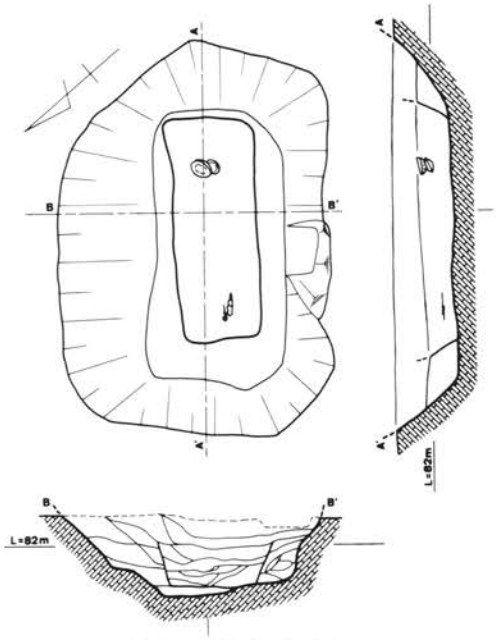
(1)　2・3号墳墳丘実測図



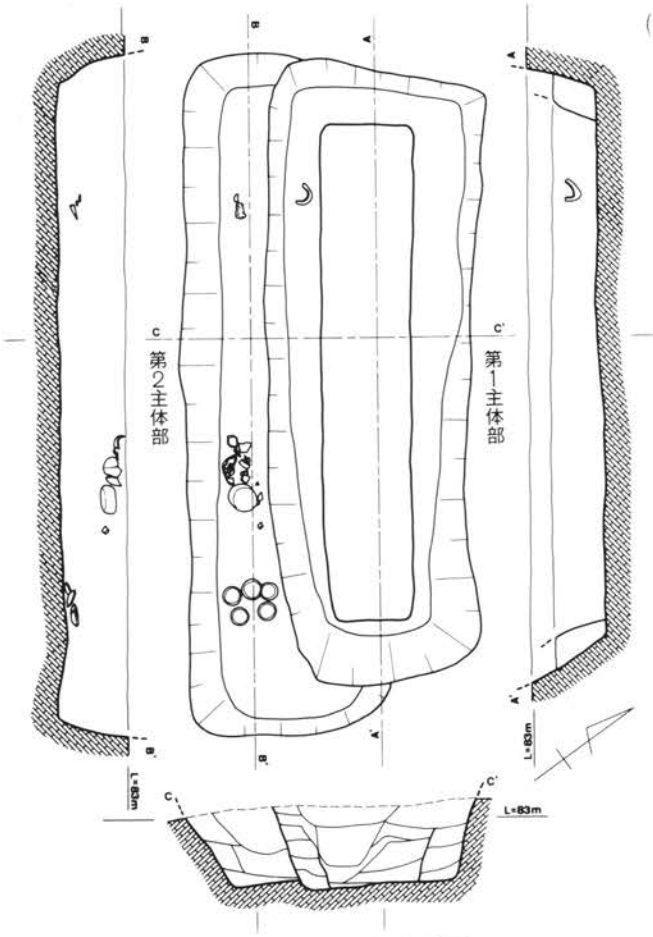
(2)　2・3号墳掘削後墳丘実測図



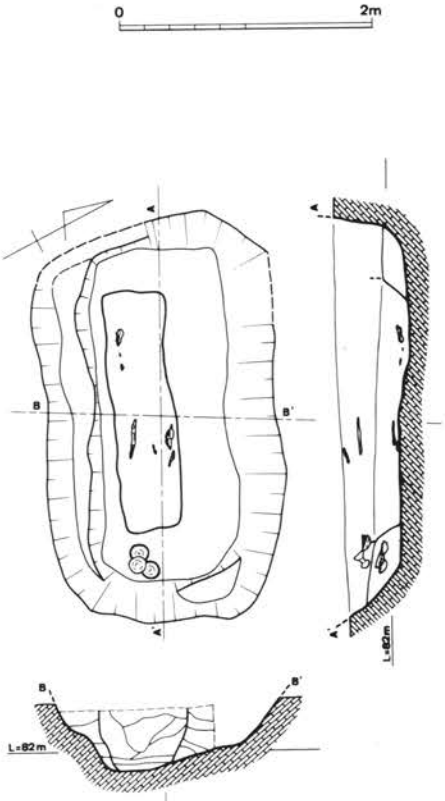
(1)　2号墳第2主体部実測図



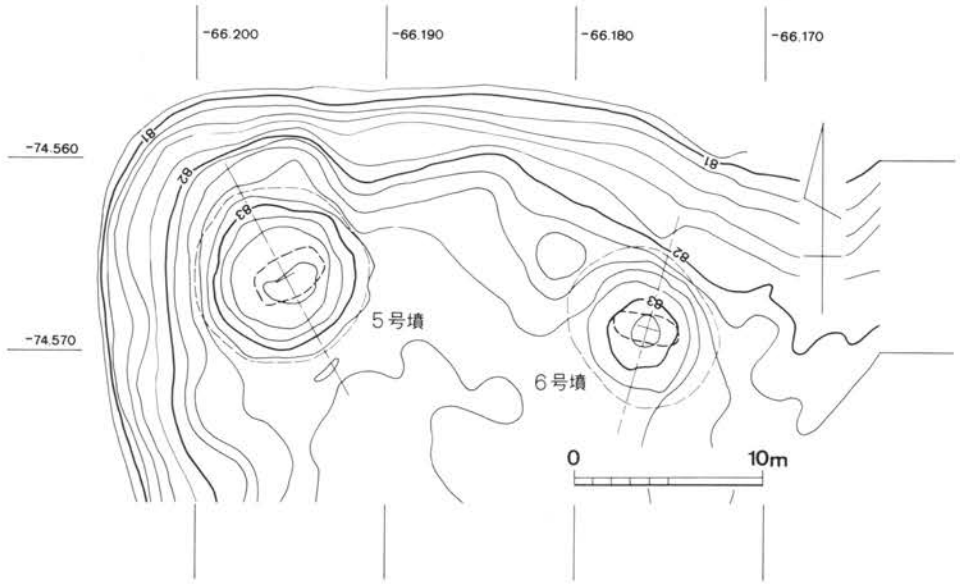
(2)　2号墳第1主体部実測図



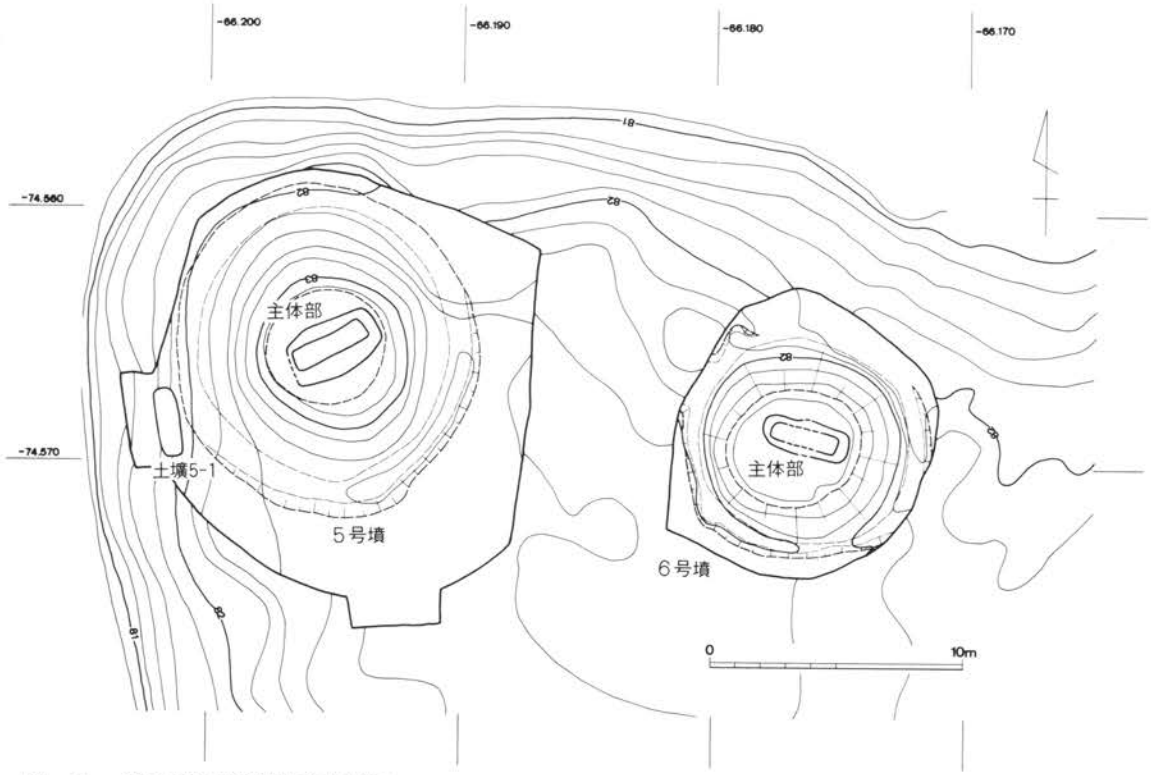
(3)　3号墳第1・第2主体部実測図



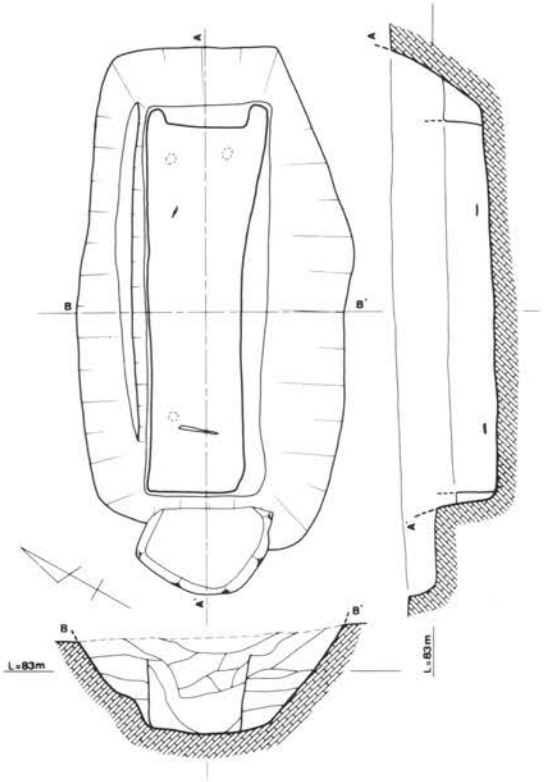
(4)　3号墳第3主体部実測図



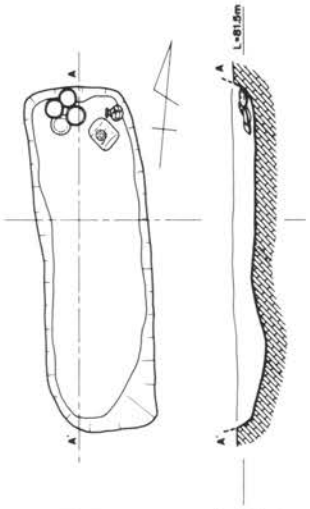
(1)　5・6号墳墳丘実測図



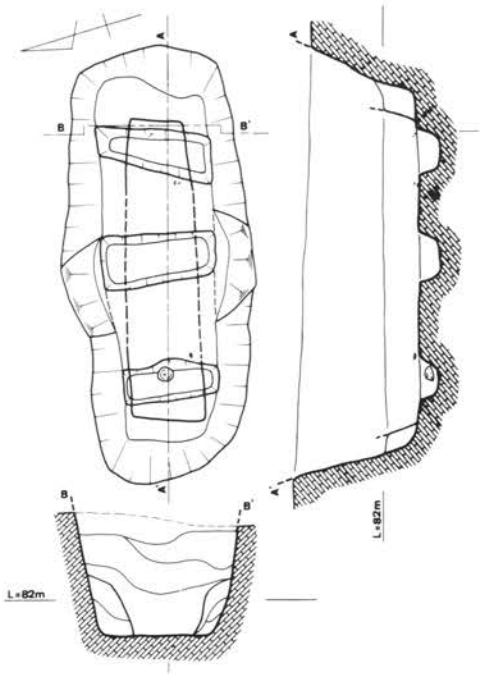
(2)　5・6号墳掘削後墳丘実測図



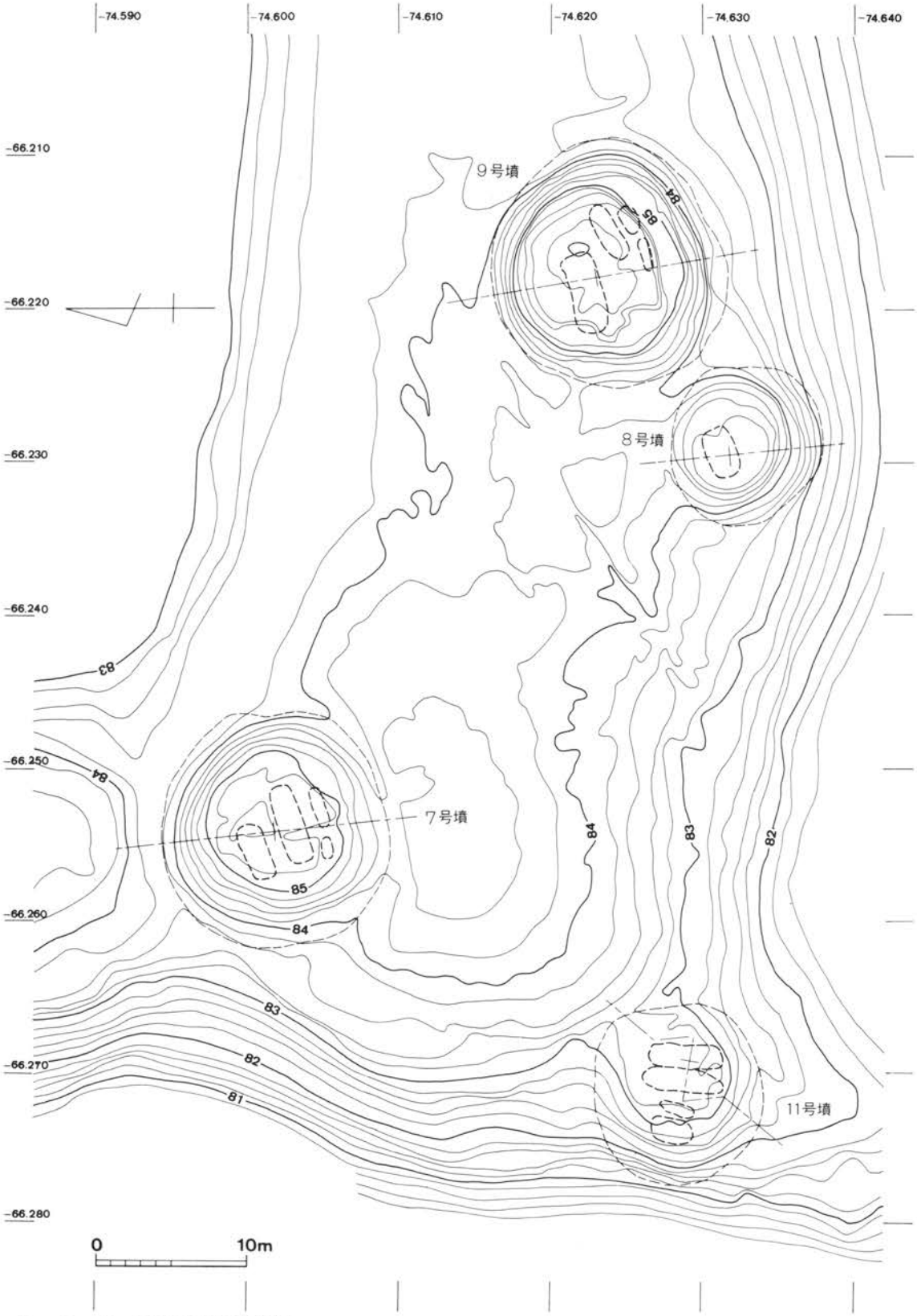
(1)　5号墳主体部実測図



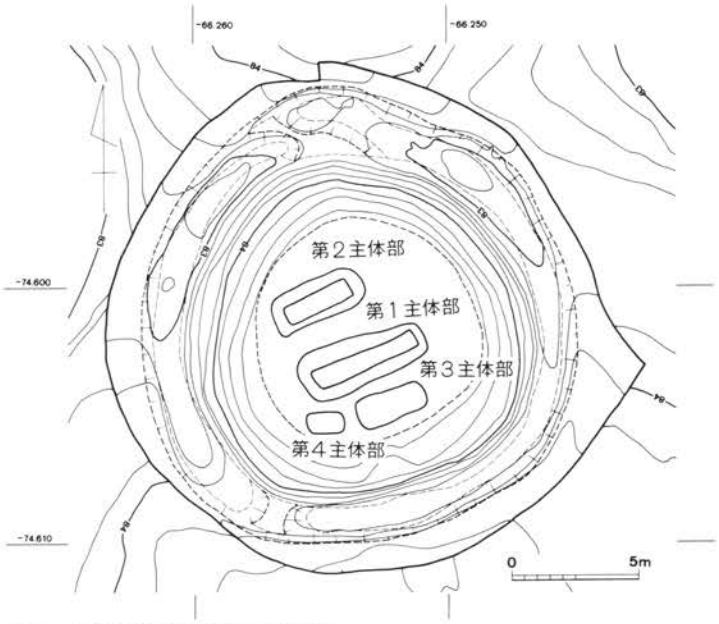
(2)　5号墳土壙5－1実測図



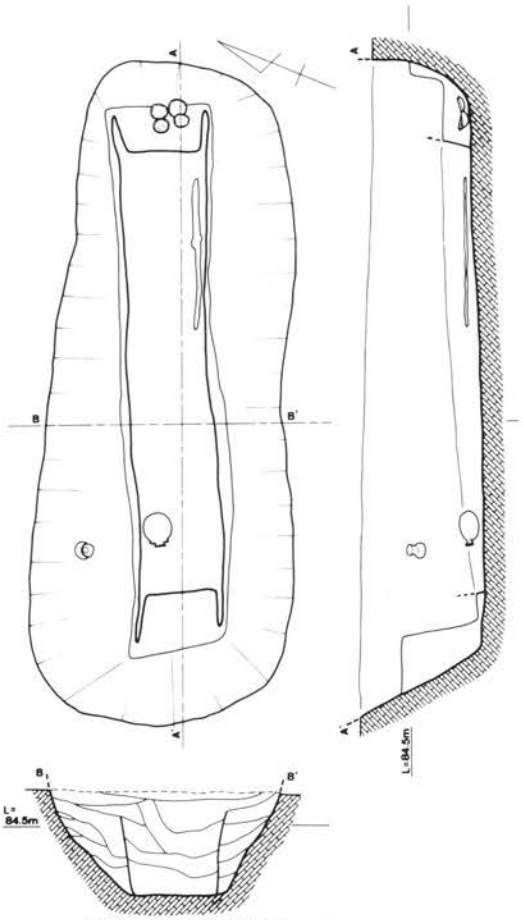
(3)　6号墳主体部実測図



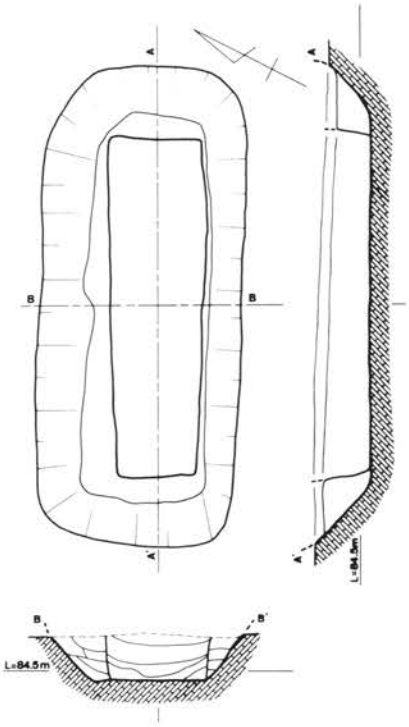
7・8・9・11号墳墳丘実測図



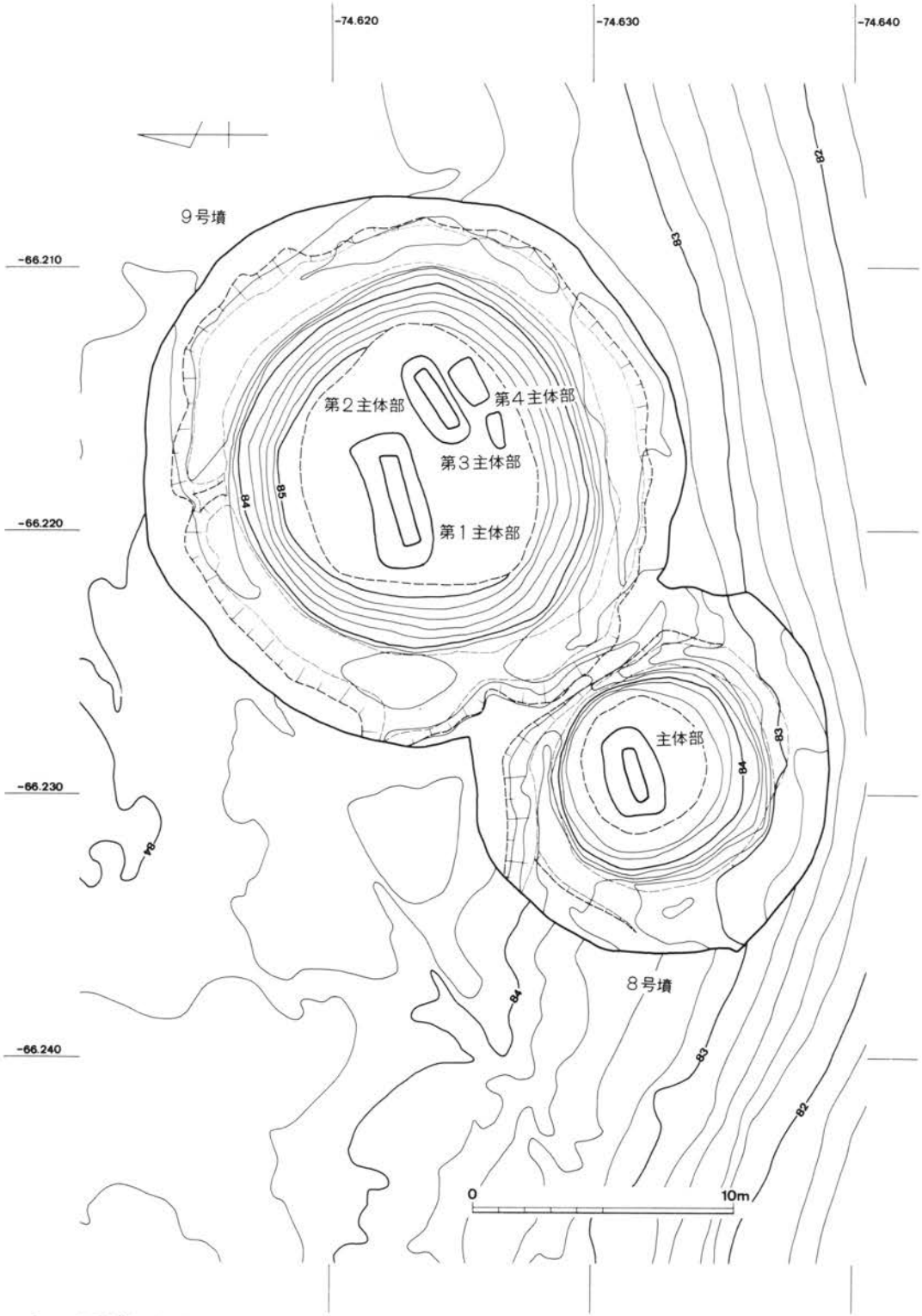
(1)　7号墳掘削後墳丘実測図



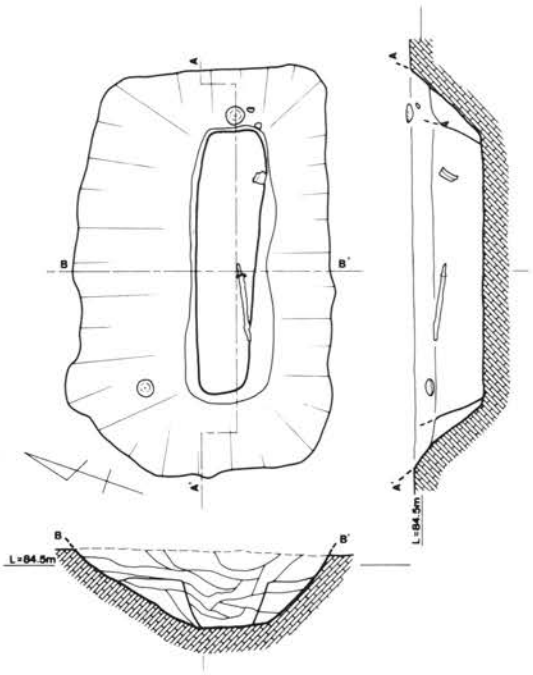
(2)　7号墳第1主体部実測図



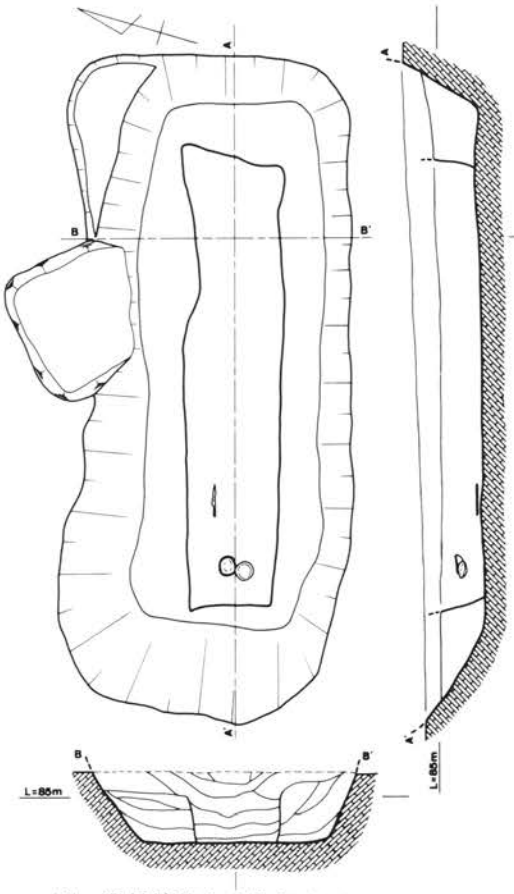
(3)　7号墳第2主体部実測図



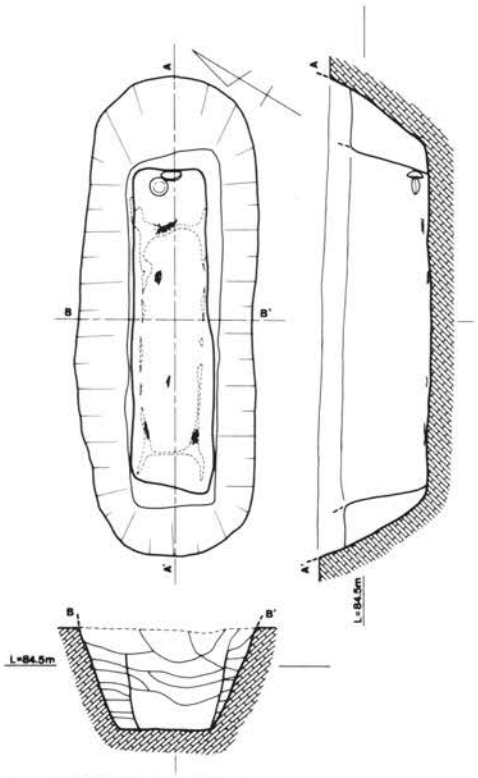
8・9号墳掘削後墳丘実測図



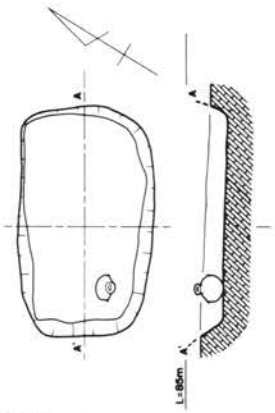
(1)　8号墳主体部実測図



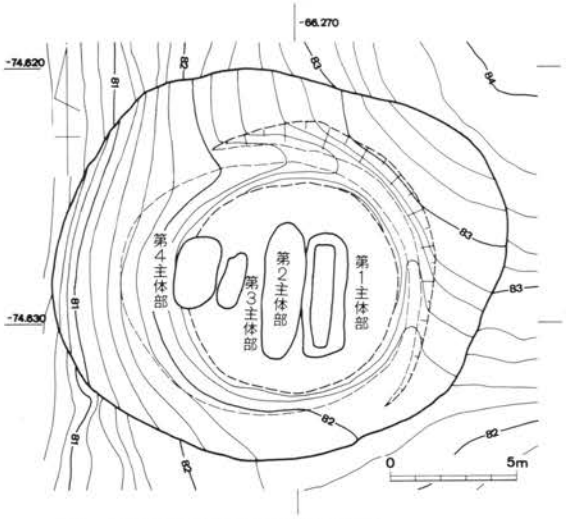
(2)　9号墳第1主体部実測図



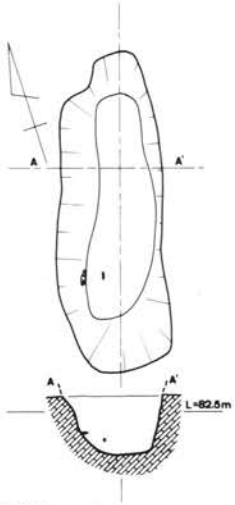
(3)　9号墳第2主体部実測図



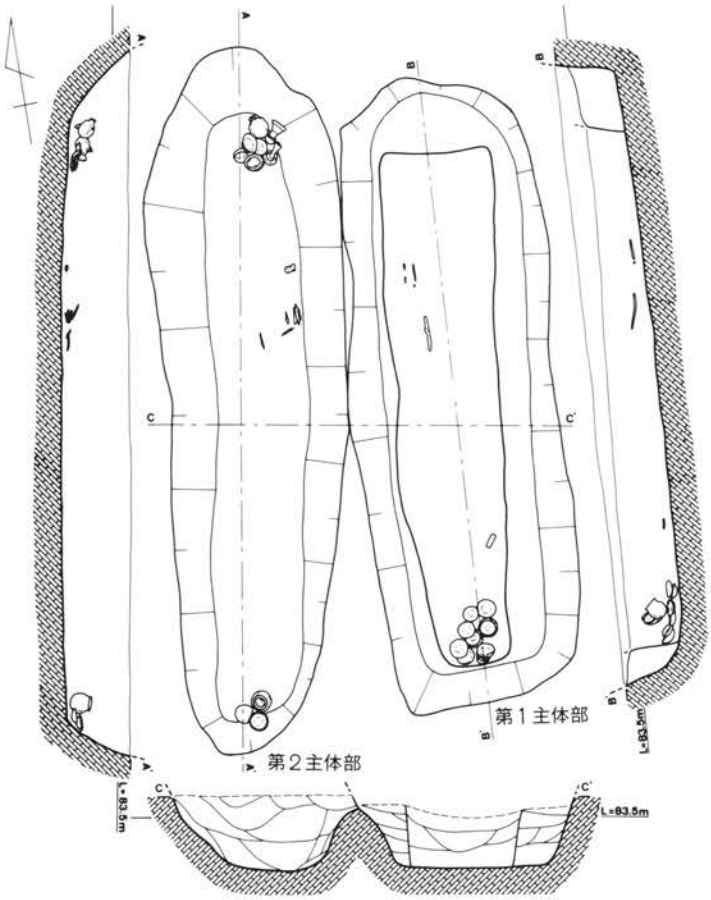
(4)　9号墳第4主体部実測図



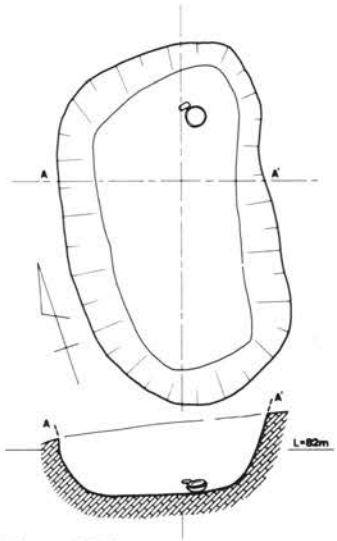
(1)　11号墳掘削後墳丘実測図



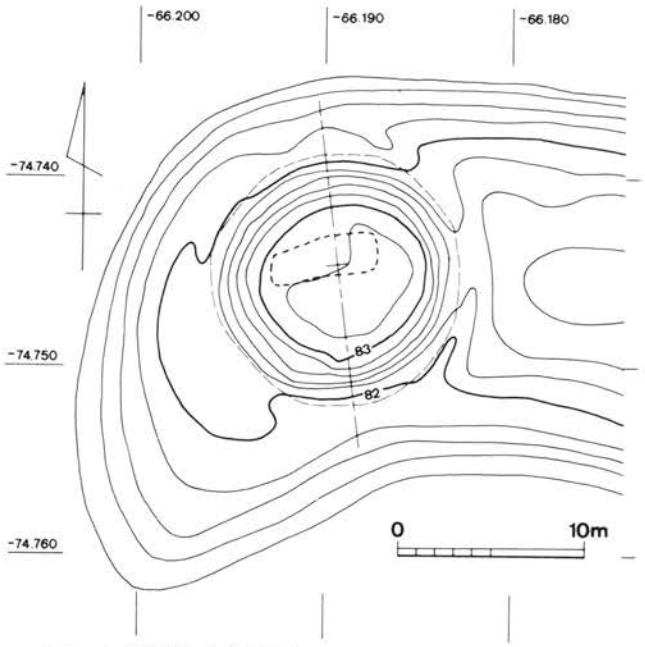
(3)　11号墳第３主体部実測図



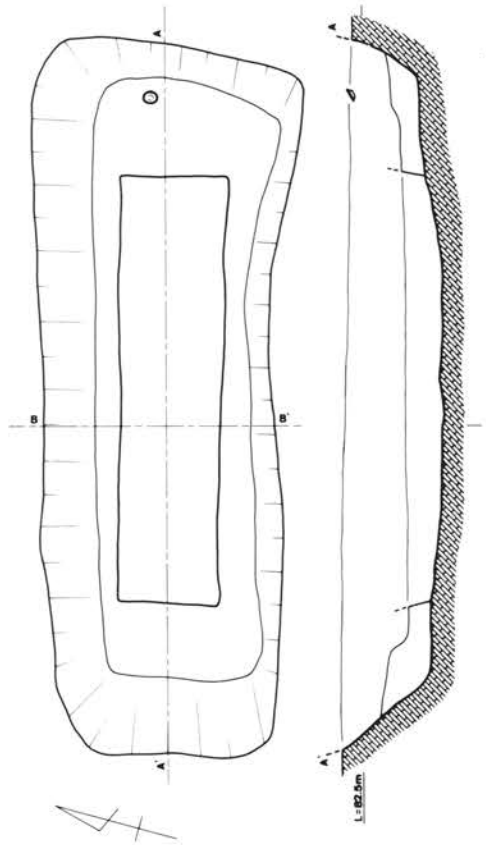
(2)　11号墳第１・第２主体部実測図

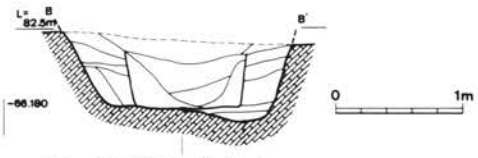


(4)　11号墳第４主体部実測図

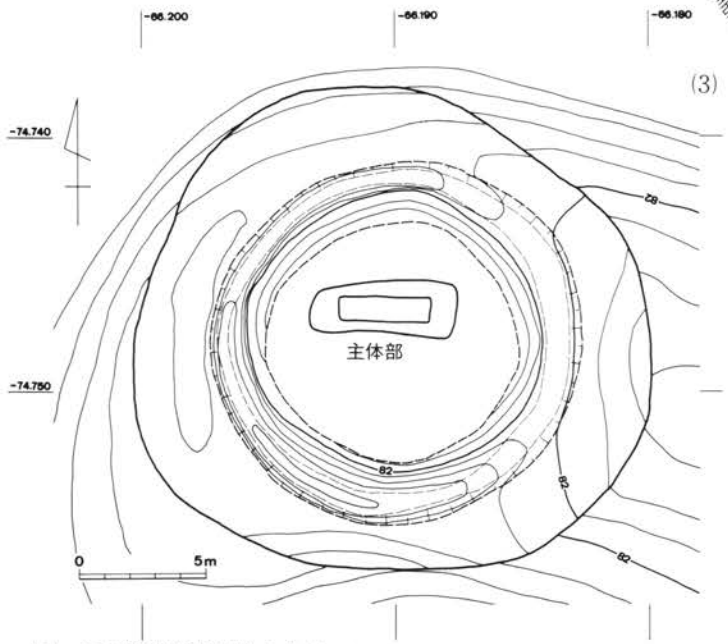


(1)　12号墳墳丘実測図

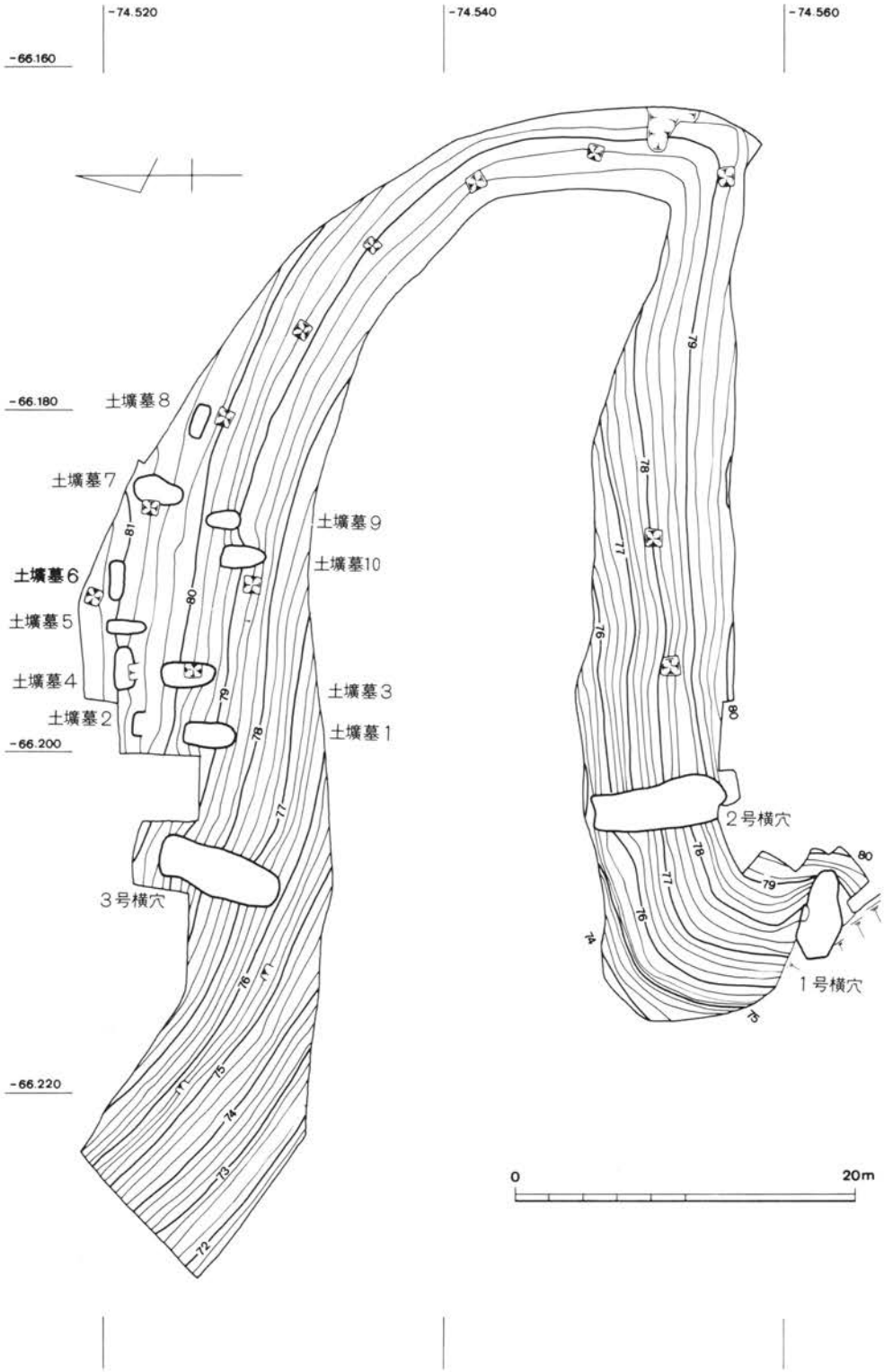




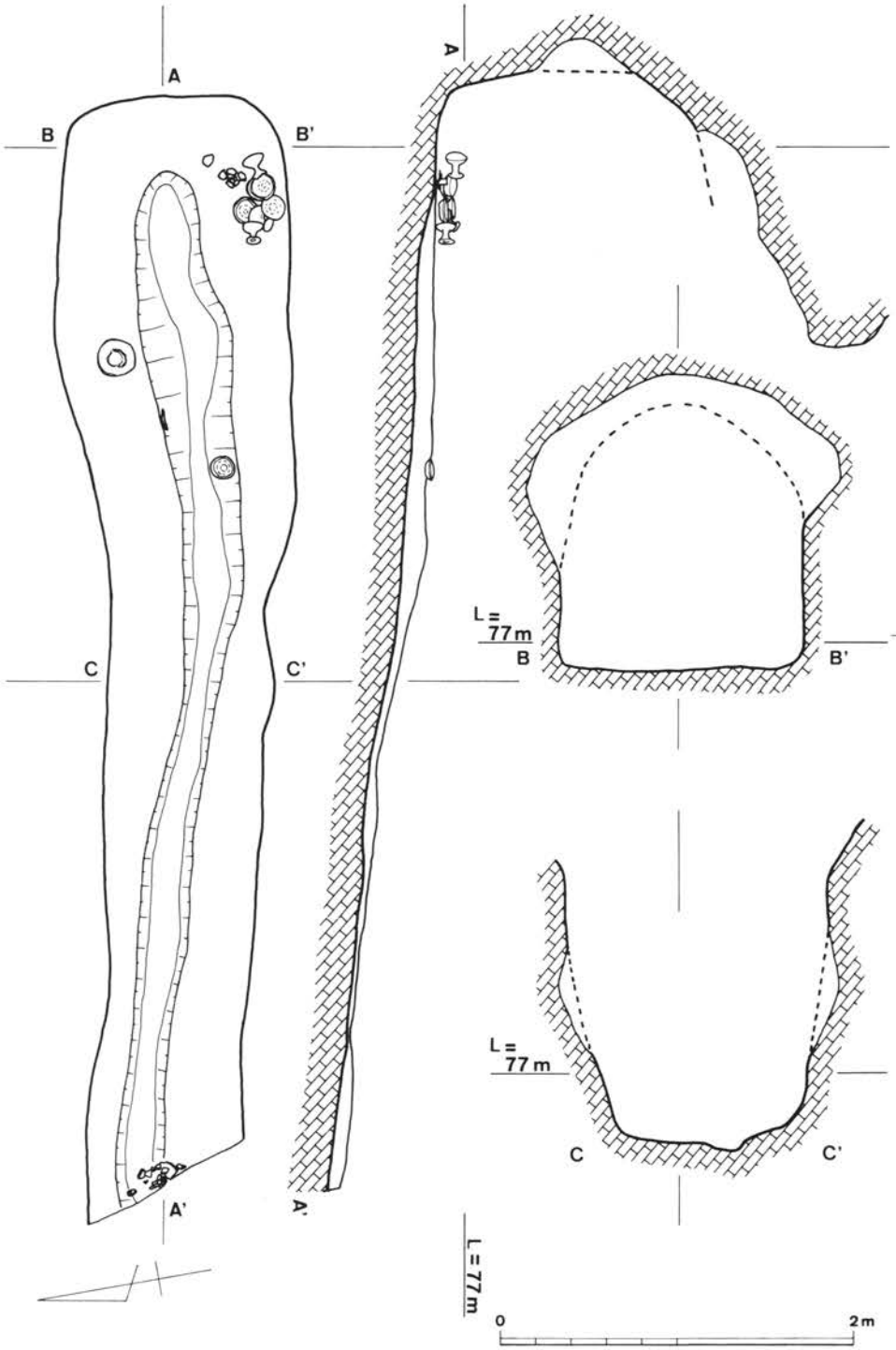
(3)　12号墳主体部実測図



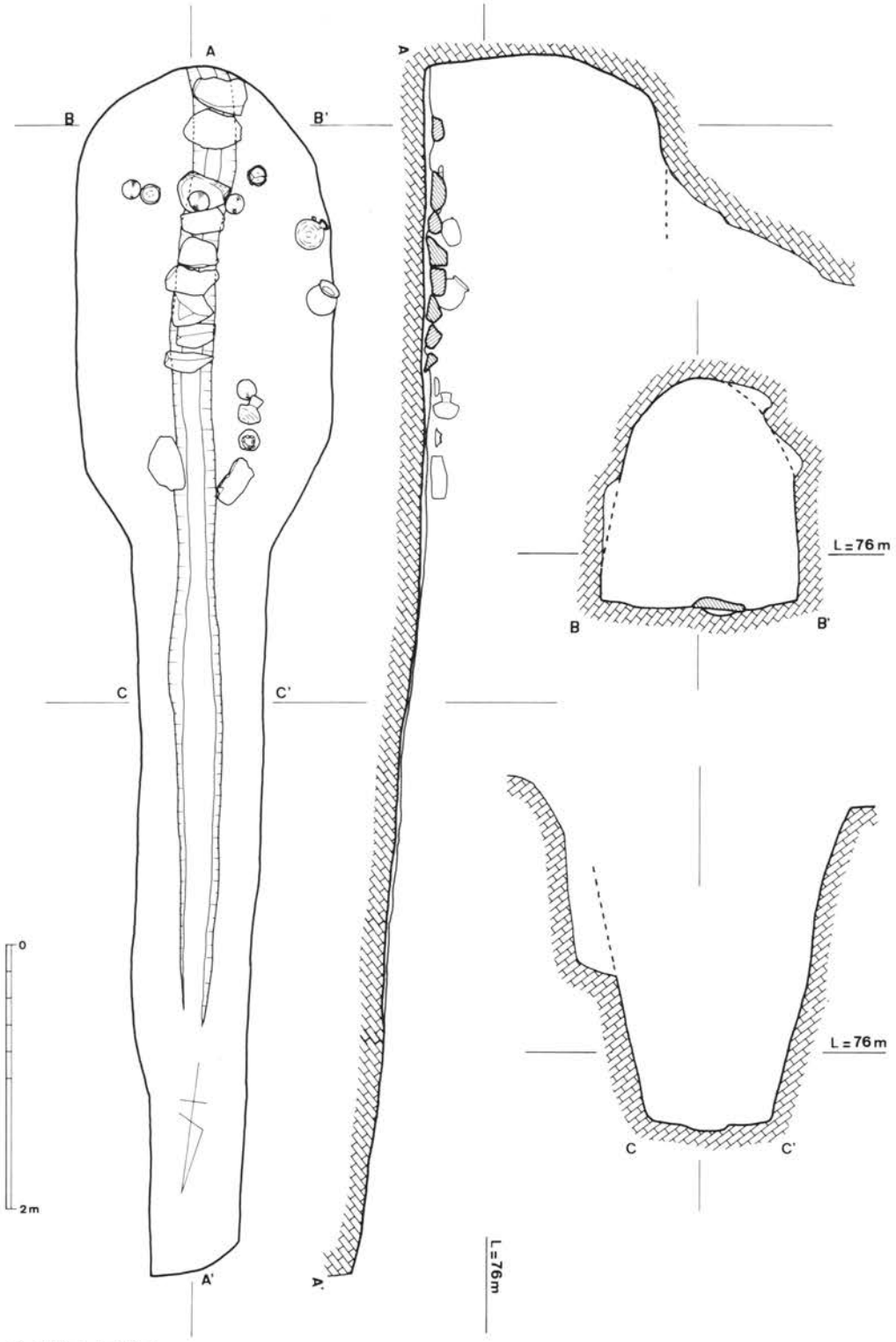
(2)　12号墳掘削後墳丘実測図


-74.520
-74.540
-74.560
-66.160
-66.180
-66.200
-66.220
土壙墓8
土壙墓7
土壙墓6
土壙墓5
土壙墓4
土壙墓2
土壙墓9
土壙墓10
土壙墓3
土壙墓1
3号横穴
2号横穴
1号横穴
0
20m

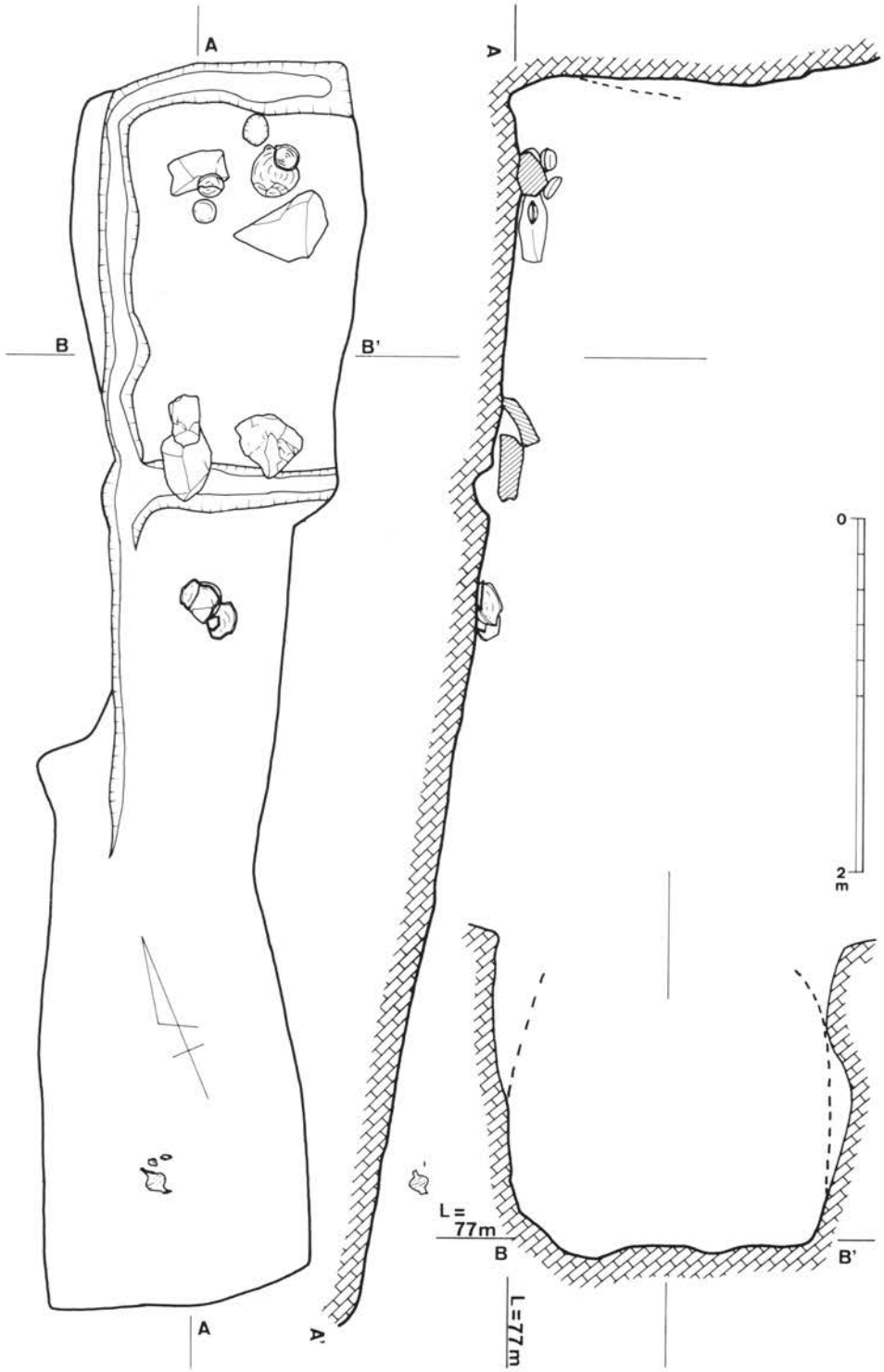
横穴・土壙墓分布図



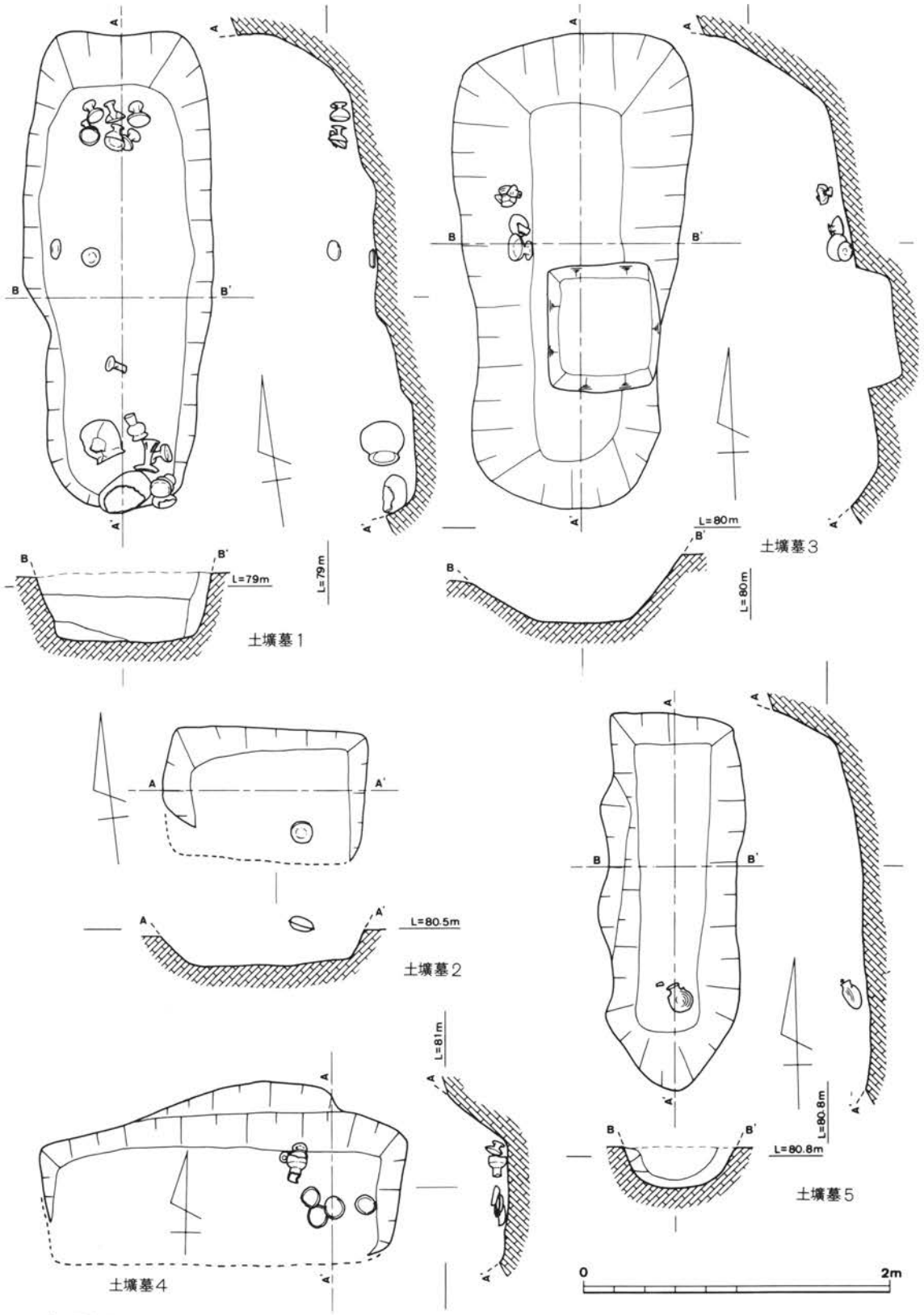
1号横穴実測図



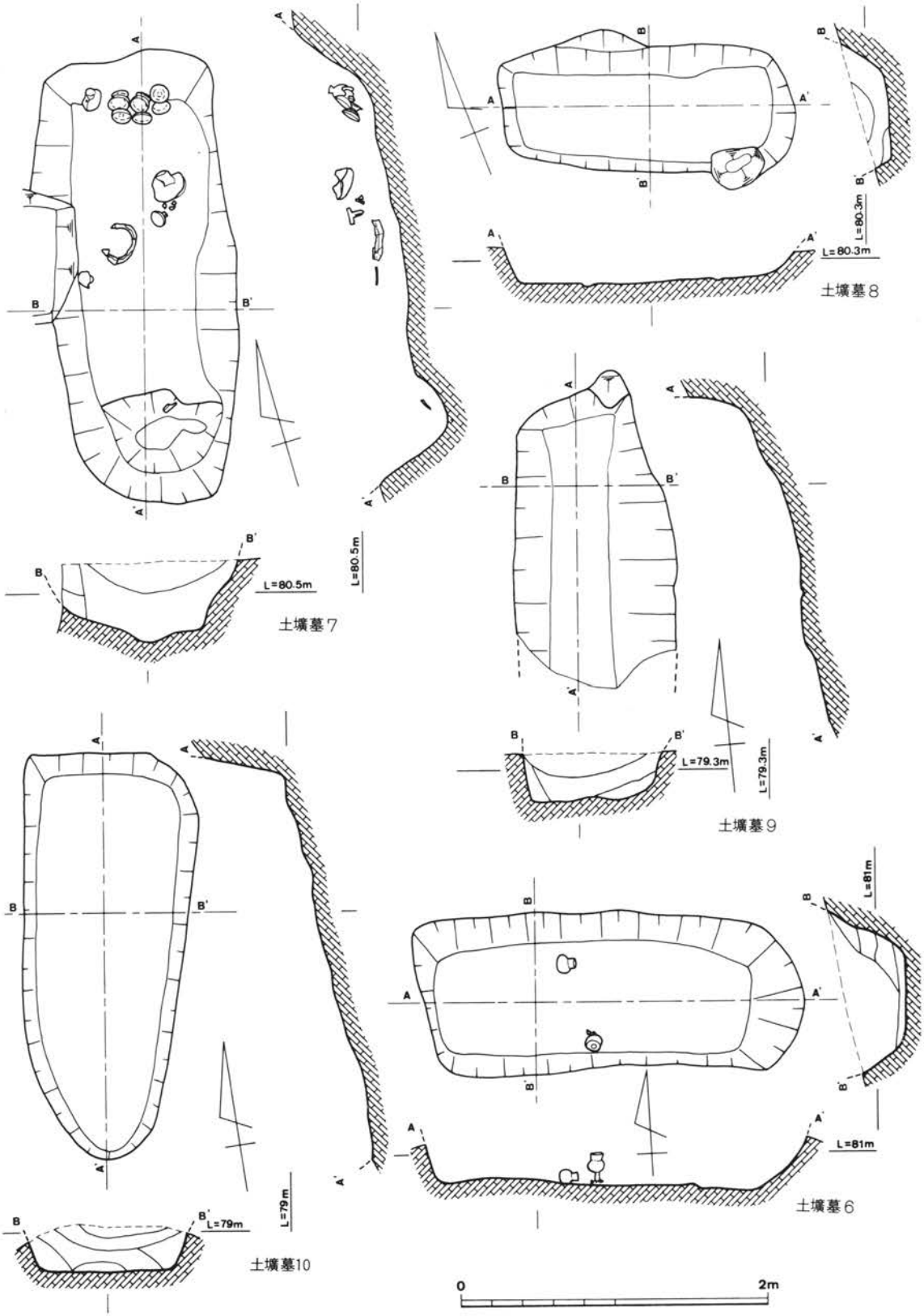
2号横穴実測図



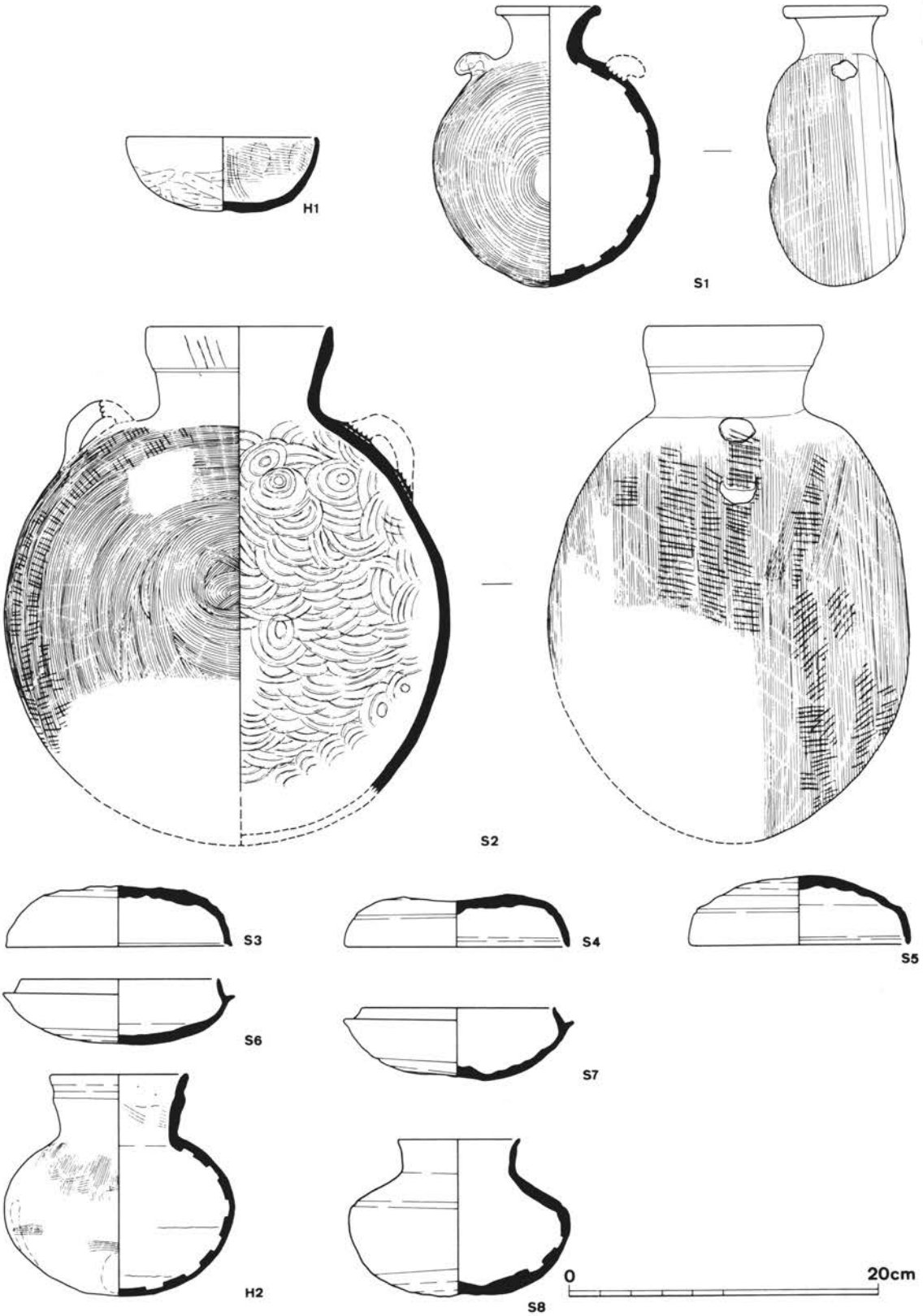
3号横穴実測図



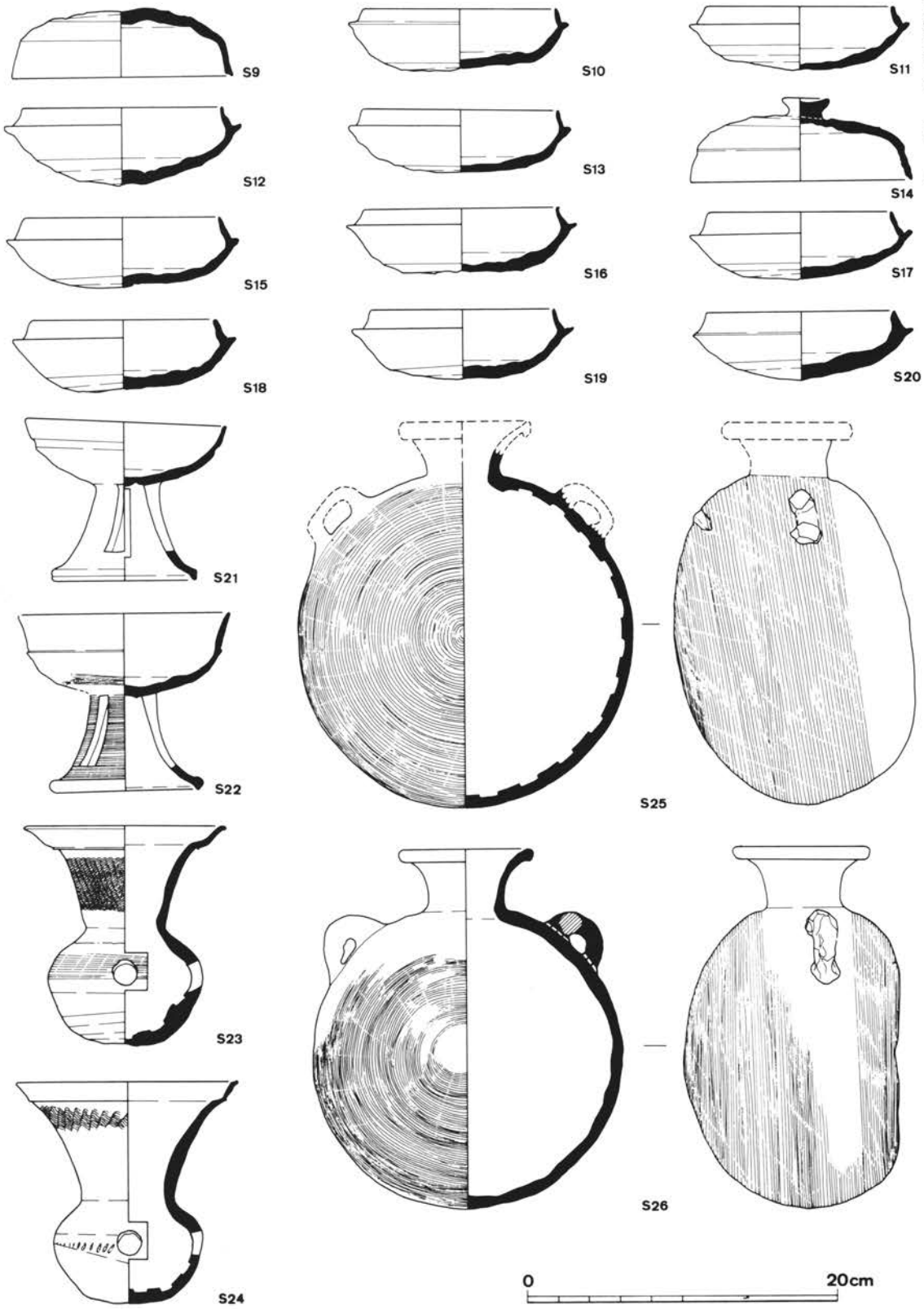
土壙墓実測図(1)



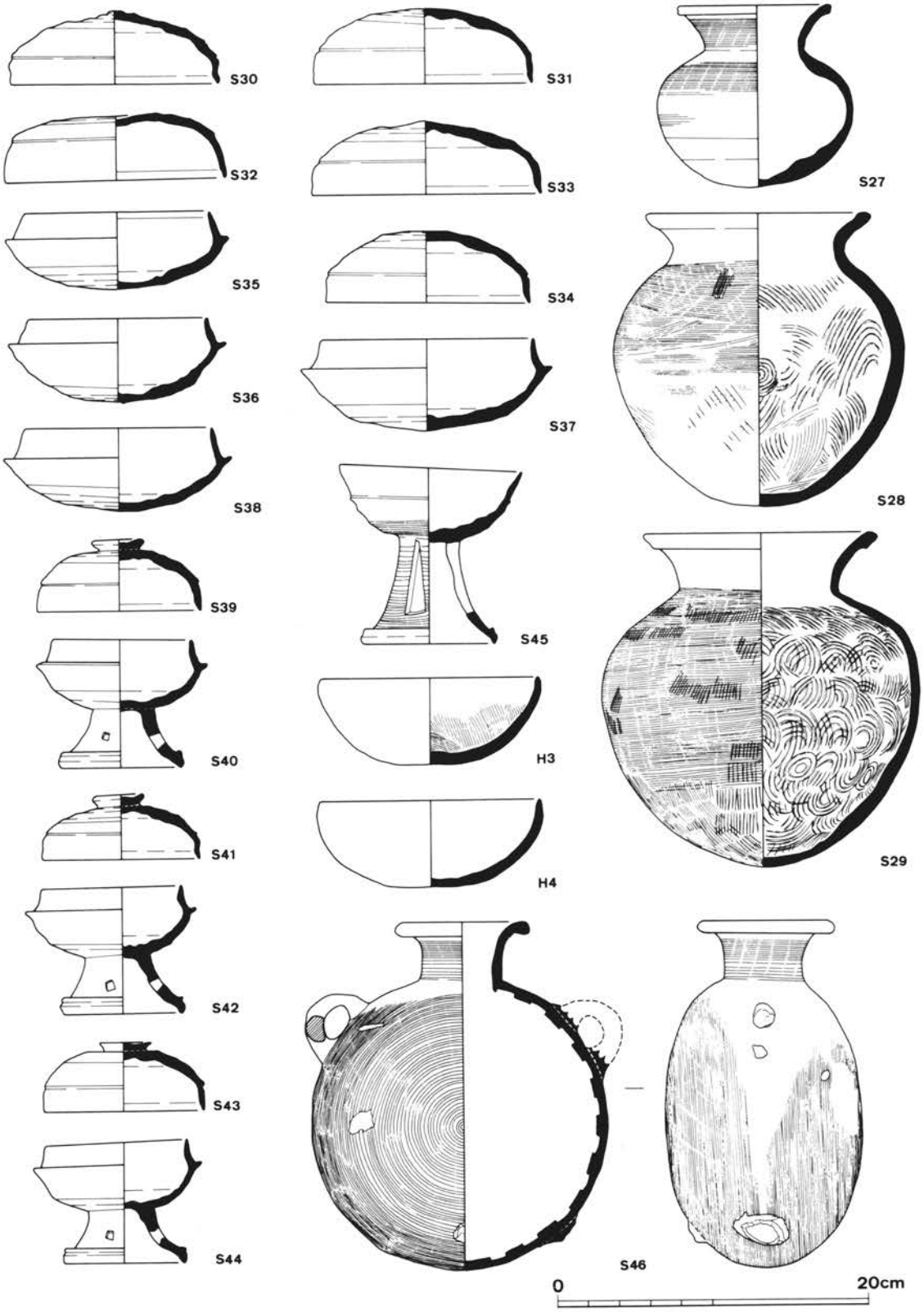
土壙墓実測図(2)



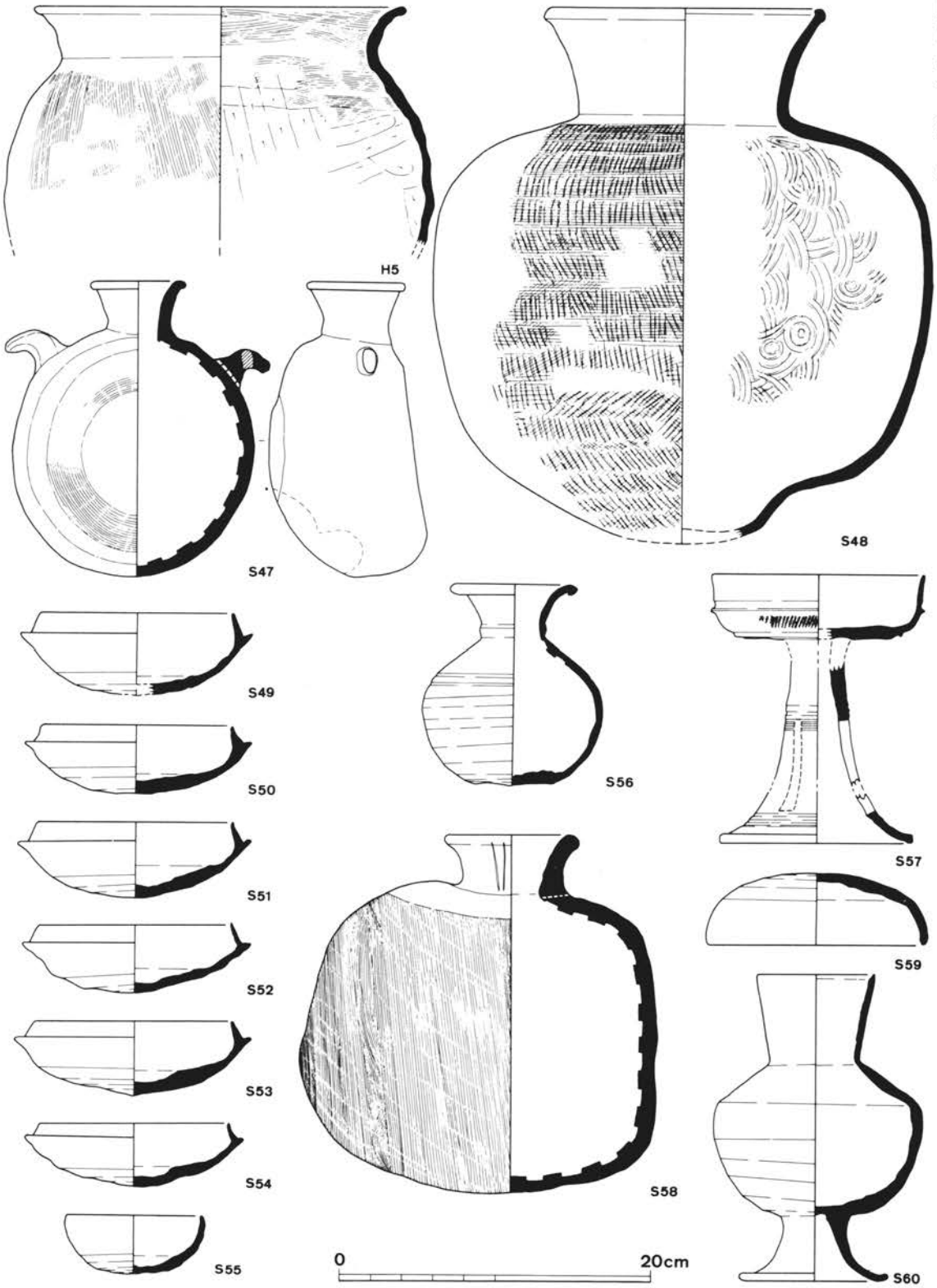
1・2号墳出土土器実測図（S1・H1－1号墳、S2～8・H2－2号墳）


S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
S23
S24
S25
S26
0
20cm

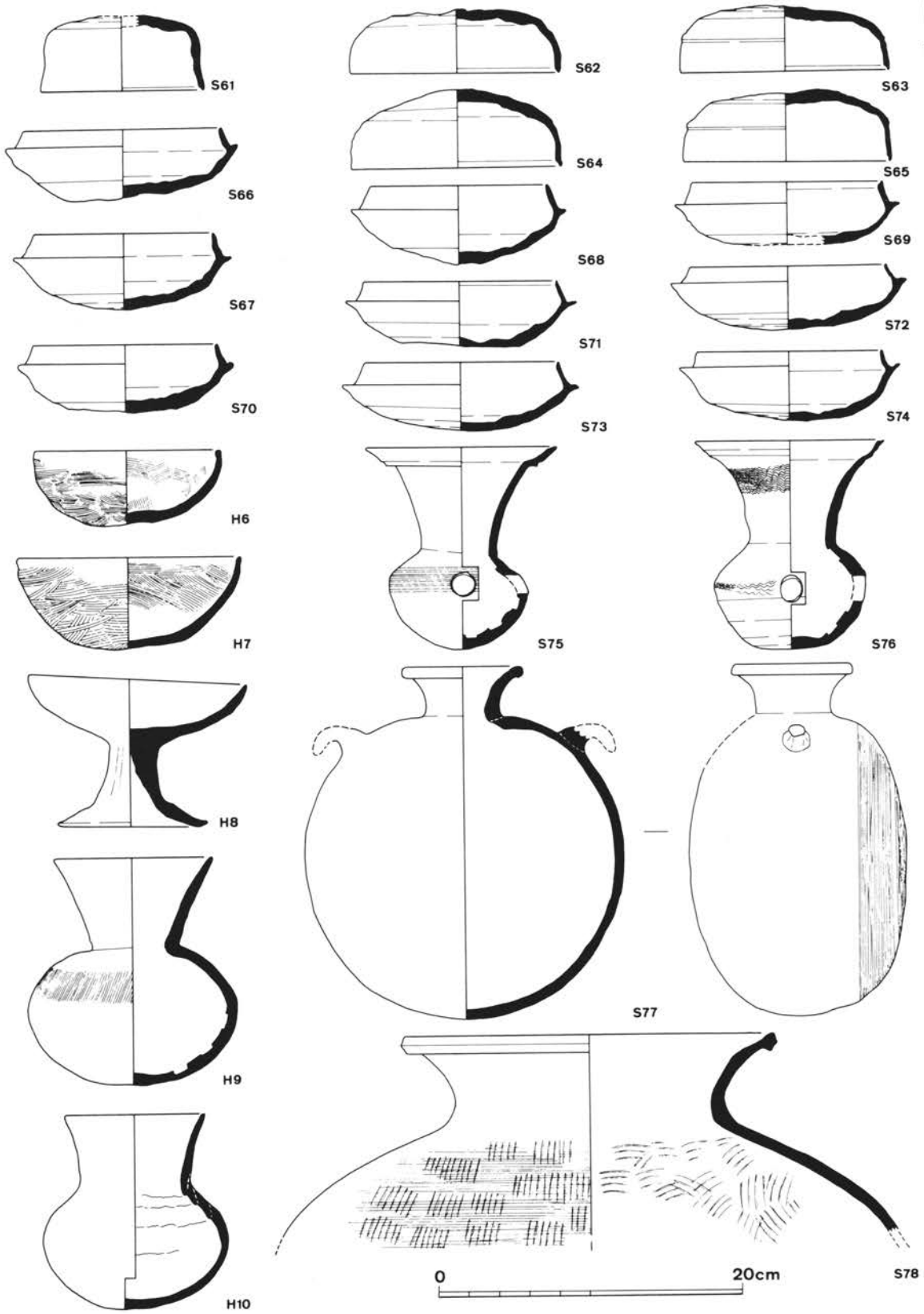
3号墳出土土器実測図



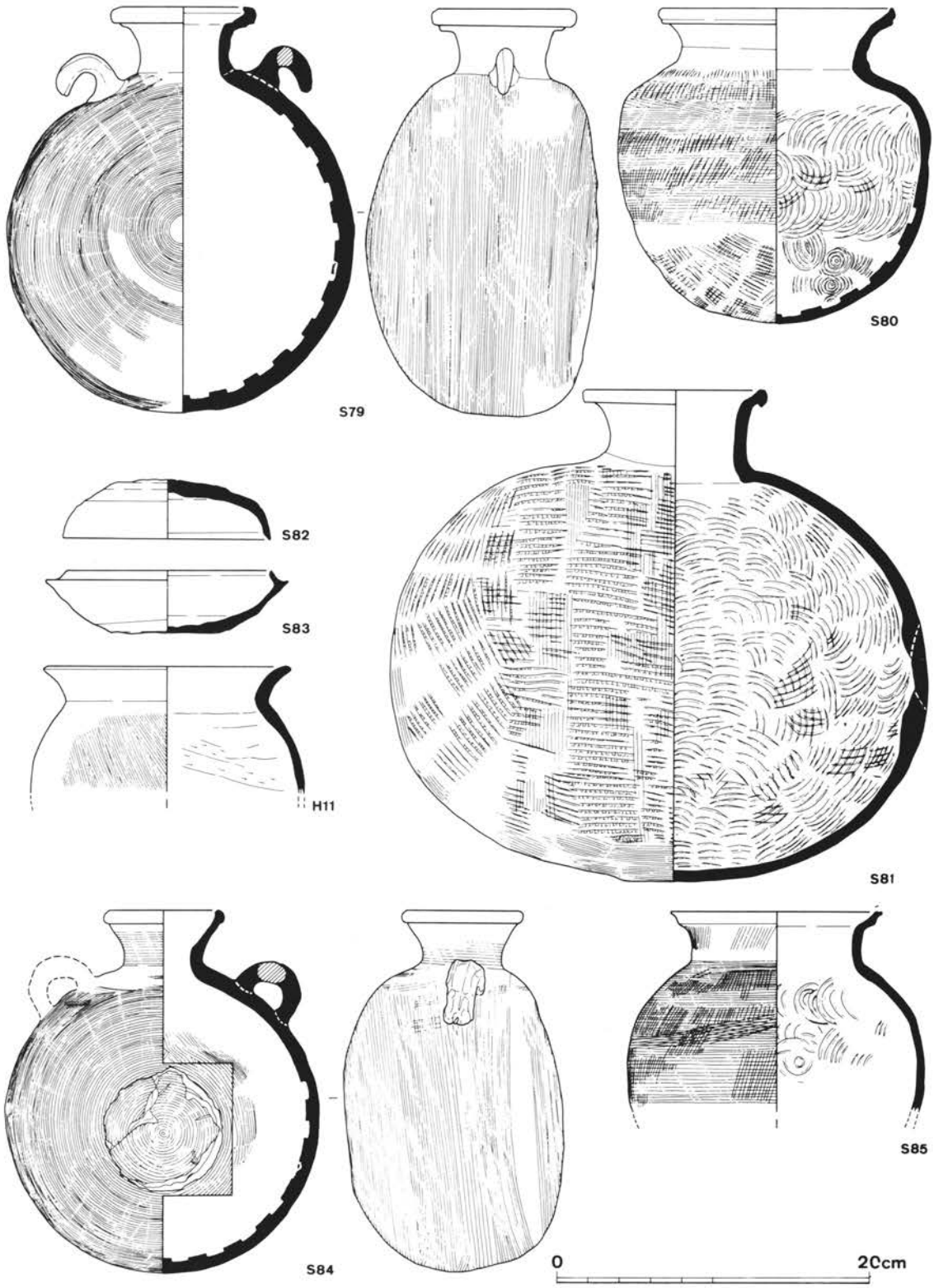
3・4号墳出土土器実測図（S43～45―3号墳、S27～42・46・H3・4―4号墳）



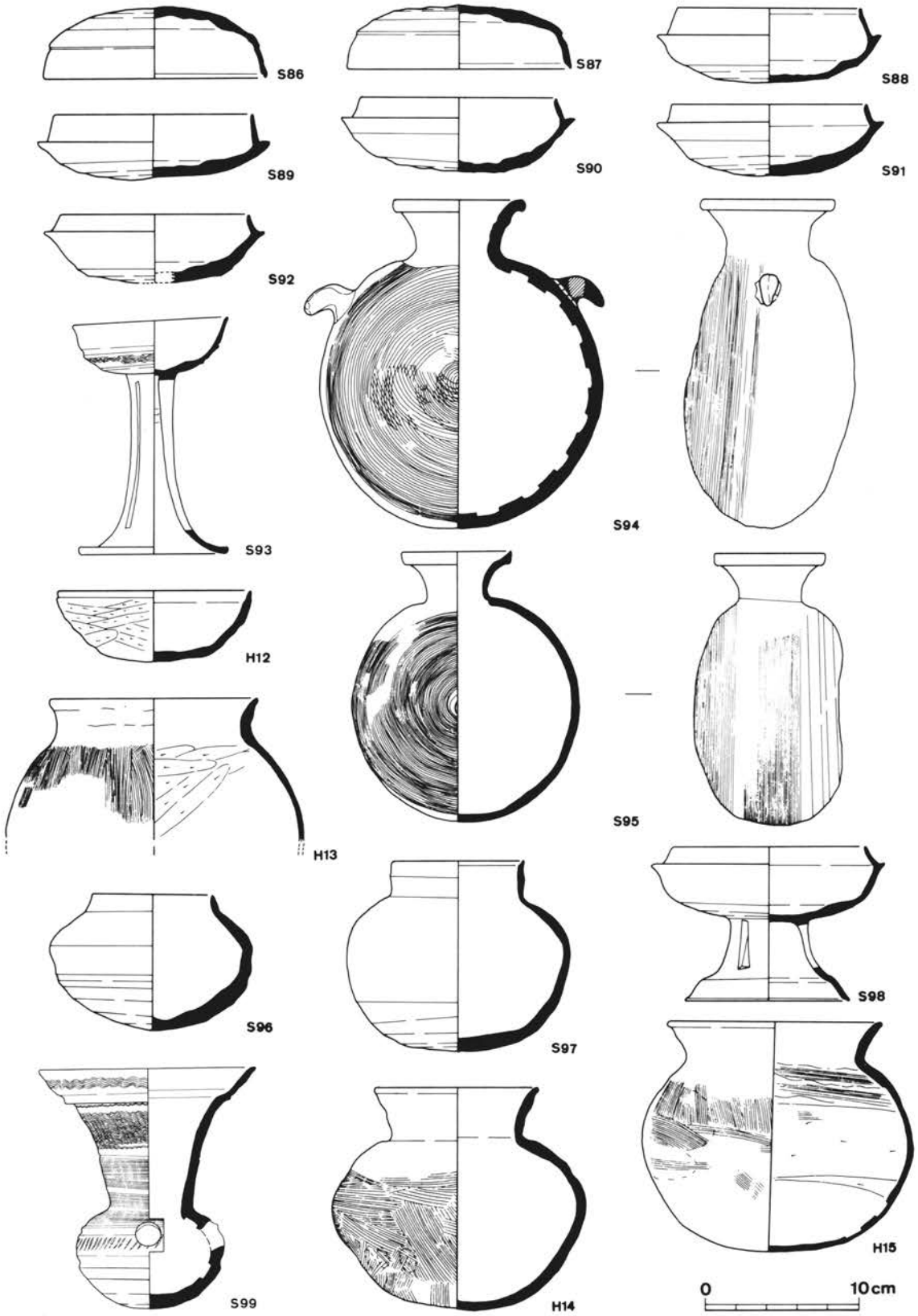
4・5・6号墳出土土器実測図（S47・48・H5－4号墳、S49～58－5号墳、S59・69－6号墳）


S61
S62
S63
S66
S64
S65
S68
S69
S67
S71
S72
S70
S73
S74
H6
S75
S76
H7
H8
S77
H9
H10
0
20cm
S78

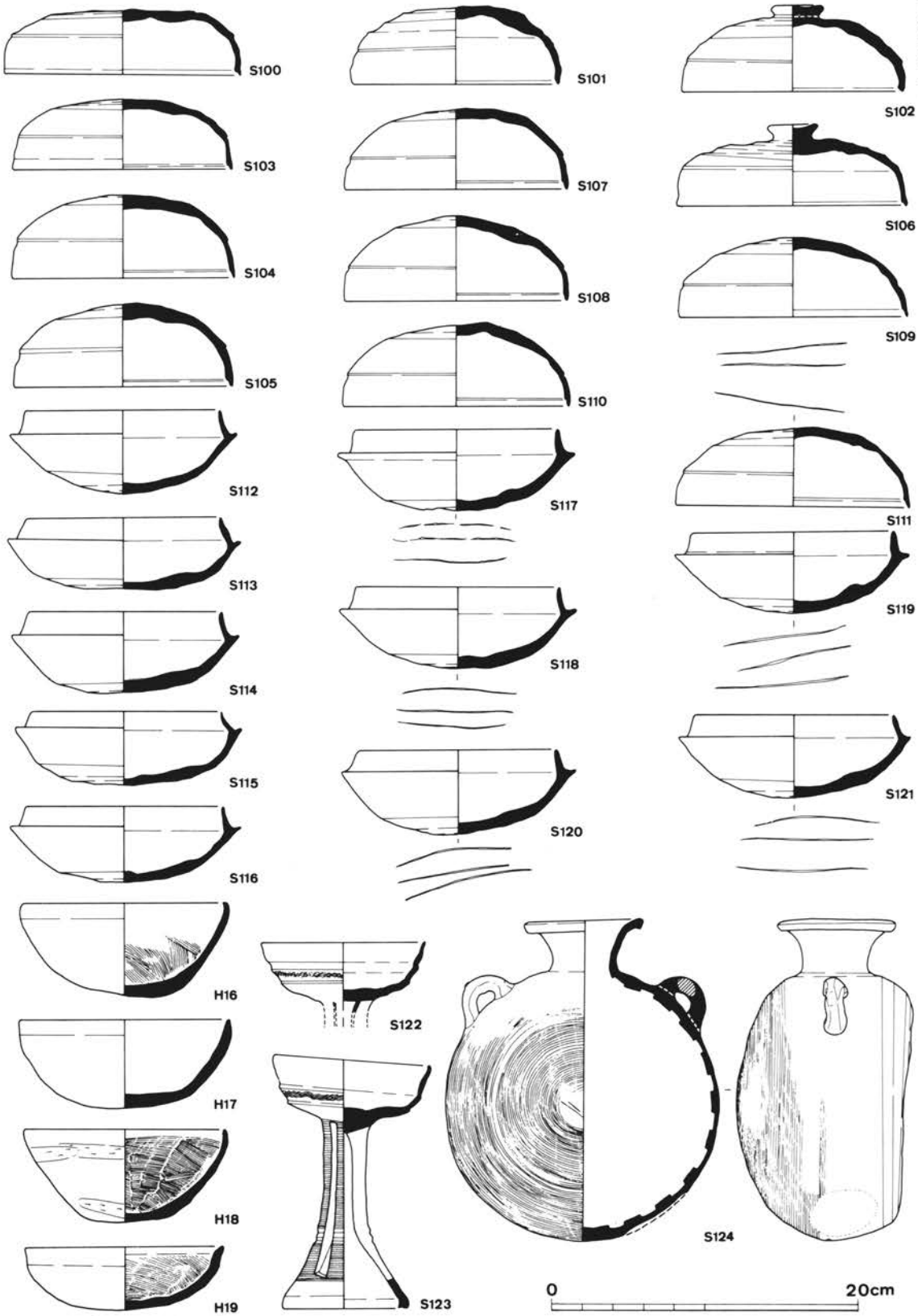
7号墳出土土器実測図



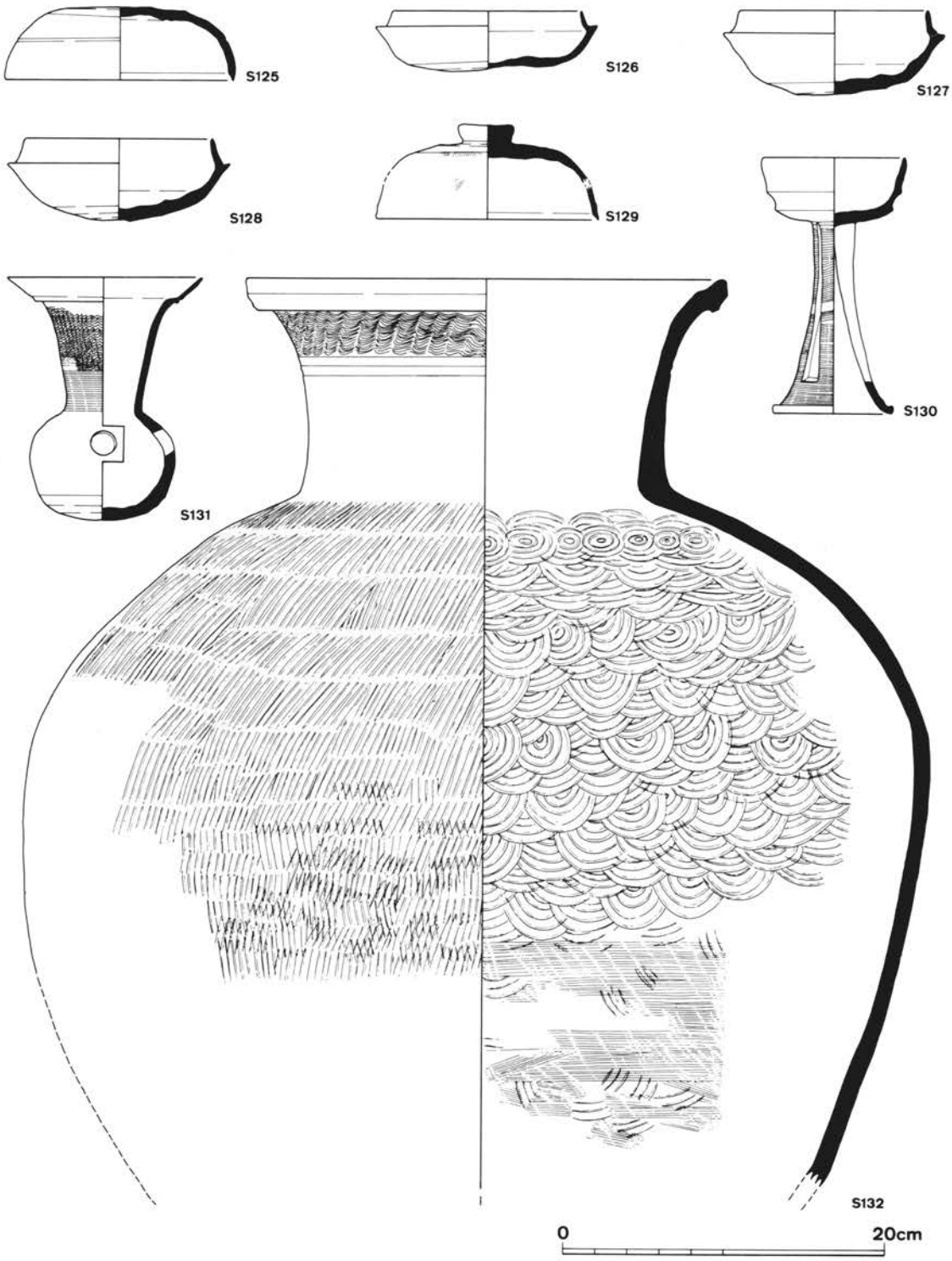
7・8・9号墳出土土器実測図（S79～81－7号墳、S82・83・H11－8号墳、S84・85－9号墳）



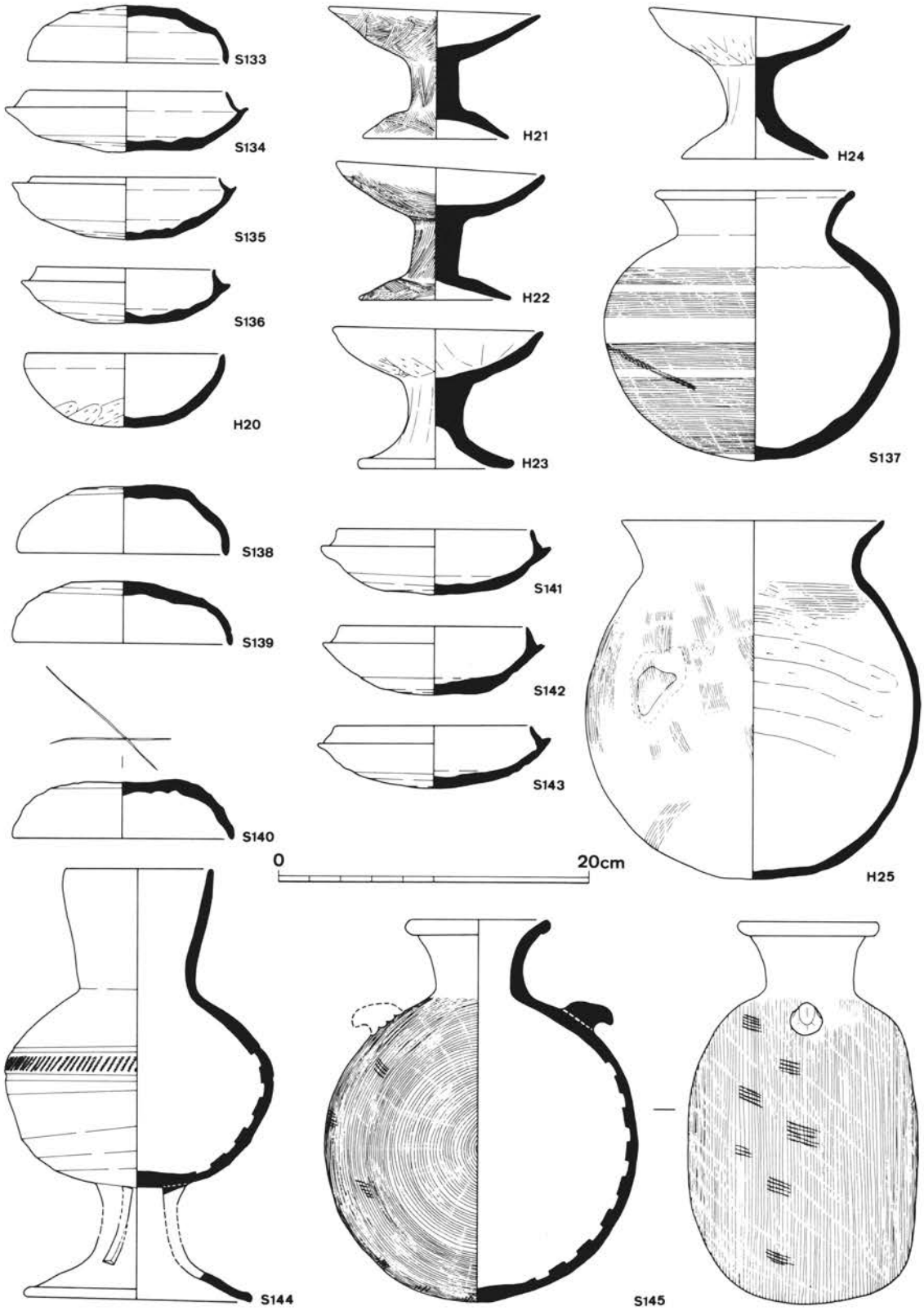
9・11号墳出土土器実測図（S86～95・H12・13―9号墳、S96～99・H14・15―11号墳）



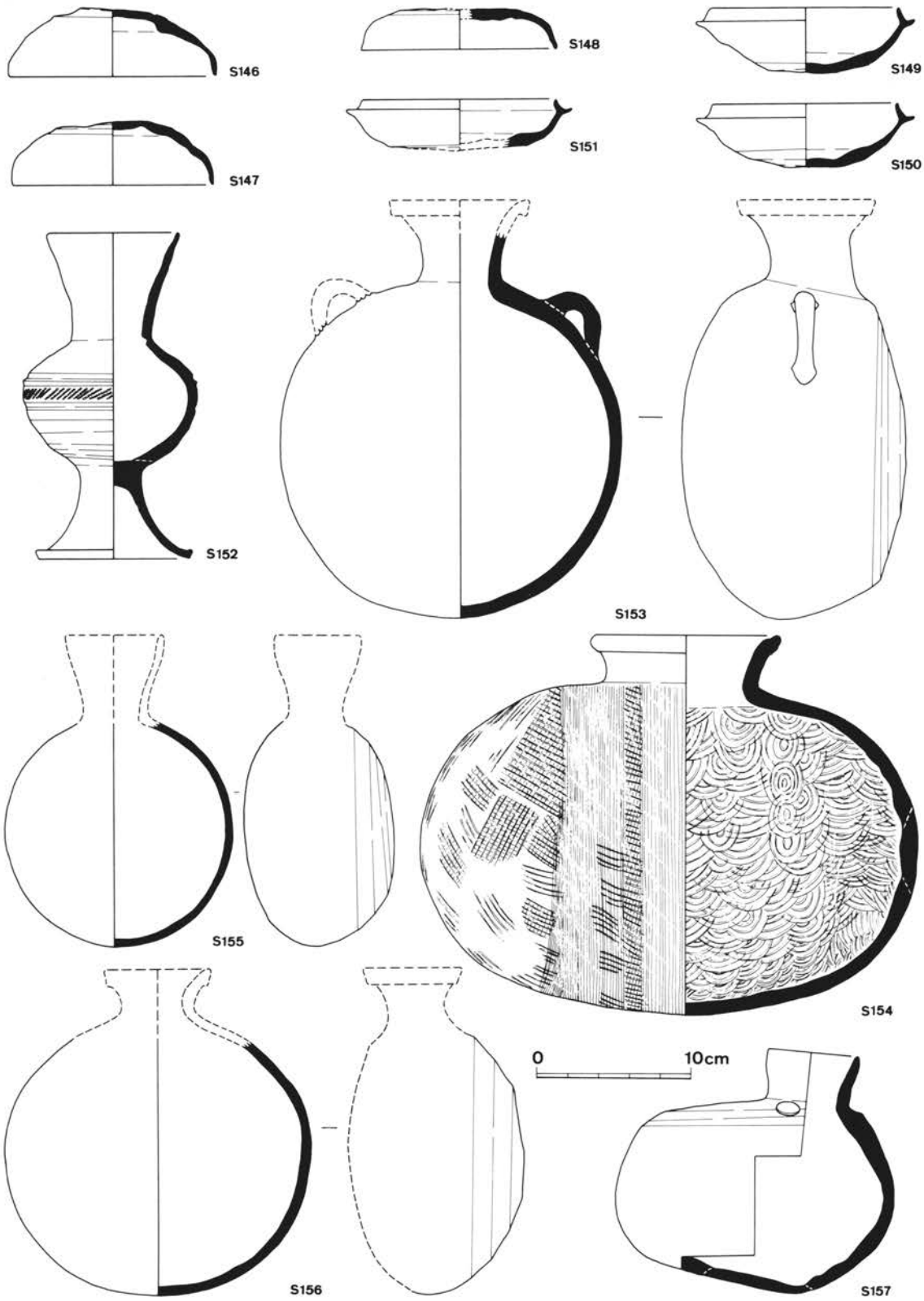
11号墳出土土器実測図



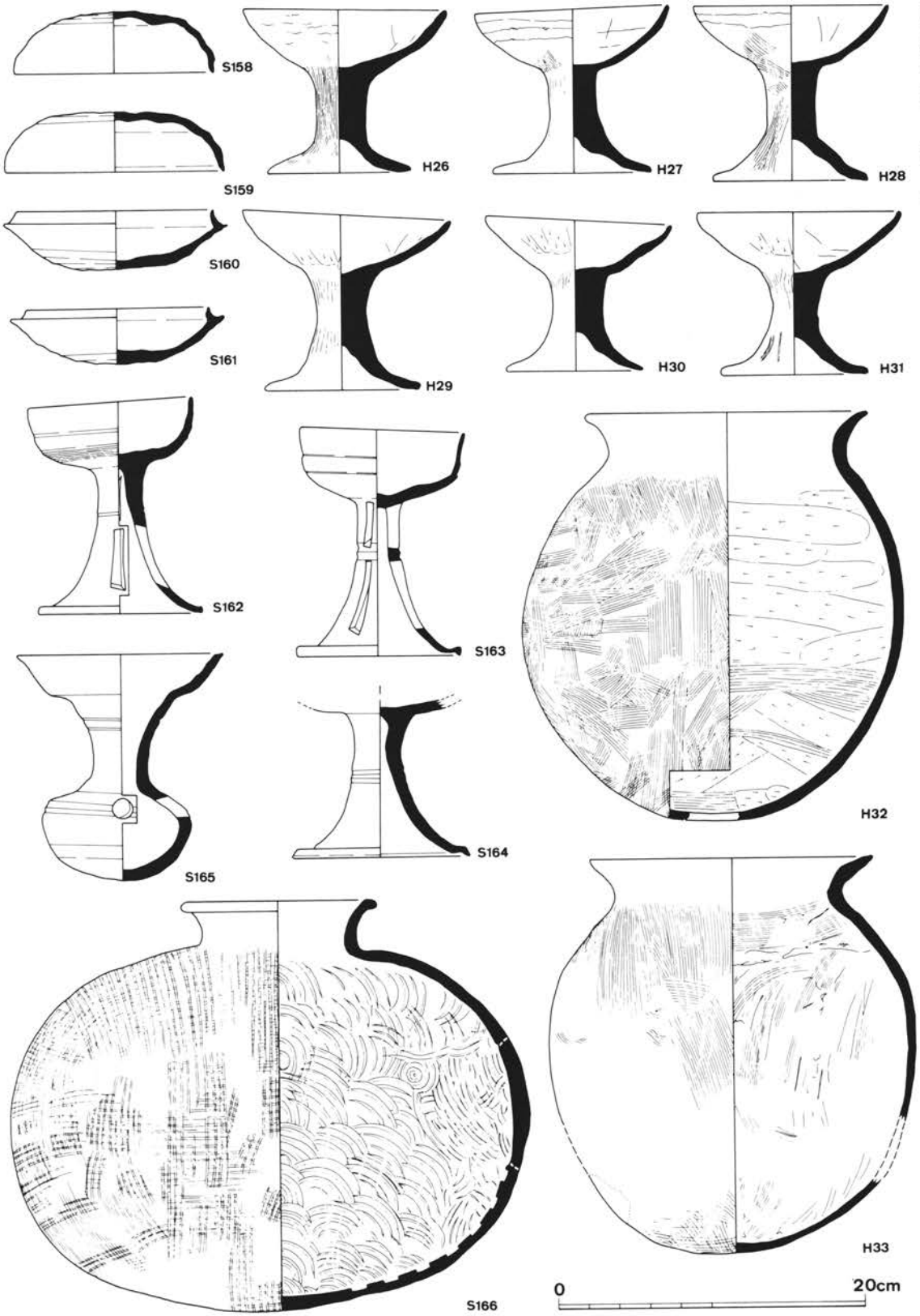
12号墳出土土器実測図



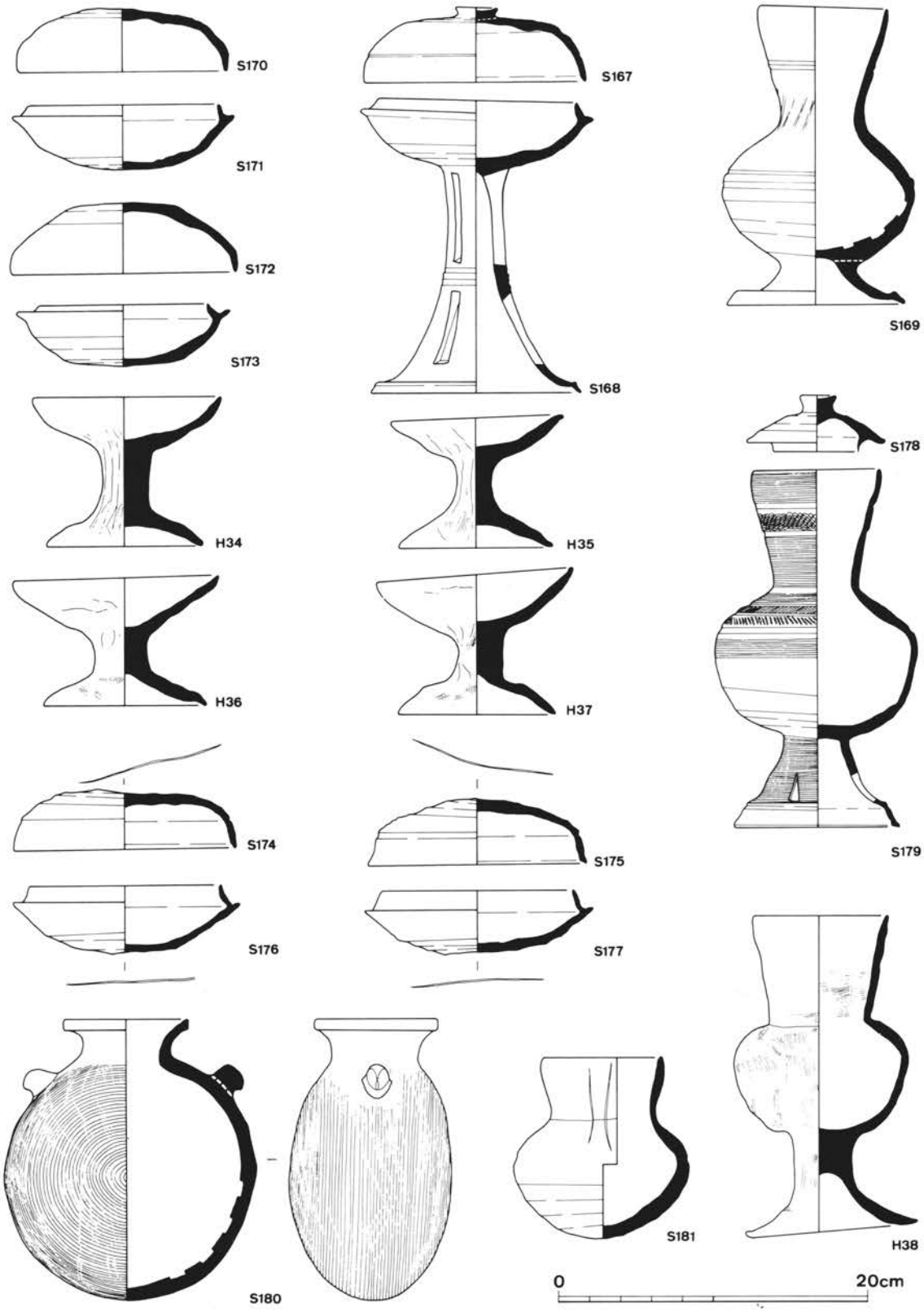
1・2号横穴出土土器実測図（S133～137・H20～24―1号横穴、S138～145・H25―2号横穴）



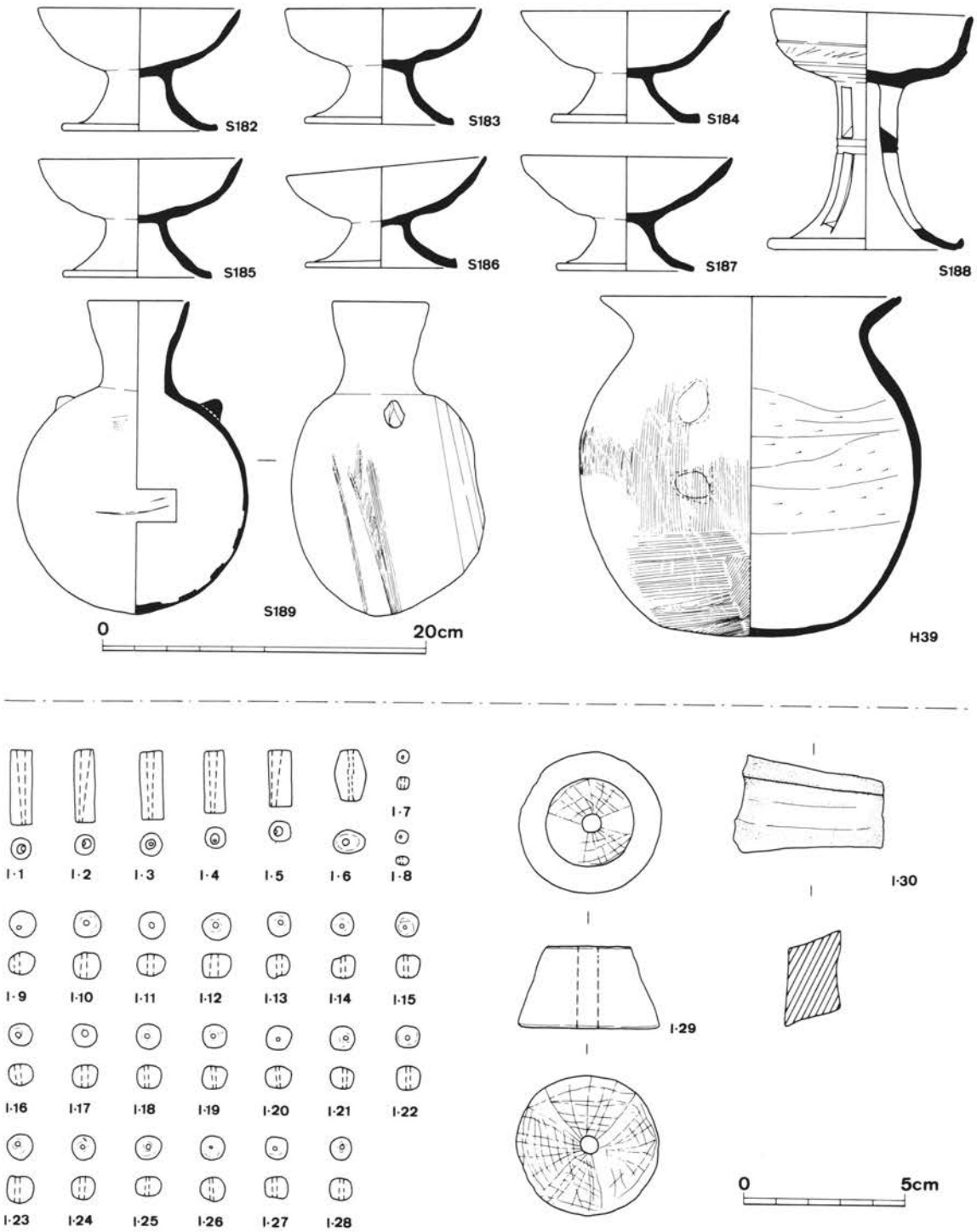
3号横穴・土壙墓1出土土器実測図（S146～153―3号横穴、S154～157―土壙墓1）



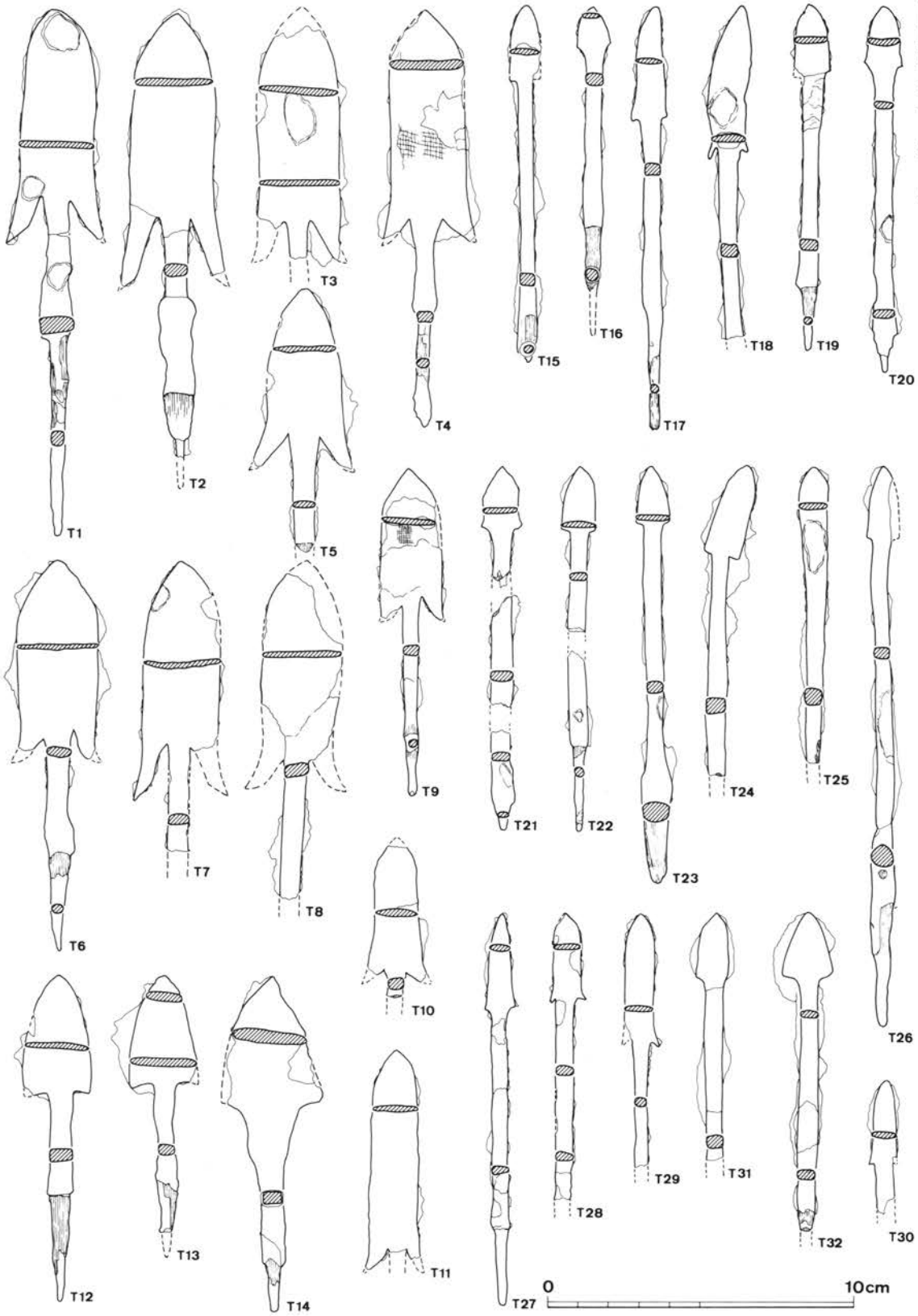
土壙墓Ⅰ出土土器実測図



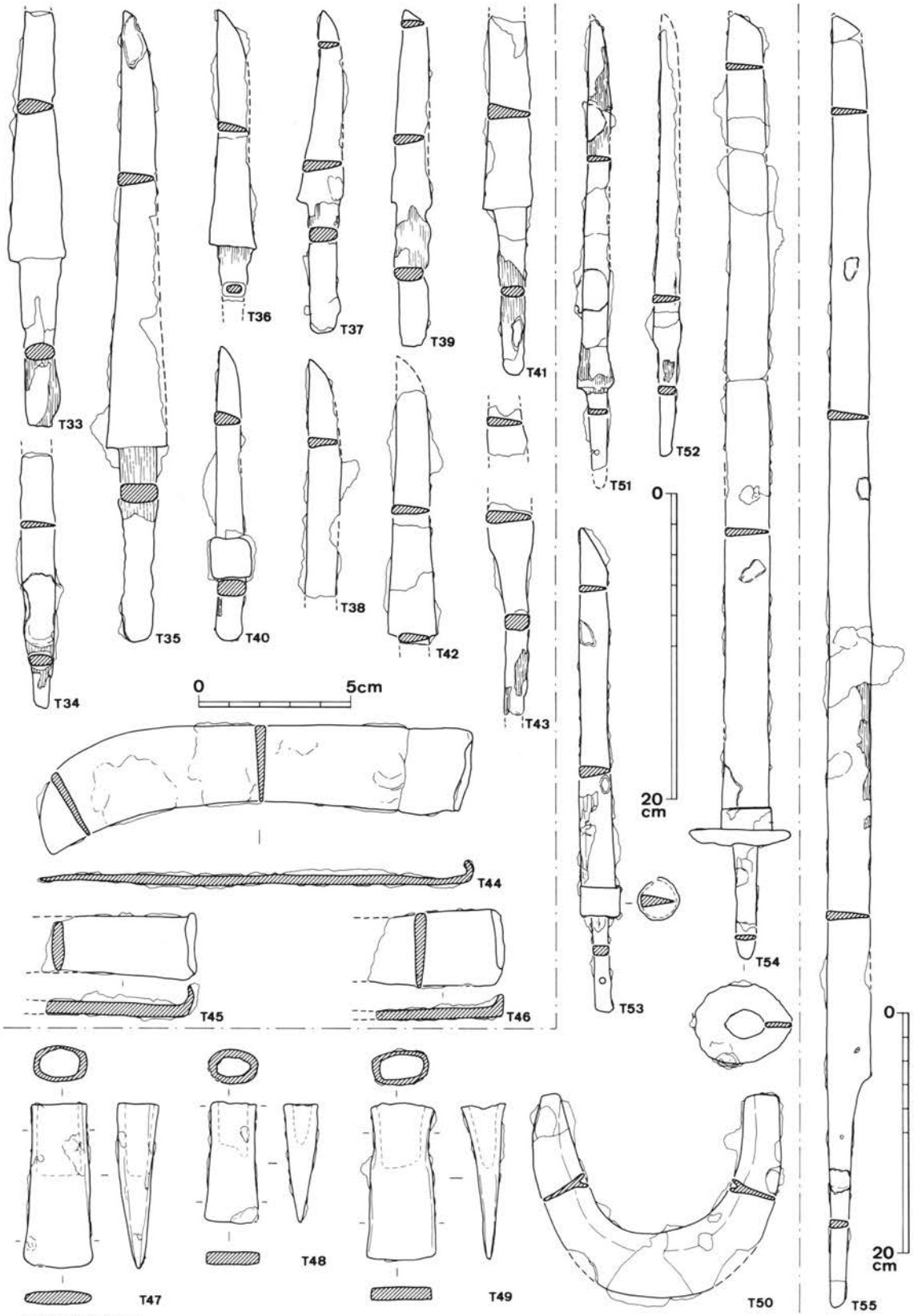
土壙墓１～６出土土器実測図（S167～169―土壙墓１、S170・171―土壙墓２、S172・173・H34～37―土壙墓３、S174～179―土壙墓４、S180―土壙墓５、S181・H38―土壙墓６）



土壙墓７出土土器・玉・石製品実測図（S182～189・H39―土壙墓７、I１～５―６号墳、I９～28―９号墳
I６～８―２号横穴、I29―７号墳、I30―土壙墓５）


T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
T11
T12
T13
T14
T15
T16
T17
T18
T19
T20
T21
T22
T23
T24
T25
T26
T27
T28
T29
T30
T31
T32
0
10cm

鉄鏃実測図

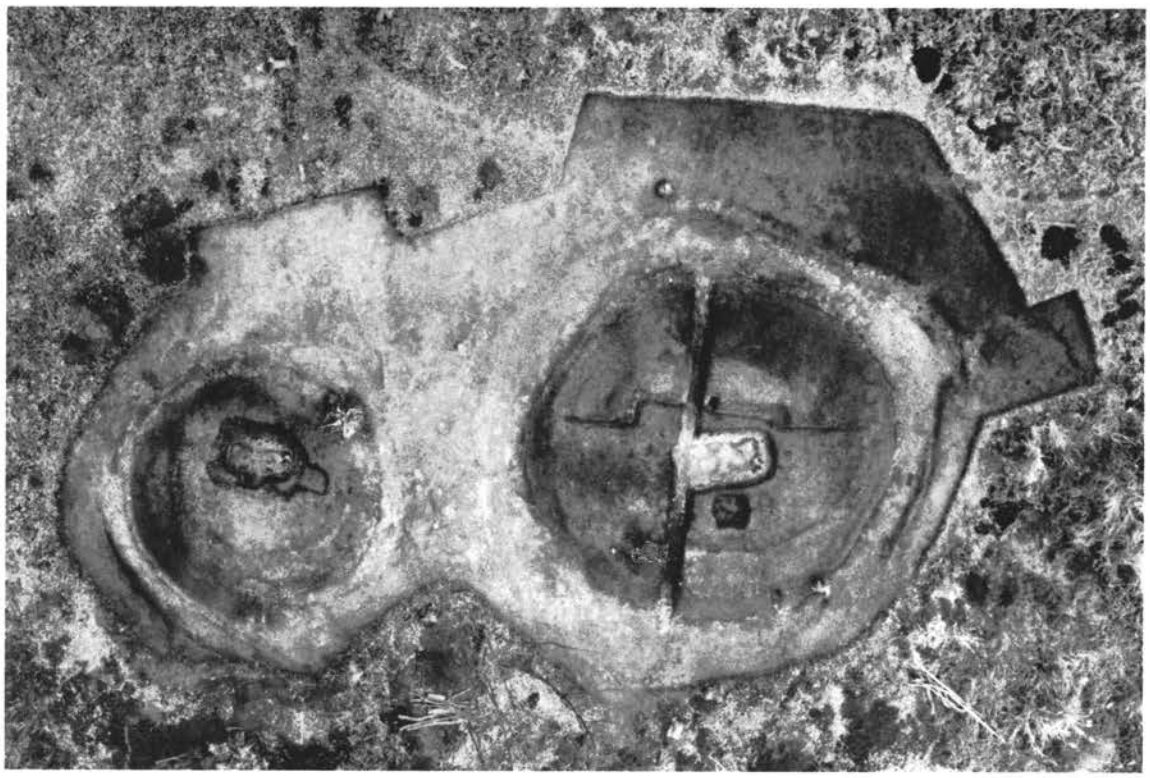

T33
T34
T35
T36
T37
T38
T39
T40
T41
T42
T43
T44
T45
T46
T47
T48
T49
T50
T51
T52
T53
T54
T55
0
5cm
0
20
cm
0
20
cm

鉄製品実測図

古墳群全景（上が北）

(1)　1号墳全景（左上が北）

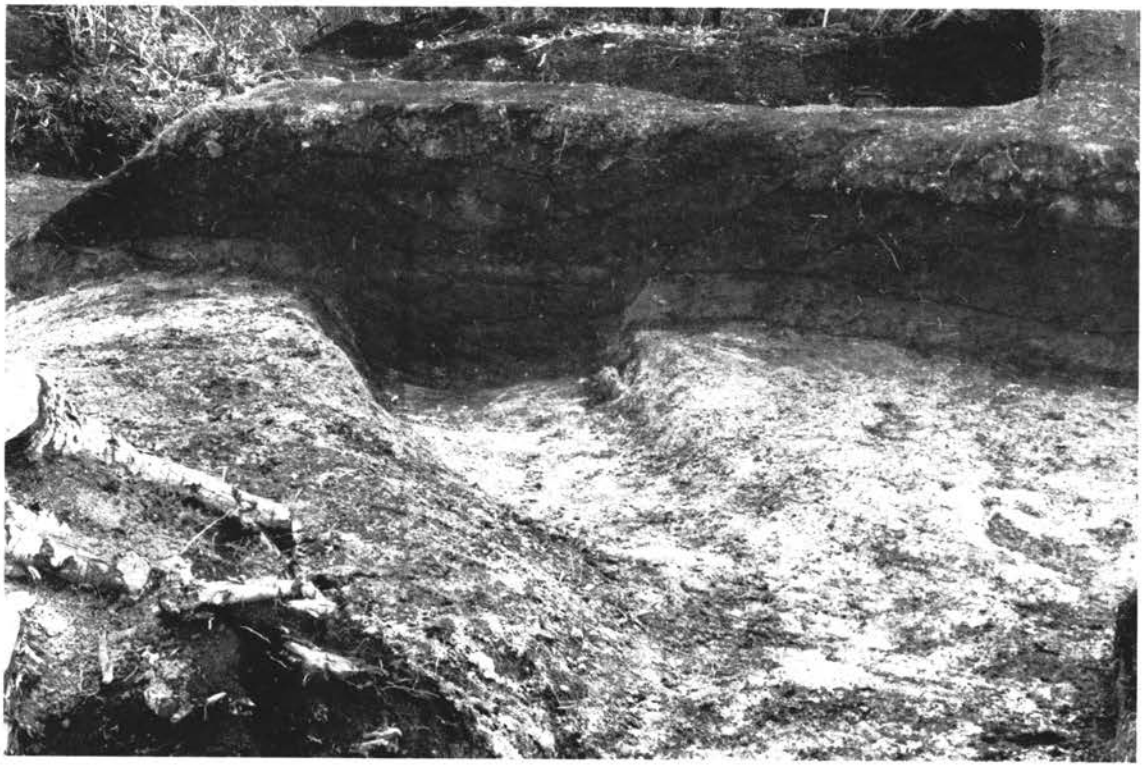
(2)　1号墳主体部検出状況（南東から）



(1)　2・3号墳全景（左・2号墳、右・3号墳）

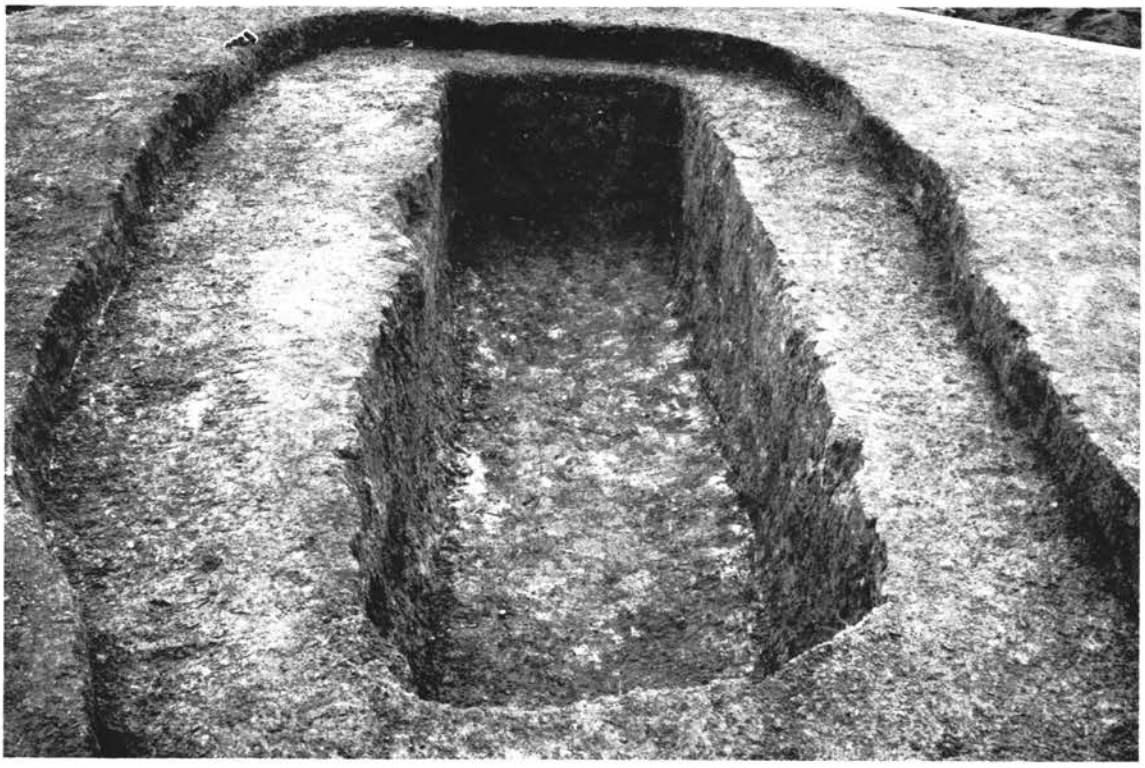
(2)　2号墳第1主体部（北東から）

(1)　２号墳下層古墳検出状況及び第２主体部（北西から）



(2)　２号墳下層古墳周溝断面（東から）

(1)　3号墳調査前全景（南東から）



(2)　3号墳第1主体部（南東から）

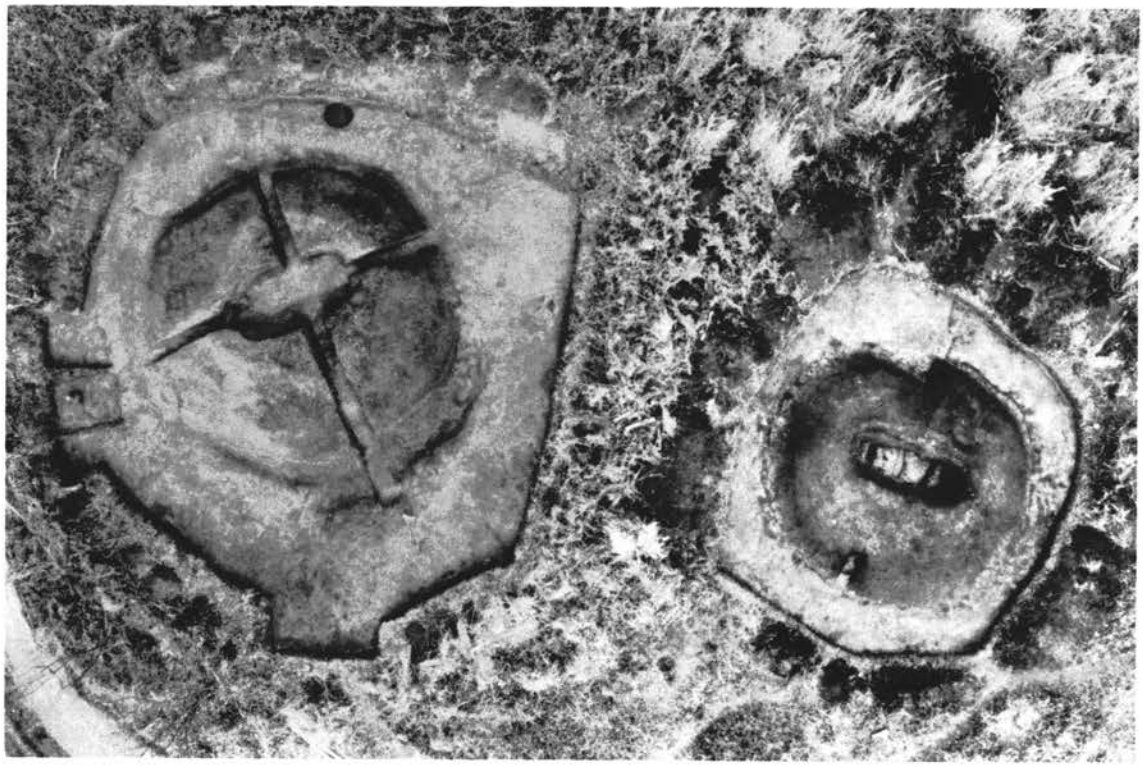
(1)　3号墳第2主体部（南東から）

(2)　3号墳第3主体部（北西から）

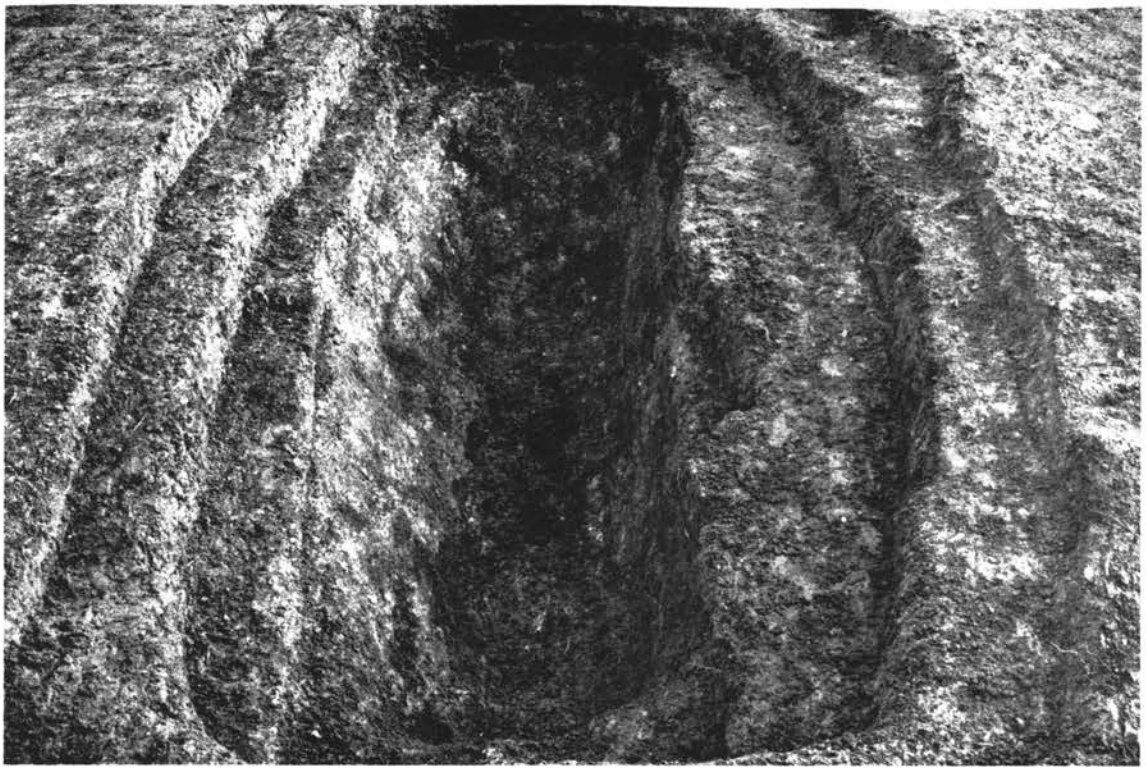
(1)　4号墳全景（左上が北）

(2)　4号墳土壙4－1（北東から）

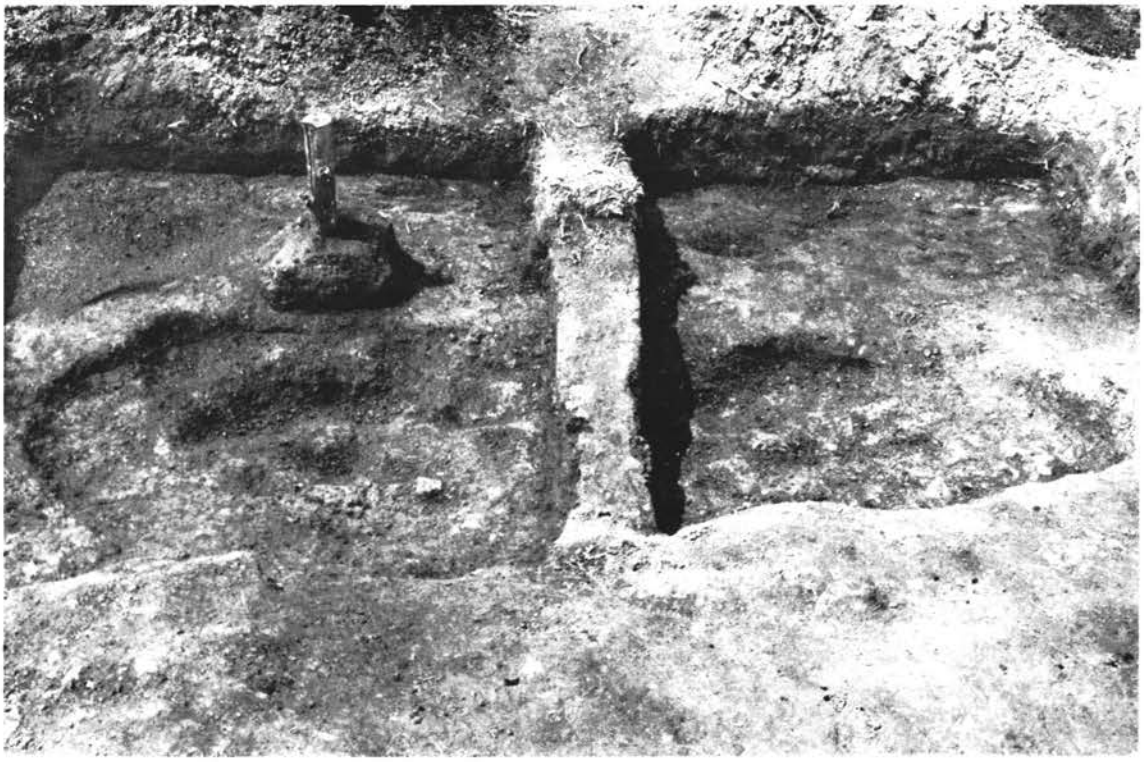
(1)　5号墳調査前全景（東から）



(2)　5・6号墳全景（左・5号墳、右・6号墳）



(1)　5号墳主体部（西から）

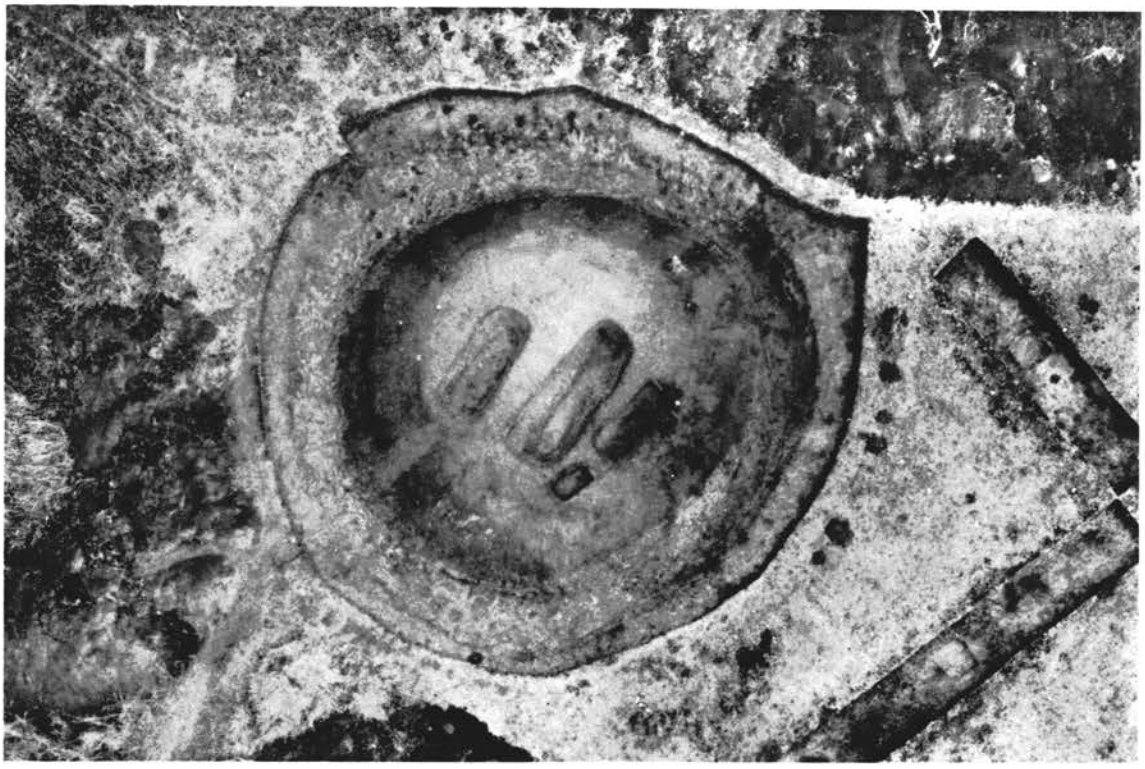


(2)　5号墳土壙5－1（西から）

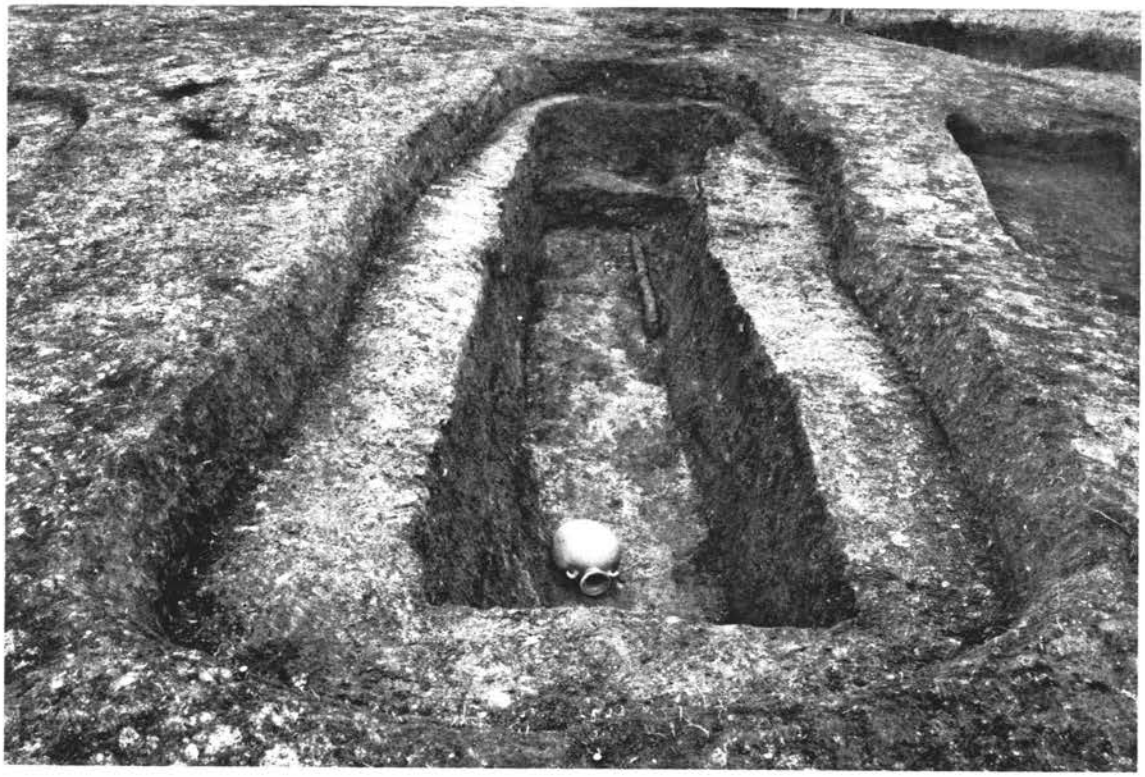
(1)　6号墳調査前全景（南から）

(2)　6号墳主体部（東から）

(1)　7号墳調査前全景（南から）

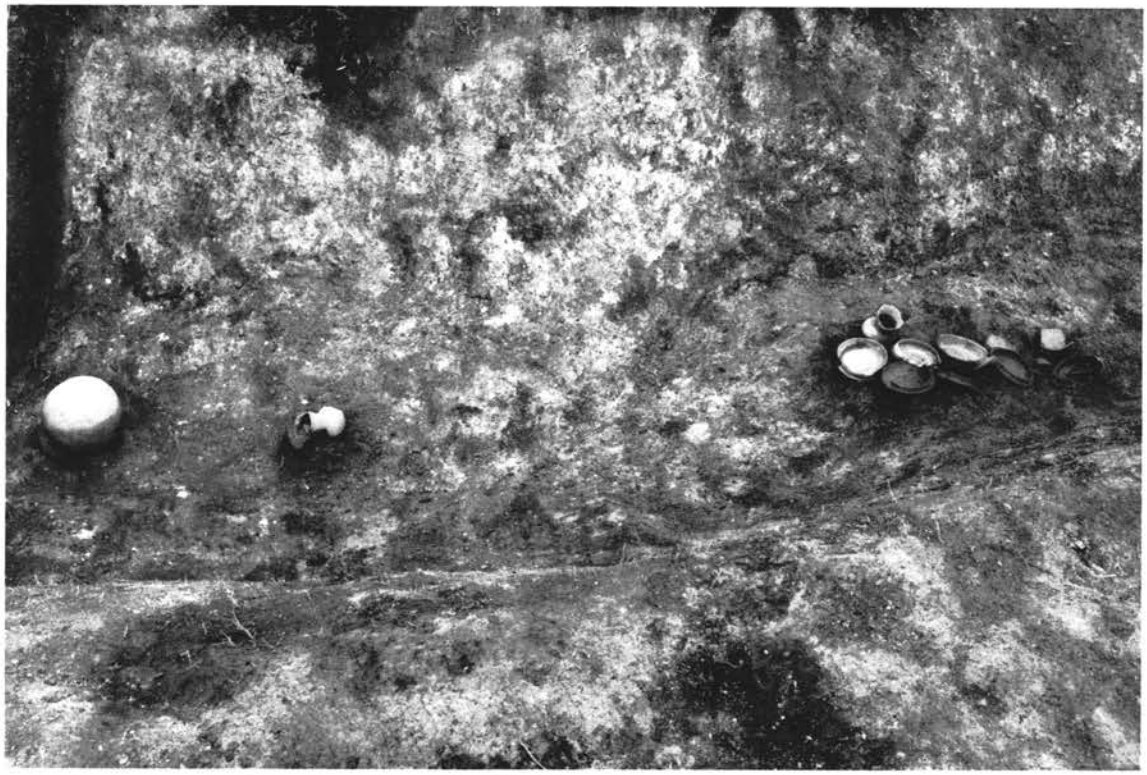


(2)　7号墳全景（上方がほぼ北）



(1)　7号墳第1主体部（西から）

(2)　7号墳第2主体部（東から）

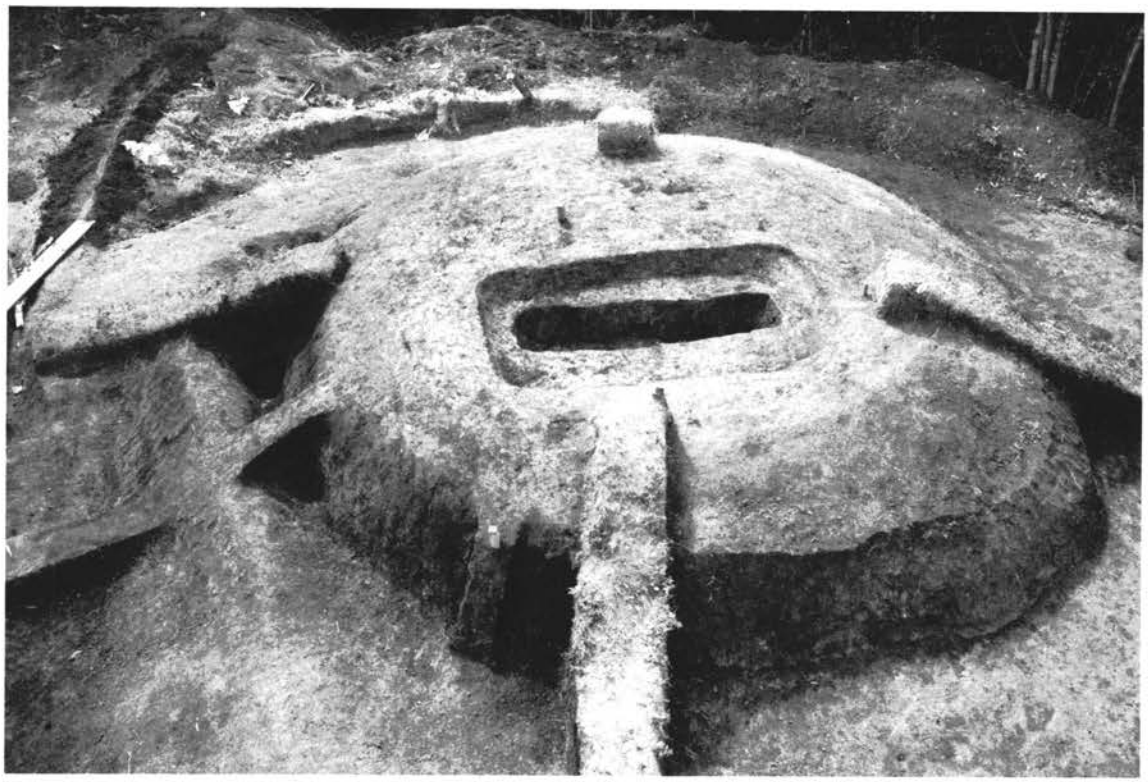


(1)　7号墳周溝内土器出土状況（南から）

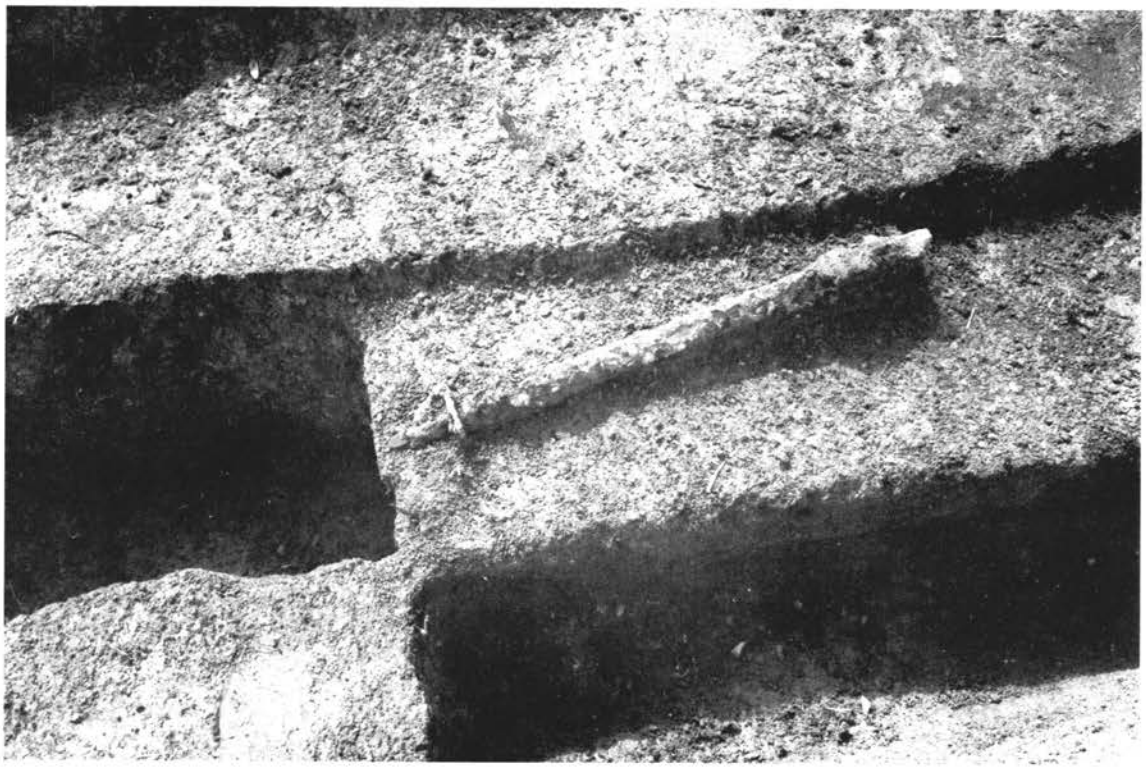
(2)　7号墳周溝断面（西から）

(1)　8・9号墳調査前全景（左・9号墳、右・8号墳、北西から）

(2)　8・9号墳全景（左・9号墳、右・8号墳）



(1)　8号墳全景（北から）



(2)　8号墳主体部鉄刀出土状況（北から）

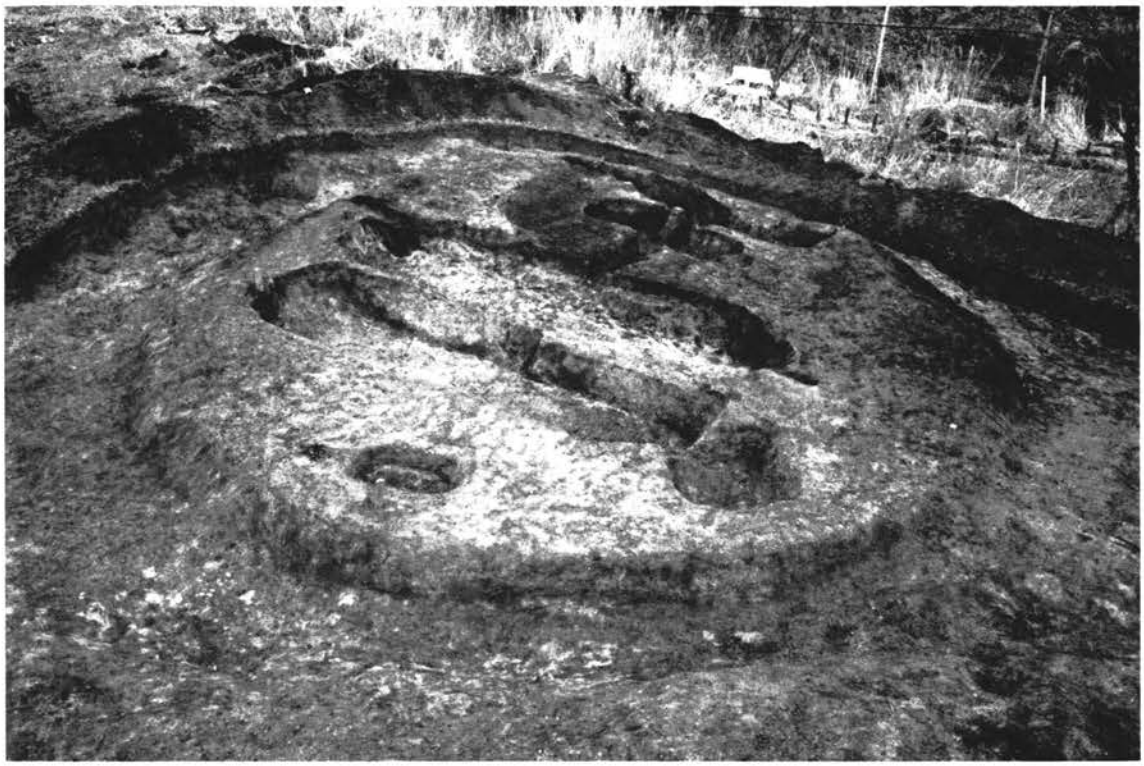
(1)　9号墳調査前全景（北から）

(2)　9号墳第1主体部（西から）

(1)　9号墳第2主体部（南西から）

(2)　9号墳土壙9－2（北西から）

(1)　11号墳調査前全景（北から）



(2)　11号墳全景（北東から）

(1)　11号墳第１主体部

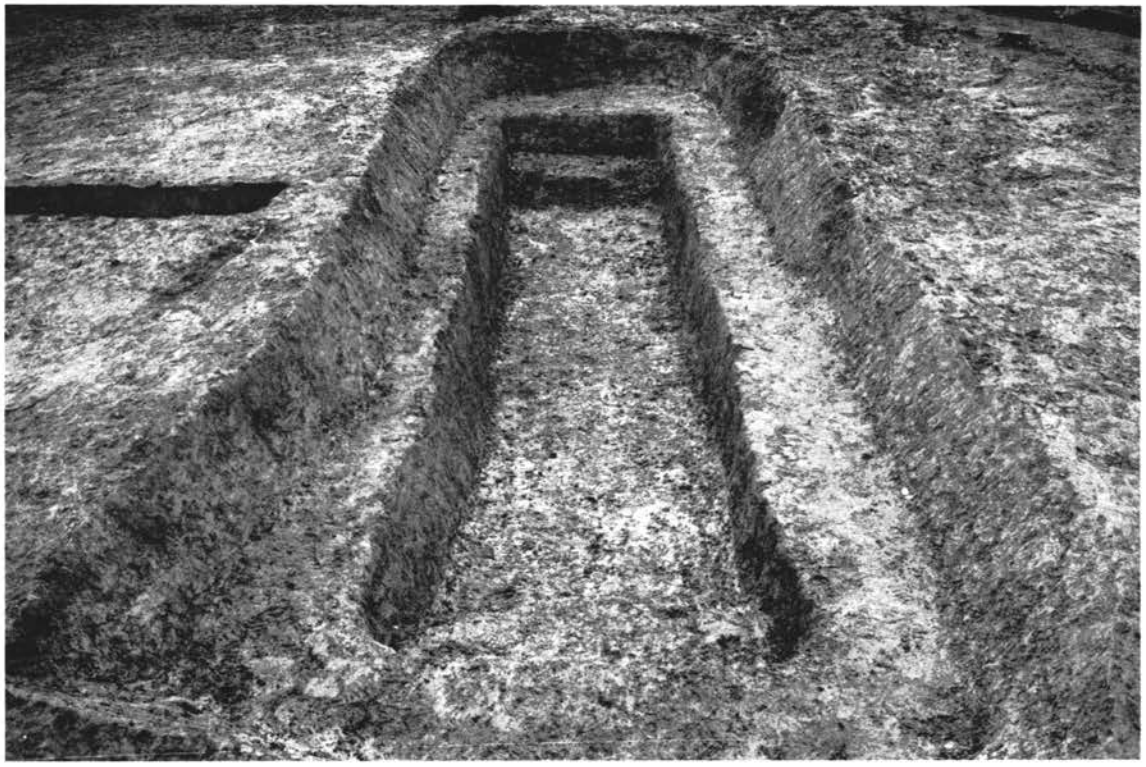
(2)　11号墳第２主体部（北から）

(1)　11号墳第４主体部（南から）

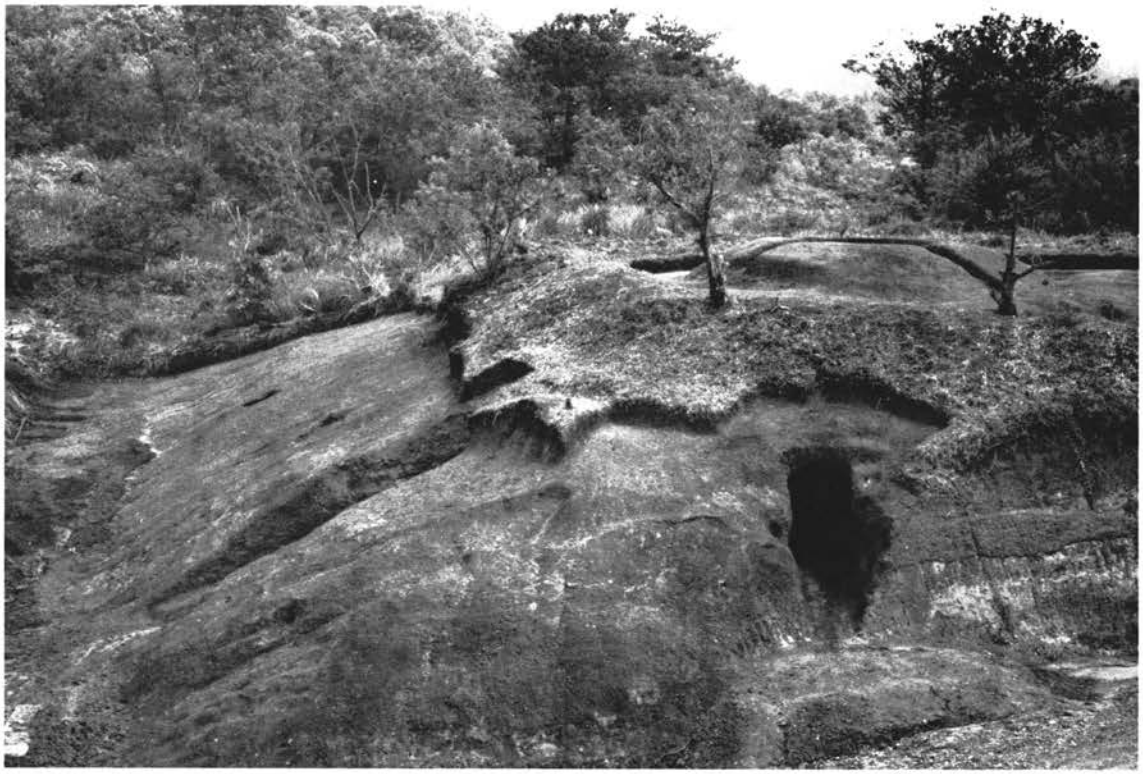
(2)　11号墳第３主体部（南から）

(3)　12号墳調査前全景（西から）

(1)　12号墳全景（東から）

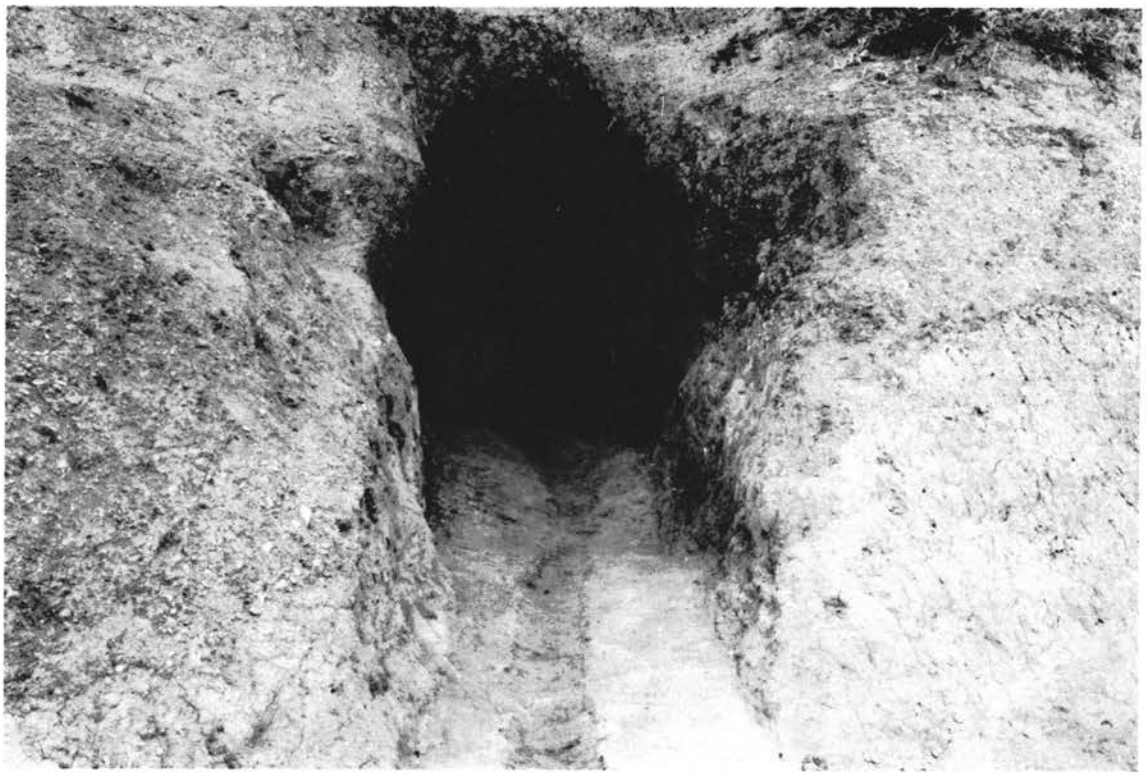


(2)　12号墳主体部（東から）



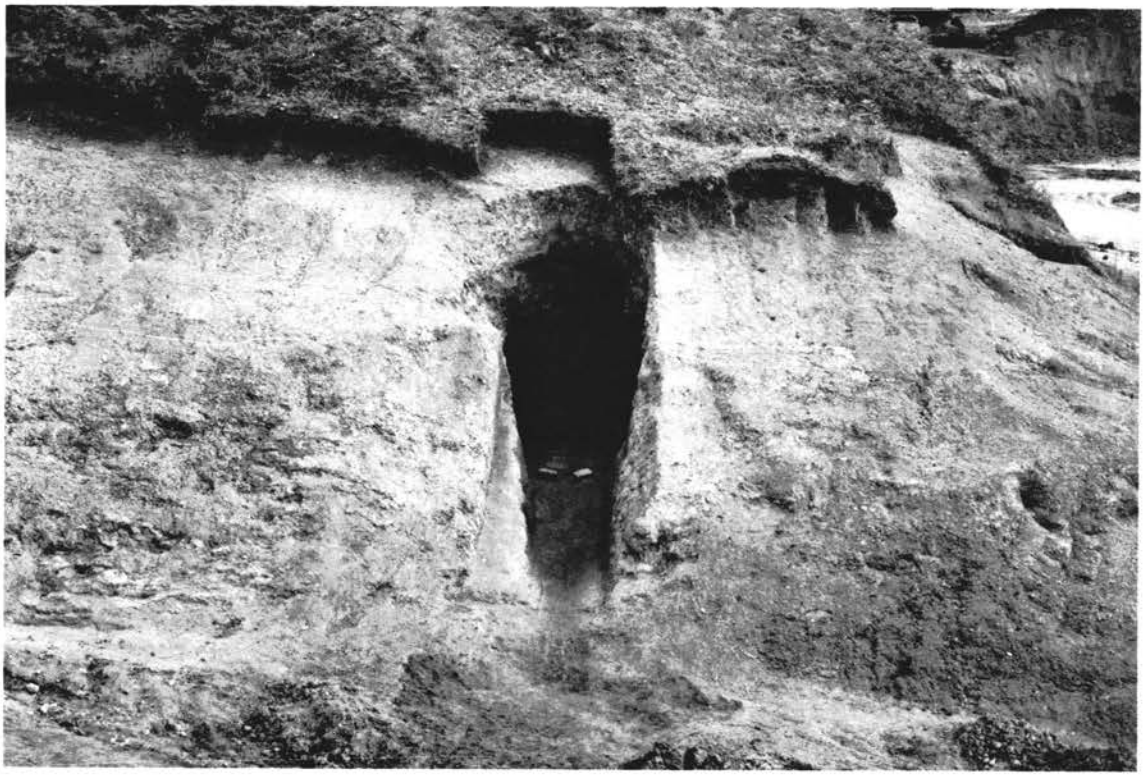
(1)　1・2号横穴南半部（西から）

(2)　3号横穴・土壙墓群（南から）



(1)　1号横穴（西から）

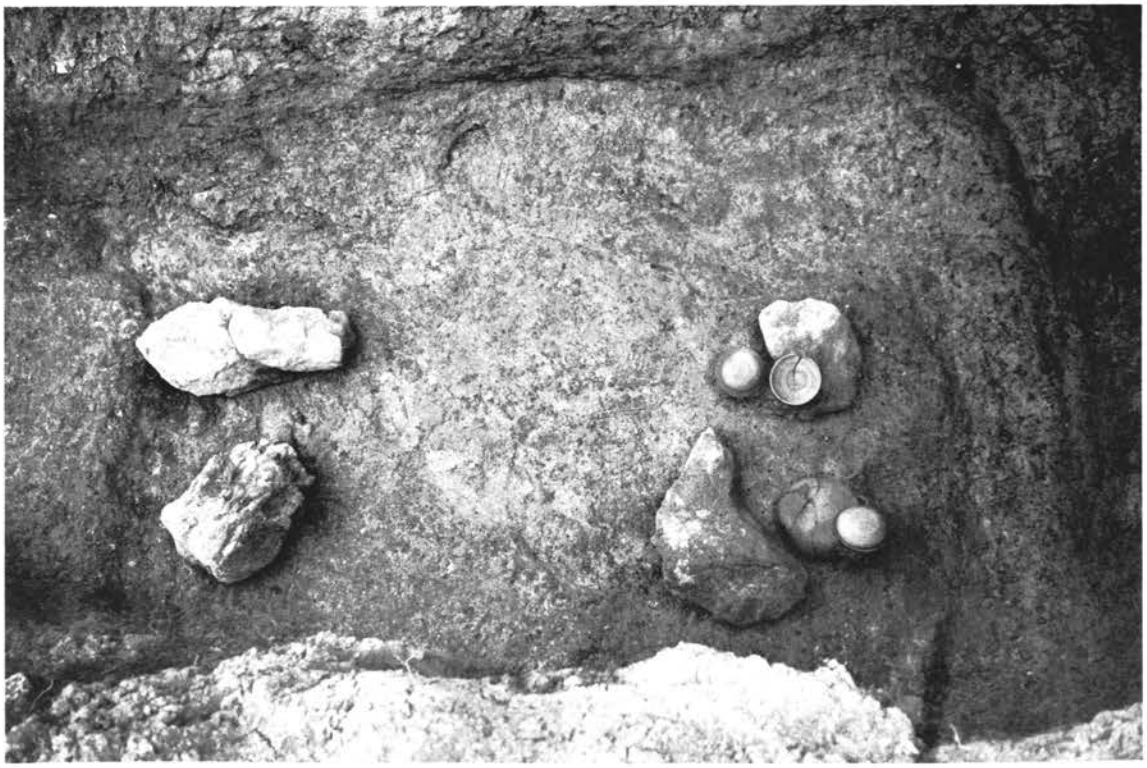
(2)　1号横穴玄室（西から）



(1)　２号横穴（北から）

(2)　２号横穴玄室（西から）

(1)　3号横穴（南から）

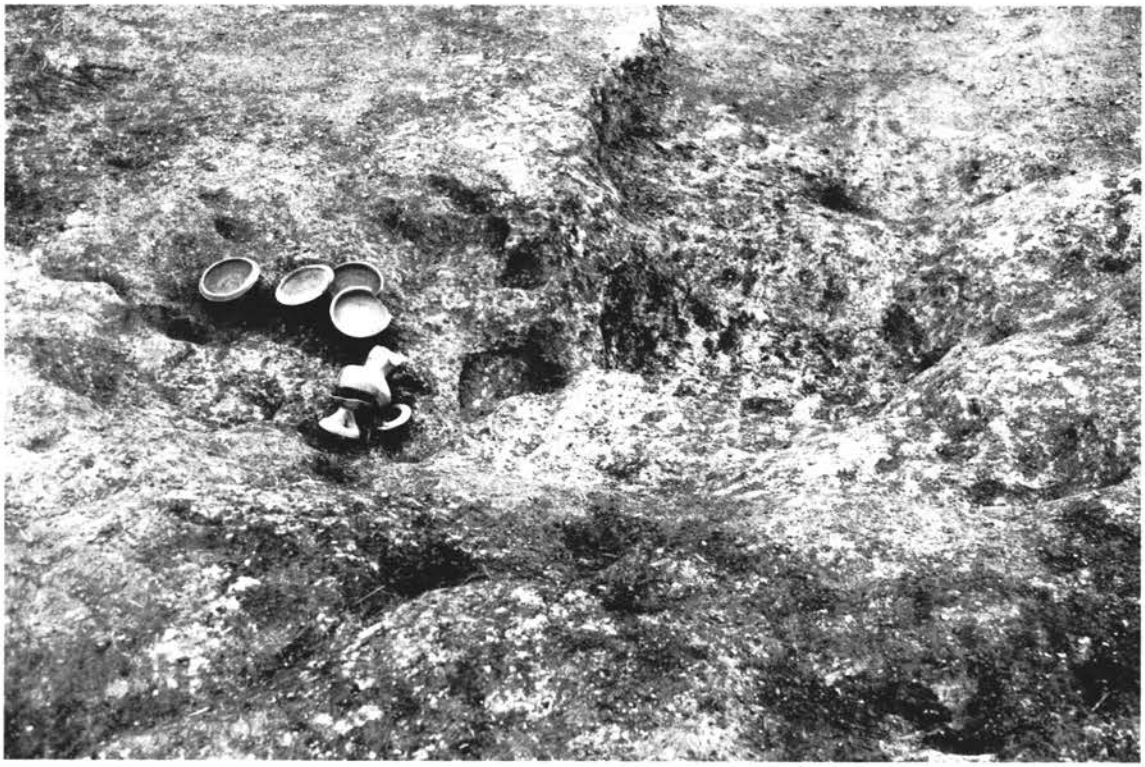


(2)　3号横穴玄室（東から）

(1)　土壙墓１（北から）

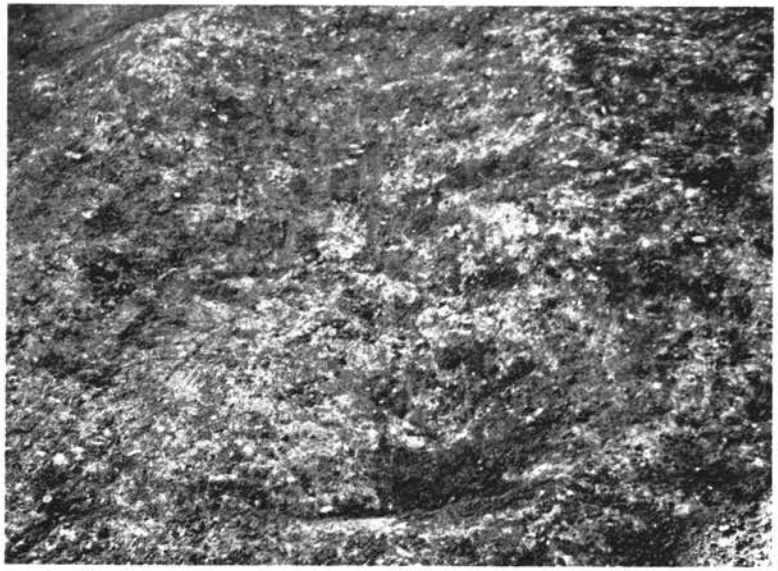
(2)　土壙墓１土器出土状況（南から）

(1)　土壙墓３（北から）



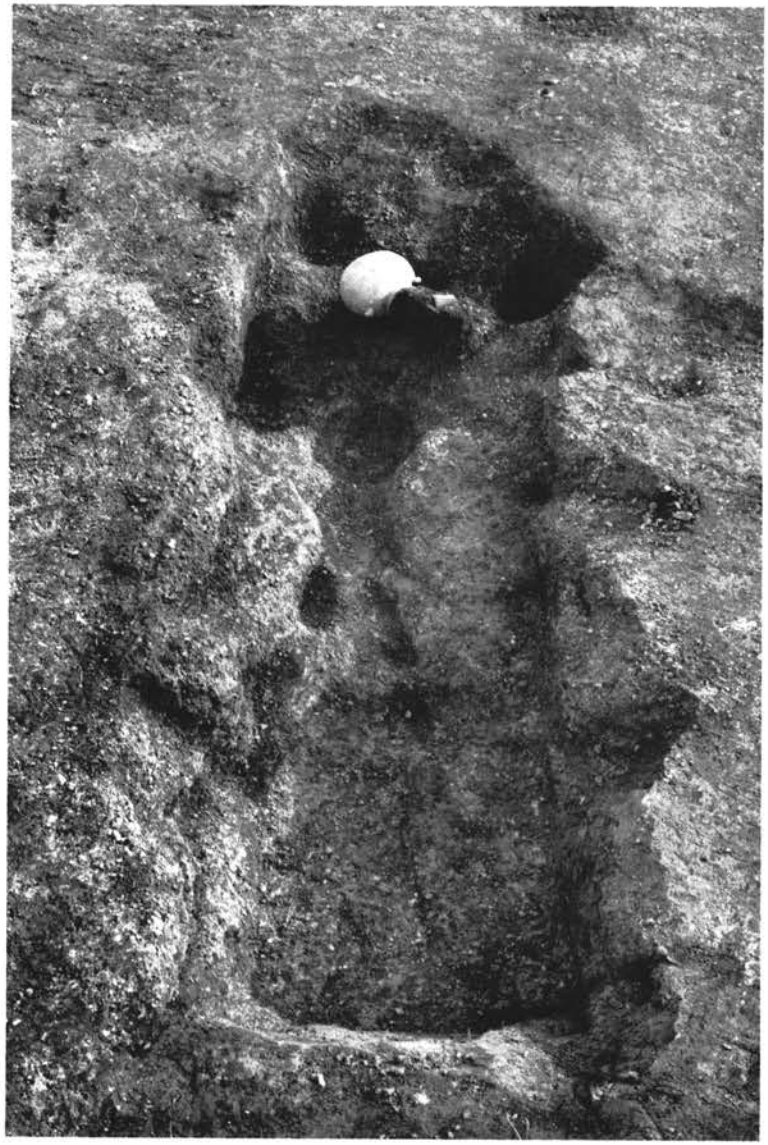
(2)　土壙墓４（北から）

図版第六　遺跡

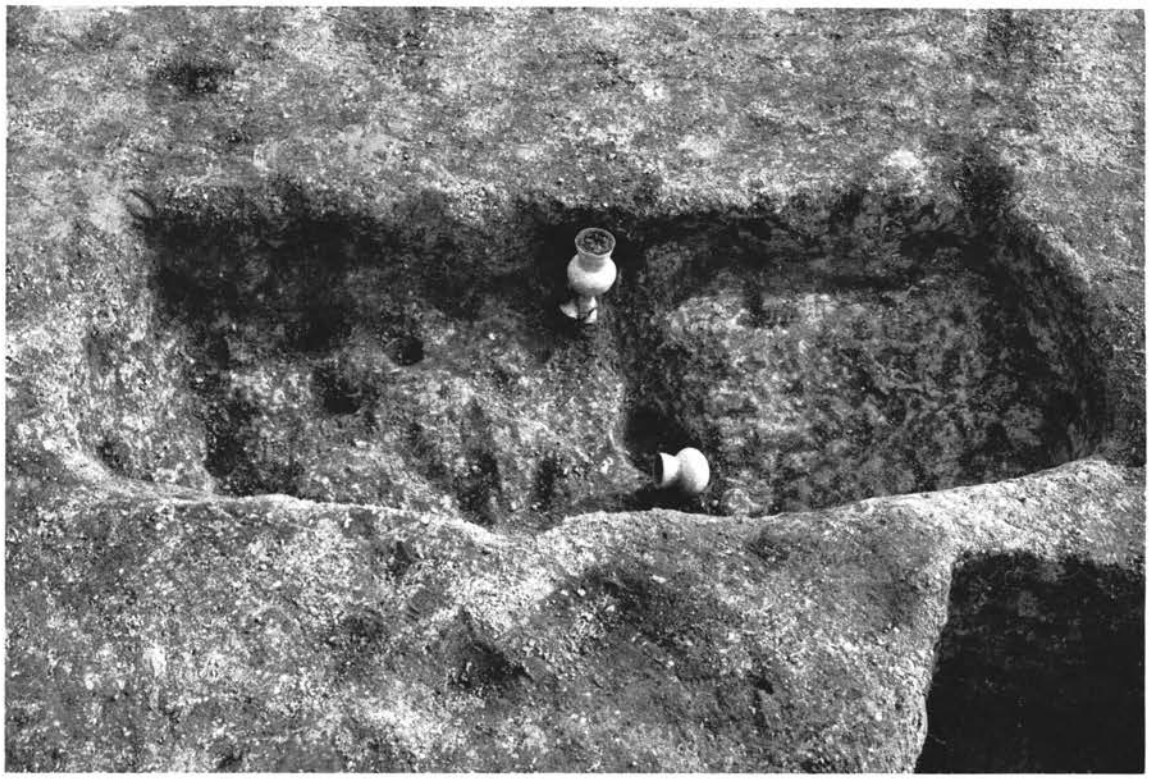


(1) 土壙墓2（東から）

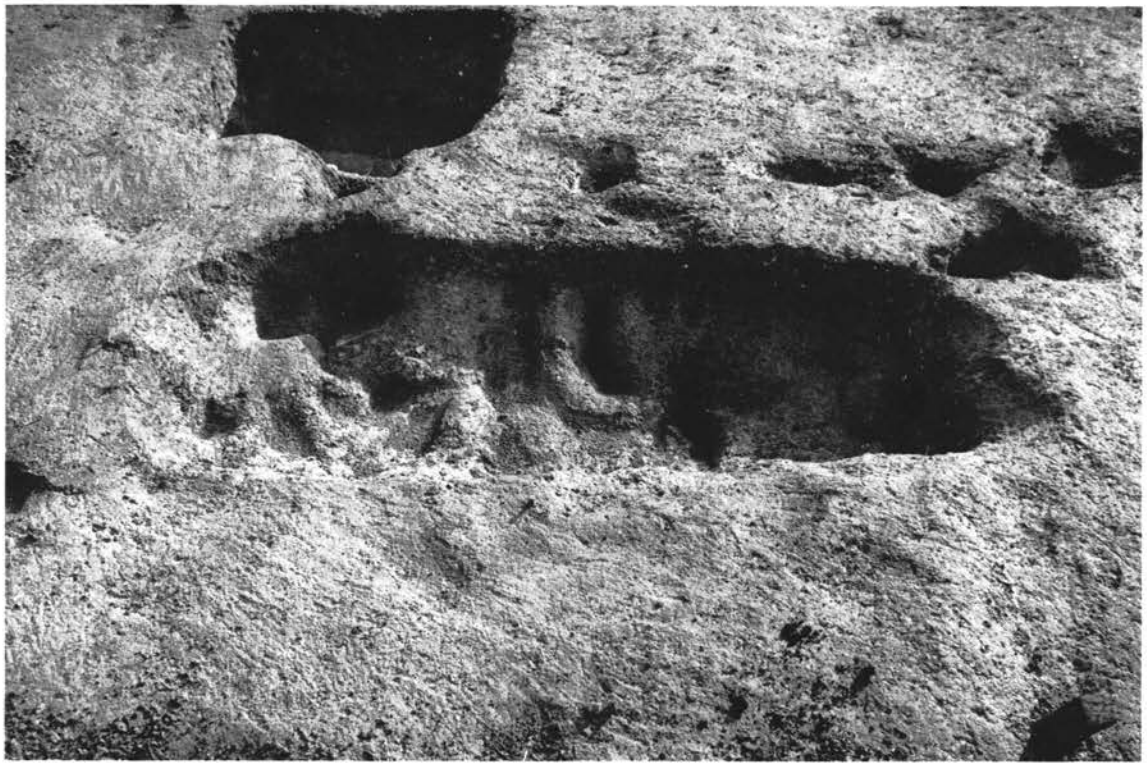
(2) 土壙墓2土器出土状況



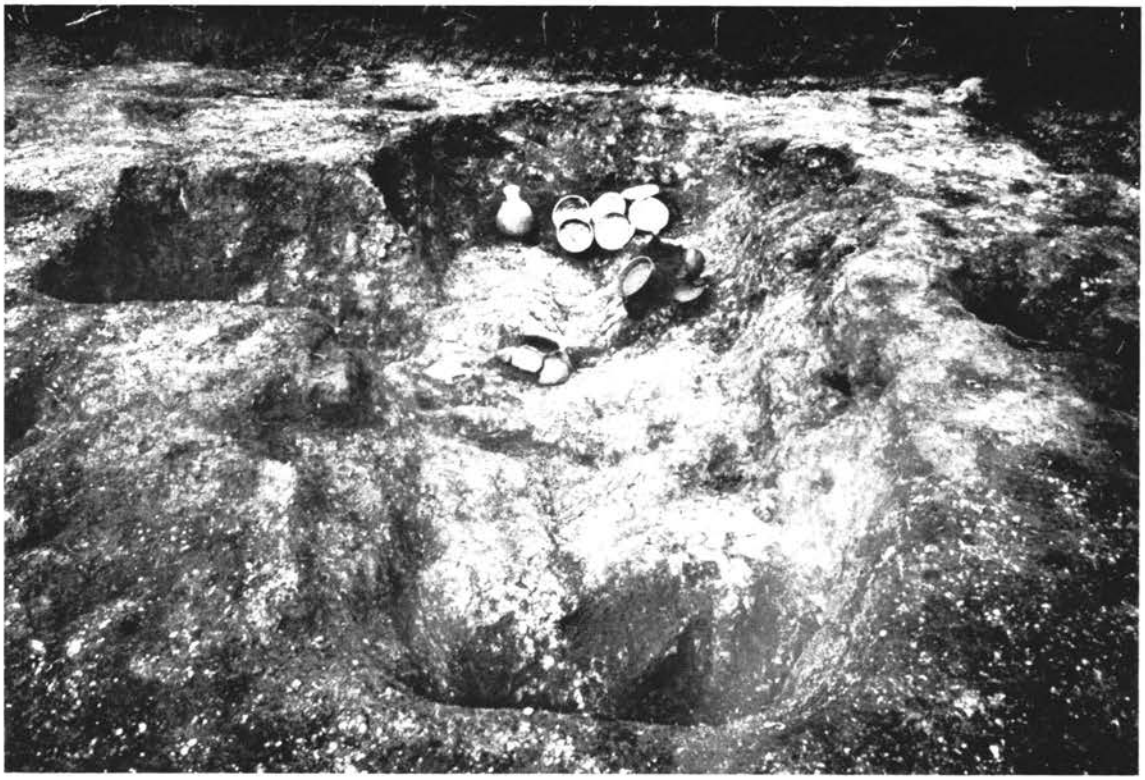
(3) 土壙墓5（北から）



(1)　土壙墓６（北から）



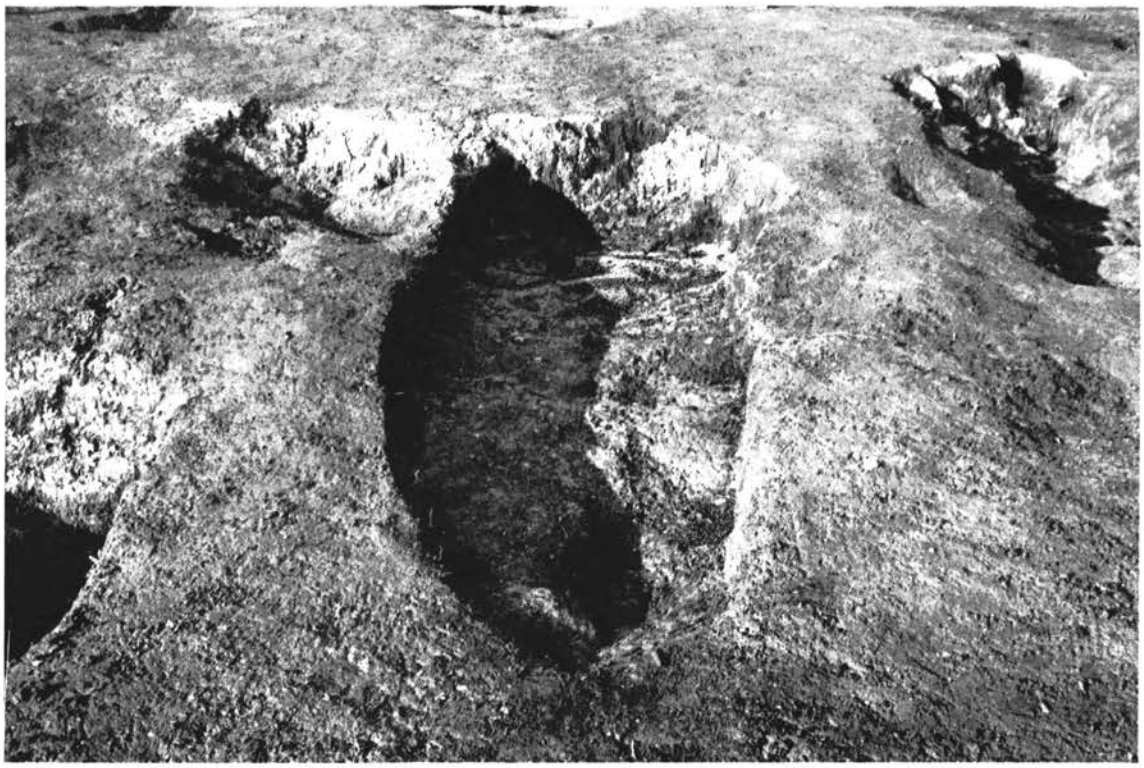
(2)　土壙墓８（北から）



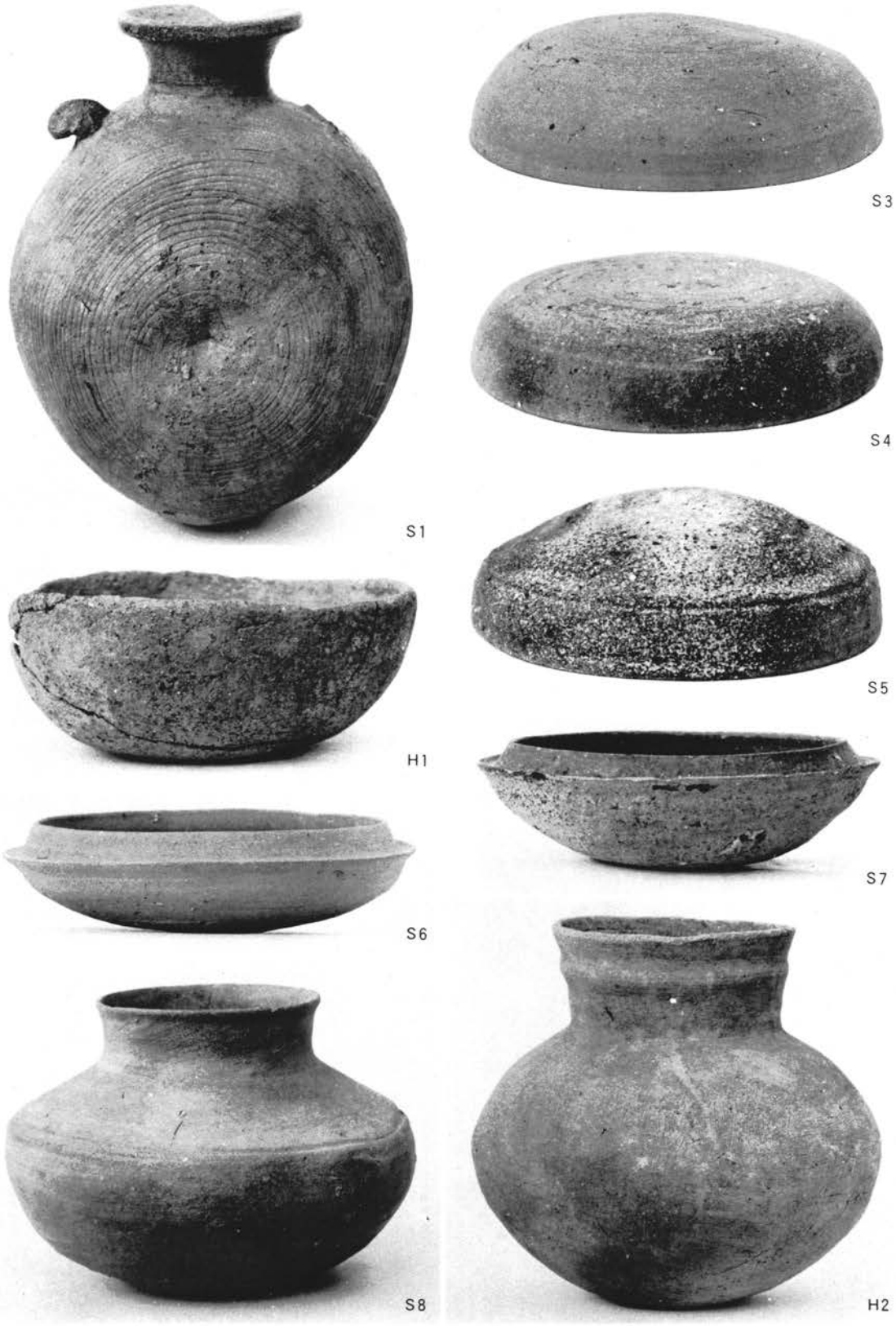
(1)　土壙墓７（南から）

(2)　土壙墓７土器出土状況（南から）

(1)　土壙墓９（南から）



(2)　土壙墓10（南から）



1・2号墳出土土器（S1・H1－1号墳、その他－2号墳）

S9

S14

S10

S12

S11

S23

S15

S18

S24

S21

3号墳出土土器

S 27

S 33

S 30

S 38

S 31

S 39

S 34

S 42

S 46

4号墳出土土器

S 49

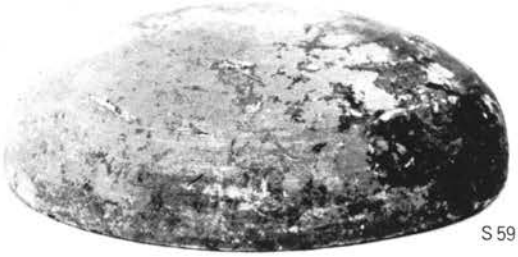
S 50

S 53

S 52

S 58

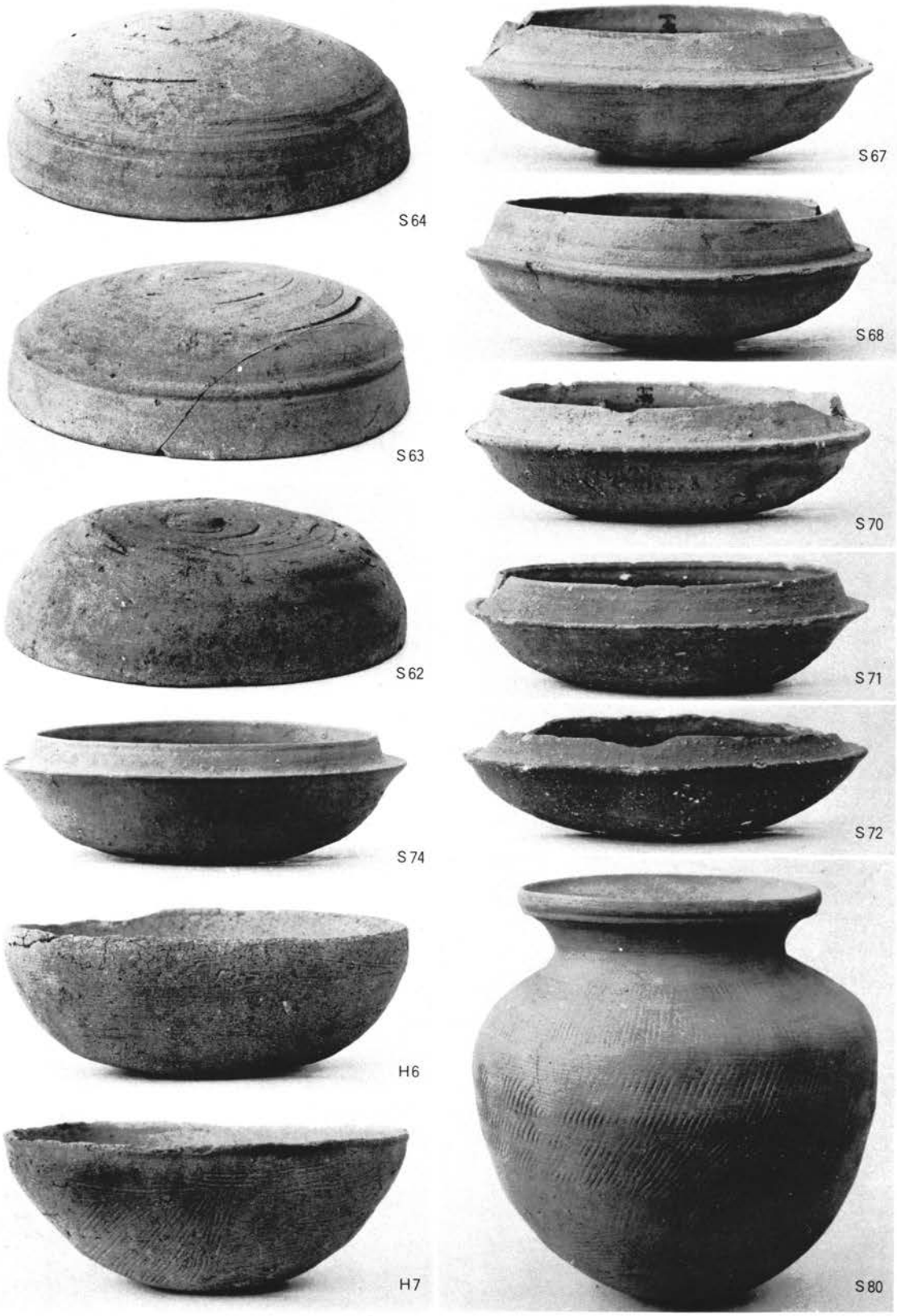
S 55


S 59

S 56

S 60

5・6号墳出土土器（S49・50・52・53・55・56・58—5号墳、S59・60—6号墳）



7号墳出土土器

S79

H9

S81

S82

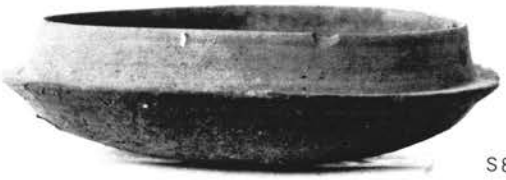
S83

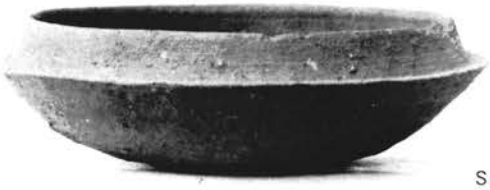
7・8号墳出土土器（S79・81、H9－7号墳、S82・83－8号墳）

S 86

S 87

S 88


S 89

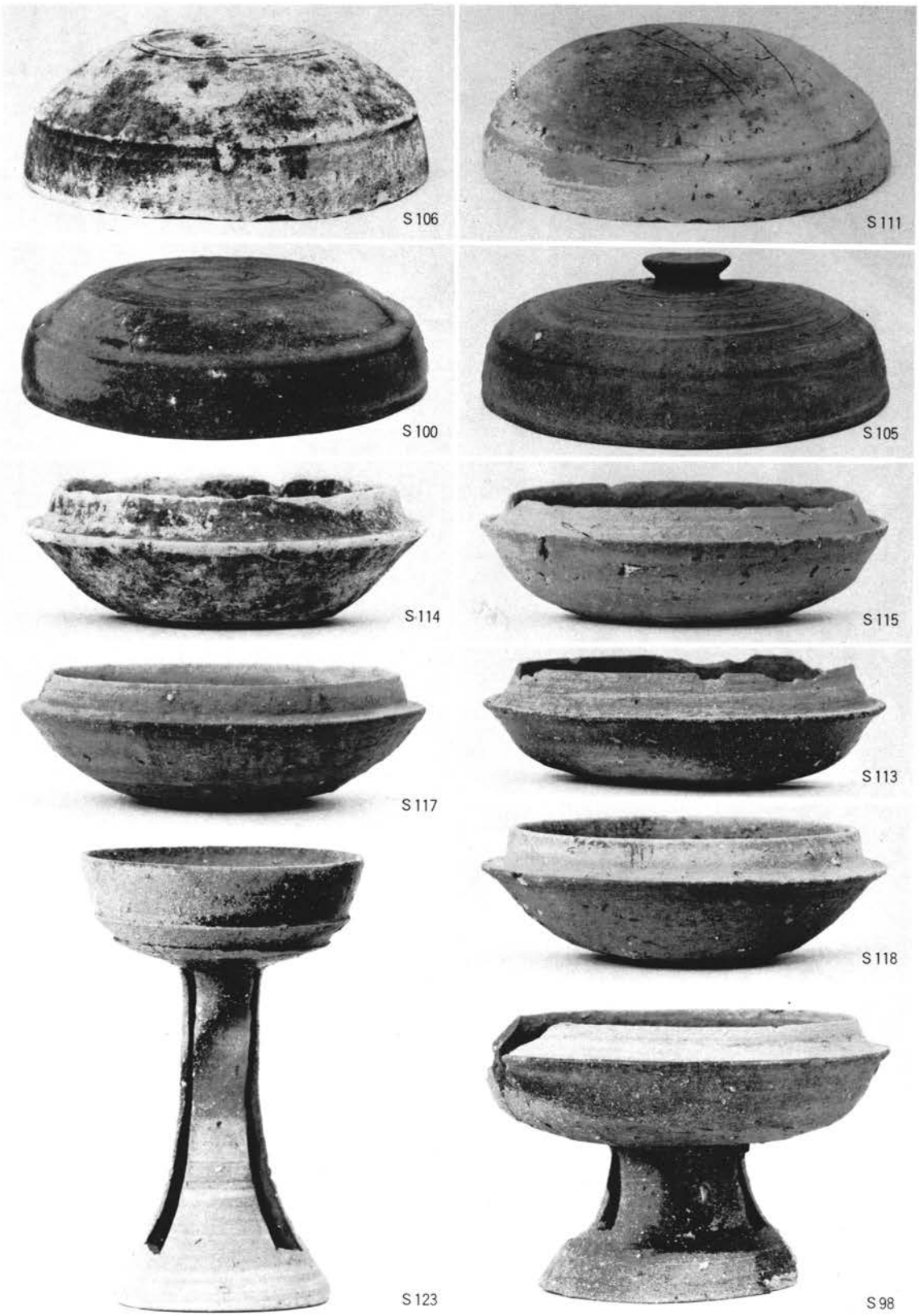

S 90

S 93

S 84

S 94

9号墳出土土器



11号墳出土土器(1)

S97

S96

S99

S124

H18

H19

H14

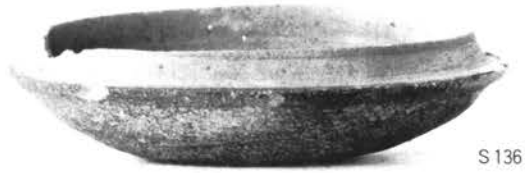
11号墳出土土器(2)

S128

S126

S133

S135


S136

S137

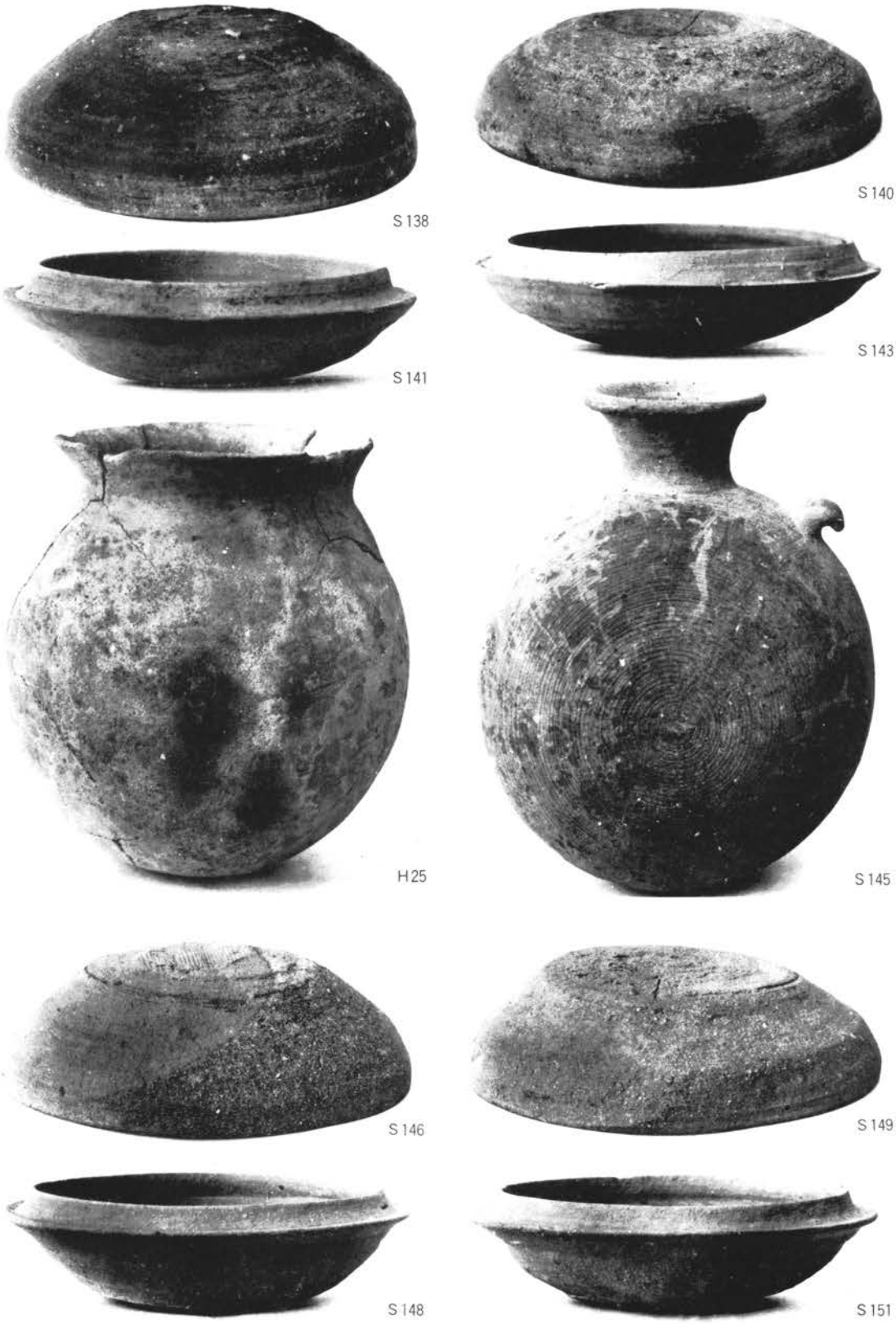
S131

H20

H21

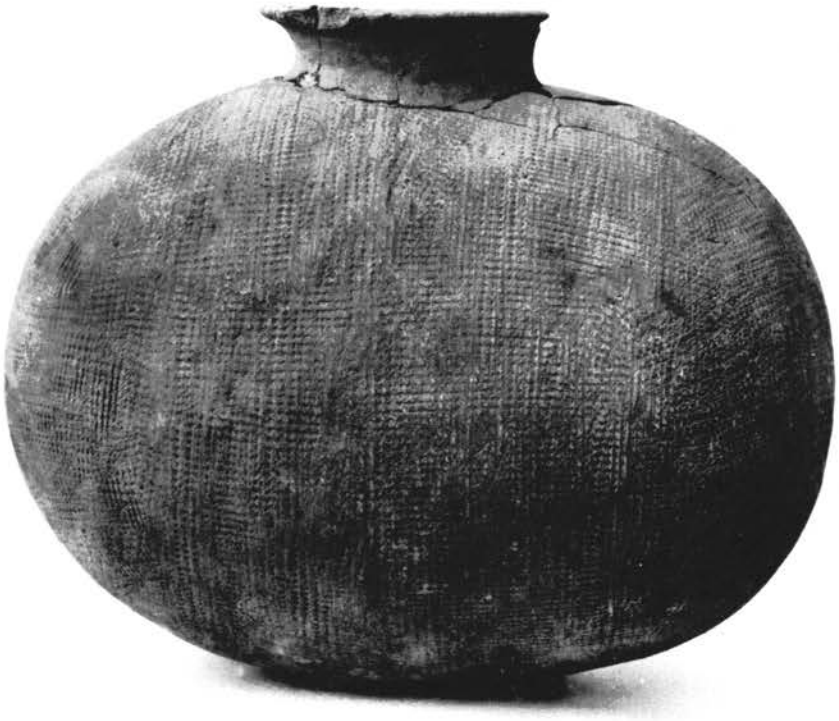
H23

12号墳・1号横穴出土土器（S126・128・131—12号墳、S133・135・136・137、H20・21・23—1号横穴）



2・3号横穴出土土器（S138・140・141・143・145、H25—2号横穴、S146・148・149・151—3号横穴）

S 154



S 166

3号横穴・土壙墓1出土土器（S154―3号横穴、S166―土壙墓1）

S 159

S 161

S 160

S 163

S 157

S 165

S 169

土壙墓１出土土器

S171

S170

H35

S178

S179

S174

S175

S176

S177

S180

土壙墓２・３・４・５出土土器
（S170・171―土壙墓２、H35―土壙墓３、S174～179―土壙墓４、S180―土壙墓５）

S181

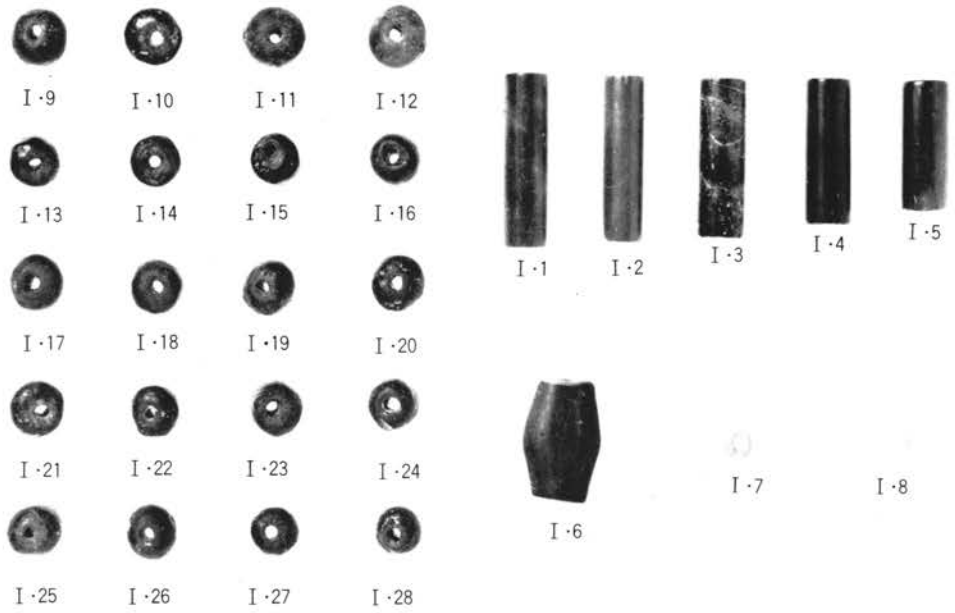
H38

S186

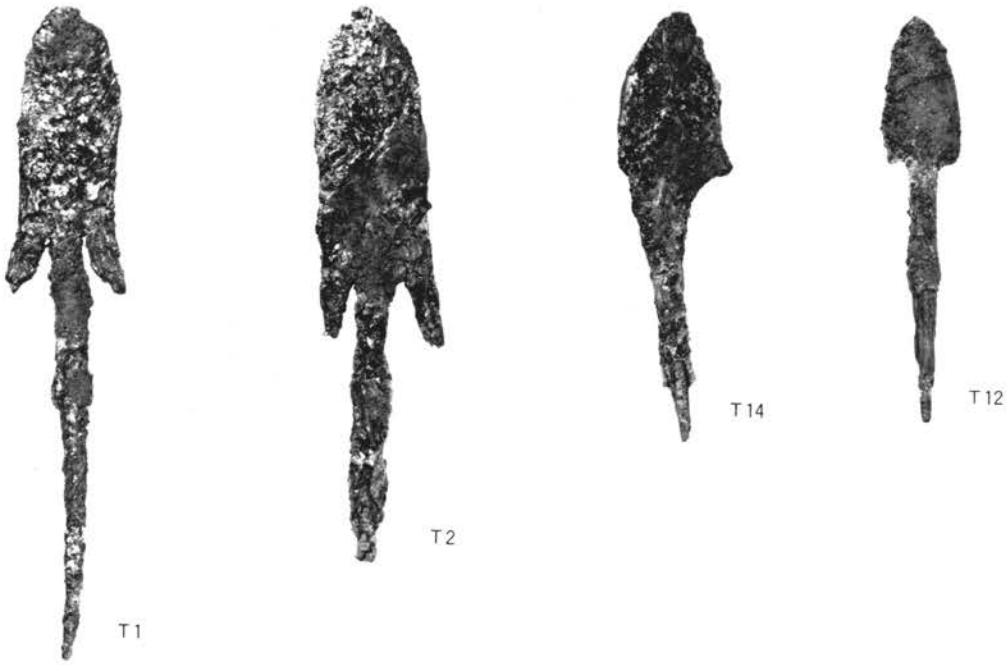
S189

I・29

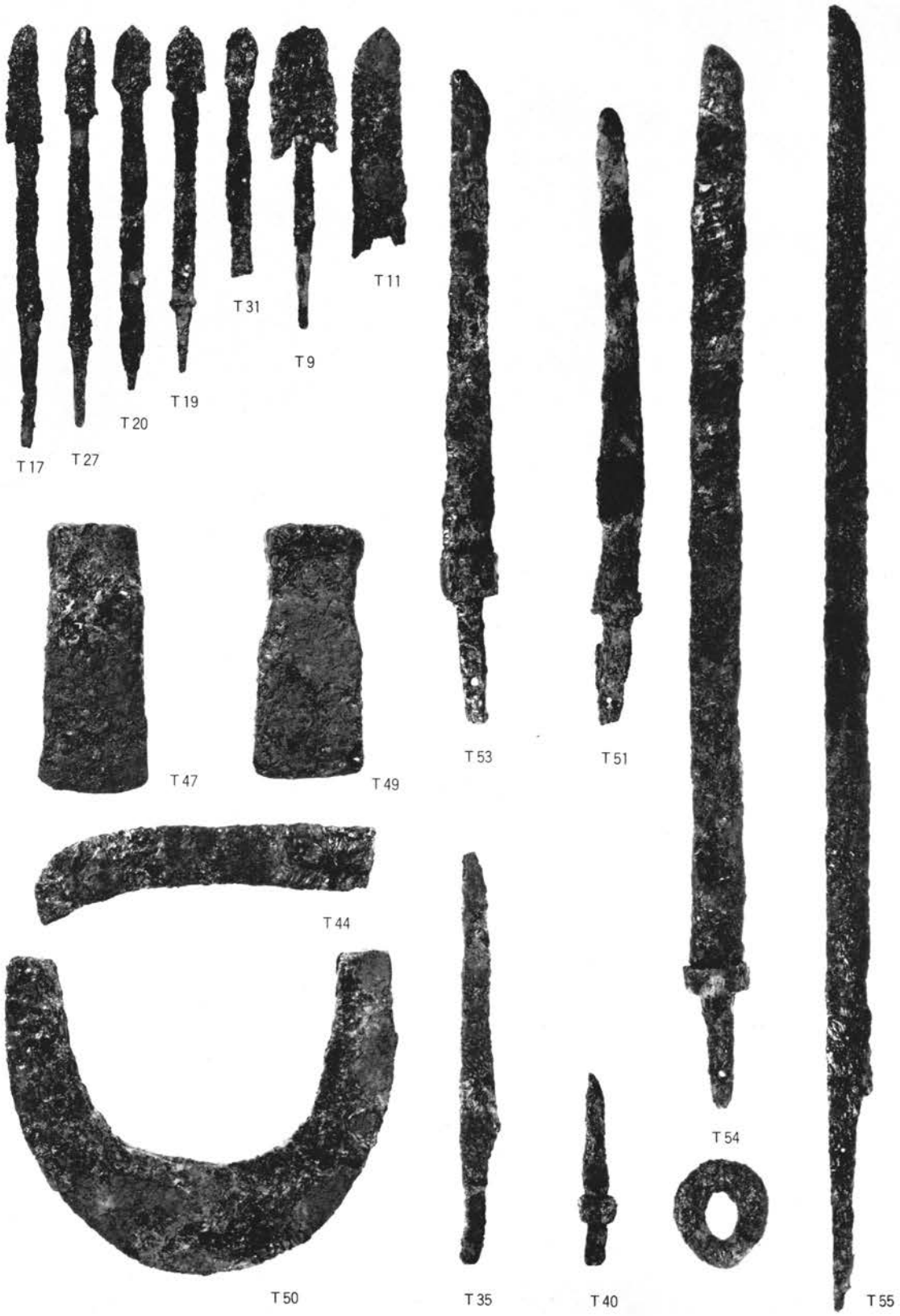
土壙墓６・７出土土器、７号墳出土紡錘車（S181、H38―土壙墓６、S186・189―土壙墓７、Ⅰ・29―７号墳）



(1)　玉類（Ⅰ・1～5－6号墳、Ⅰ・9～28－9号墳、Ⅰ・6～8－2号横穴）



(2)　鉄鏃（T1・T12－2号墳、T2・T14－3号墳）



鉄製品（T47・T44・T50・T51—3号墳、T35—4号墳、T53—5号墳、T55—7号墳、T9・T54—8号墳、T17・T19・T20・T40—9号墳、T11・T27・T49—11号墳、T31—土壙墓7）

京都府遺跡調査報告書 第13冊

平成元年12月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

TEL (075)441-3155（代）